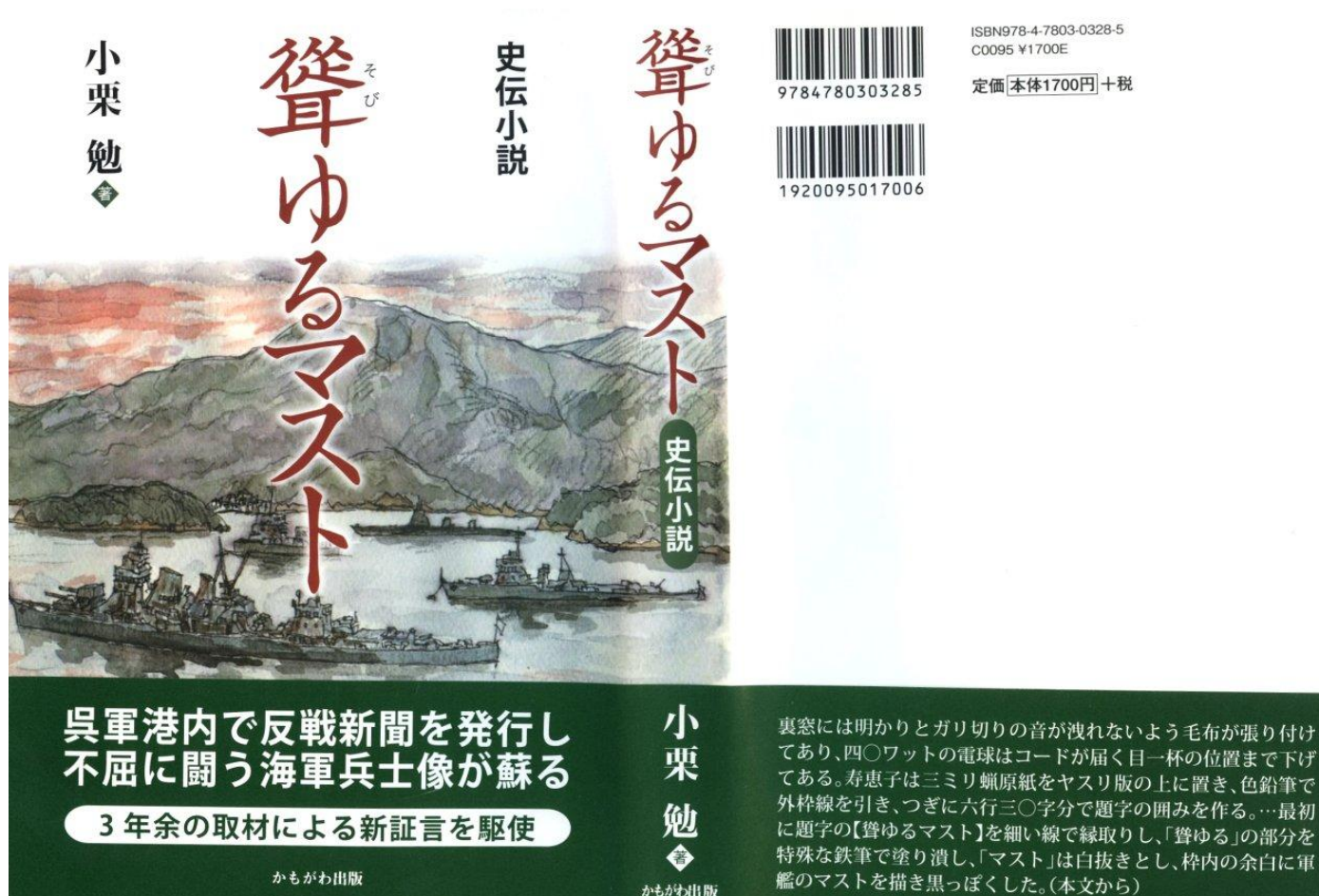


(以下の諸資料は無断転載を禁止します)

史伝小説 聳ゆるマスト 小栗 勉 著

2010 年 2 月 10 日初版第 1 刷 かもがわ出版 定価 1700 円+税



「聳ゆるマスト」は阪口喜一郎の顕彰記念碑 建立運動のなかで日本民主主義文学会呉支部の小栗 勉 氏がこの著作をものされた。

運動の発展を図るため、著作権者と出版社の了解を得て、広く世間に阪口喜一郎たち反戦兵士の活動を知っていただくことを願い、当ホームページに「全文を公開」することになりました。

よい作品だと思われたら、この書物をぜひお買い求めのうえ、蔵書の一部にお加えくださることを願っています。

聳^そび
ゆるマスト

史伝小説

小栗 勉
著

史伝小説

聳^そび
ゆるマスト

小栗 勉
著

かもがわ出版

かもがわ出版

(表紙カバー)

史伝小説

そび
聳ゆるマスト

小栗勉
著

かもがわ出版

(本体表紙の題字)

朝倉邦夫様

二〇一〇年二月

小栗勉

史伝小説

從^そ耳^びゆるマスト

小栗勉 ◆ 著

かもがわ出版

(扉 題名)

史伝小説

聳ゆるマスト



旧日本海軍呉鎮守府庁舎（現海上自衛隊呉地方総監部庁舎）

（扉 挿絵）

もくじ

1		5
2		108
3		130
4		157
5		187
6		207
あとがき		242
資料		247

カバー・扉画
装幀
加藤忠男
中村義友

1

十月中旬の午前十時すぎ、阪口喜一郎と西川照三、平原甚松、山口義次、若林の五人は衛兵の敬礼に送られて呉海軍刑務所の通用門をでた。

門の外では野村梅子が笑顔で出迎えてくれた。

「きてくれたのか」

喜一郎は嬉しそうに梅子の両肩を抱いた。

「ええ、刑務所から連絡があったから」

「えらい迷惑をお掛けしてすんません」

甚松がぴよこんと頭をさげた。

「さあ、帰りましょうか」

梅子は喜一郎に寄り添うようにして歩きはじめた。二カ月ほど監房に勾留されていた五人には刑務所前の松並木の濃い緑や青空はまぶしすぎるほどだった。五人は海軍の制服姿

だったがこの街では違和感をもって見るものはいない。喜一郎と西川照三は明神町の野村甚七宅に下宿しており、刑務所から東方に歩いて十分の距離のところにある。

梅子が戸を開けながら声をかけた。

すぐに母のチサが玄関口にでてきた。

「みなさん、お揃いでよくお帰りになりました。さあ、遠慮せずにお上がりください。部屋はきれいにしておりますから」

喜一郎はその声に押されるようにして階段を上がり、陽光が差しこんでいる道路際の六畳間に座った。軽い足音がして梅子がお茶を運んできた。そして「はい、ごくろうさま」と言いながら各人の前にそれを置いた。

「うまい！ 梅子さんが淹れるお茶は絶品や」

喜一郎が明るい声で言った。

その一言で灰色の影を引きずってきた部屋の空気が一変した。

「さて、これからどうするかだ」

喜一郎はそう言って四人の顔を見回した。

「憲兵隊留置場での拷問と、海軍刑務所での一週間に二度の水風呂と高温風呂に交互に入れられるなどの拷問にも耐え、我々は完全黙秘をつらぬいた。この不屈の精神を生かして社

会科学研究会を再建したいと思っているんだが」

「そりゃあ、やらにゃいけんでしよう」

甚松がすぐに賛同し、山口も若林もうなずいた。

「照やんはどうや」

「そうやな、社研の再建には賛成するけど、メドがついた段階で三重の郷里に帰り、実家の農業を手伝ったり炭焼きでもして暮らそうと思ってるんや」

出所してから少し生気がないと気にはしていたがやはりだめか。喜一郎にすれば照三は新設された潜水学校の同期であり、二等機関兵曹としてこれまで同じ釜のめしを食い、野村甚七の家に下宿するときも一緒だった。そんな関係で彼は社研の創立時の中心メンバーで、仲間内では頭の切れる理論家として一目置かれ、喜一郎とはこれまで何度も熱い議論をたたかわせてきた仲だった。その親友が離脱するのは残念だが、これからの運動の危険度を考えると無理に引き止めることはできなかった。

「私はこれからも会員として協力しますからね」

それまで黙って話を聞いていた梅子が言った。

「さて、そうになると社研の教材だが、梅子さん、そこにあった本はどうなった」

喜一郎は壁際に立てかけてある空っぽになった小さな本箱を指さした。

「あのね、喜一郎さんたちが逮捕されてからうちも大変だったのよ。数日後に警察官が大勢やってきて家宅捜査が始まり、私が定期購読していた『戦旗』が見つかった。これは誰の本だと訊くから私が定期購読していると言ったら、これは国禁の本だ、ちよつと署まできてくれと言われ、取調官からあれこれひつこく訊かれてね、今度こうゆう本を持っているとただではおかんぞと脅され、その日は留置場に泊められてしまった」

「そんなことがあったのか。特高刑事の連中だな」

「でもね、喜一郎さんたちが逮捕された直後に、同期だという水兵さんが二人ほど駆けつけてくれて、特高の手柄になるような本は全部持ち出してくれた。そしてその人たちが警察にきて私を貰い受けてくれたの。いわばその二人の兵隊さんは喜一郎さんたちとわたしにとつては恩人なの」

「名前は聞いたのか」

「一人は富山出身の同期生だと言っていたけど、もう一人の名前は忘れたわ」

「そうか、仲間が気をきかせてくれたお陰で無罪放免となったわけだ」

しみみりした口調で喜一郎は言った。

「それともうひとつ知らせておかなければならないことがあるの。喜一郎さんは知ってると思うけど、うちの父はそういうのって嫌いでしょ。我が家からアカを出してしもうて世間

さまに申し訳ないとふさぎこんで、持病の心臓を悪くして寝込んでしまったの」
暗い顔で梅子が話した。

「それは申し訳ないことをしたな」

「ううん、いいのよ。喜一郎さんたちは悪いことをしたわけじゃないんだから」
梅子はつとめて明るい声で言った。

「ところでこれからのことだが、山口さんと若林さんは原隊復帰だから問題ないとしても、問題は甚松さんだよな。安い俸給とはいえ除隊処分で今月から貰えなくなるわけだから」

喜一郎は甚松の顔を見ながら言う。

「三食付きで月十一円。それが無くなるわけじゃけえたちまち今月末から困る。ほいじゃが実家は近くの豊田郡の大崎上島じゃけえ、うまいこと理由をつけて送金してもらおうようにしますよ」

甚松は細面の頬を撫でながら応えた。

喜一郎は腕時計を見た。いつのまにか十二時を過ぎている。昼食について梅子が口にしないのは母のチサに遠慮があるのだろうと思った。

「どうだ、話はこのくらいにしてひさしぶりに東泉場にでて昼飯でも食べるか。出所祝い

でわしが奢る。梅子さんもな」

六人は一階の野村夫妻に声をかけて家をでた。しばらく東に向かって歩き、南に向きを変え道路を渡れば東泉場の北口となる。喜一郎は雑踏の中であつても時折うしろを振り返る。特高の尾行を警戒しているのだ。

昼過ぎの東泉場は賑わっていた。喜一郎たちは六人が座れる大衆食堂に入りランチを注文した。しばらくして湯気の立っているランチがテーブルの上に置かれた。箸を手にした五人は貪るように食った。

「ああ、娑婆のめしは旨い！」

最初に箸を置いた山口が言った。

食事後、喜一郎は私服の尾行に気をつけるよう注意し、甚松、山口、若林の三人と握手を交わして別れた。

その三日後、喜一郎は宮原通付近の高台に立ち、埠頭に着岸している艦や港内に碇泊している艦形を眺めていた。望遠鏡がないから艦名までは分からないが、それでもおよその艦種は識別できる。とはいえ呉鎮守府の所属している艦船は戦艦三隻、一等巡洋艦十三隻、二等巡洋艦九隻、航空母艦一隻、海防艦一隻、潜水母艦・施設艦各二隻、特務艦七隻、一等駆逐

艦十八隻、二等駆逐艦十三隻、一・二等潜水艦十八隻、その他掃海艇や練習艦などを入れると九十隻近くに及ぶ。しかし全艦が集結するのは正月くらいのもので、日常的には艦隊別に外洋で演習している。

喜一郎は社研のメンバーが乗っている艦の有無を確認するとその場を離れ、街の中心地に向かって歩きはじめた。その途中、今日が日曜日であることに気がつき、久しぶりに呉海兵団にいたころ世話になった教官宅を訪ねることを思いたった。

喜一郎は海軍病院に近い官舎が立ち並んでいる一角に立ち玄関戸をノックした。

玄関戸に出たのは教官夫人だった。喜一郎は氏名を名乗り教官との面会を求めた。すぐに応接間に通された。

「教官殿、突然お邪魔して申し訳ありません」

喜一郎は敬礼しながら言った。

「久しぶりだな。まあそこに座れ」

喜一郎はソファに浅く腰掛けた。

「阪口、除隊処分になったらしいな」

応接間のソファに腰をおろすとすぐに教官が言った。

「もう知っておられるんですか」

喜一郎は驚いたような顔をして教官を見た。

「赤化信奉者の烙印を押されて除隊処分を受けるような事件は滅多にあるわけじゃないからな。それでこれからどうするつもりだ」

「実家のある伯田村に帰っても仕事はありませんので、この街で仕事を見つけようと思っています」

喜一郎は殊勝に応えた。

「そうか、それで下宿先の例の娘さんはどうなっている」

「はあ……」

「結婚のことだ。好きなんだろう、あの娘さんを」

喜一郎は一瞬言葉に詰まった。

「わしが口を利いてやってもいいと思っているんだが」

「しかし私は海軍を追放されたばかりで、結婚しても彼女を養っていくことはできません」

「なあに、貴様のことだ、すぐに仕事は見つかるさ。心配せんでもいい、わしに任してくれ。よければ次の日曜日にでも訪ねるとするか。阪口の都合はどうだ」

いやとは言わせぬ口調だった。

「はい。家に居るようにします」

「よし、来週の日曜日、何時にするか」

「野村家の都合もあると思いますが、そうですね、午前十時ころがいいのではないかと」話が決まったのを待っていたように夫人が紅茶を運んできた。いままで味わったことのない高級品だった。独特の芳香と苦みが口中に広がり、透き通った茶色の液体が喉元を通り過ぎていく。喜一郎は紅茶と教官との雑談を愉しみ、しばらくして家を辞した。

その日の夕暮れ、下宿に帰った喜一郎は洗面道具を手近くの銭湯に行った。

汗を流し、浴槽に浸かる。体全体が温まってきて一日の疲れがほぐれていく。銭湯通いは一週間にわたるが、憲兵隊の留置場で受けた拷問による背中や太股の殴打跡はいまだに赤紫色に腫れ、刑務所の監房で南京虫や虱に噛まれた赤黒い斑点はいまも体中にひろがっている。最初のうちは衆人の眼を気にしていたが、いまはもう慣れてしまっている。

銭湯から帰り、丹前に着替えて茶の間に降りた。

「今日も一日中歩いたんでしょう」

梅子は喜一郎が座るのを待ってから言った。

「艦から下りると情報がまるで得られん。困ったもんだ」

「さあ、一杯どうぞ」

銚子を持った梅子が言った。

「あれっ、酒は頼んだ覚えはないぞ」

喜一郎は怪訝そうな顔をして梅子を見た。

「わたしの奢りよ。喜一郎さんは海軍を首になって無収入になったんだから」

喜一郎は梅子についてもらった杯の酒を一気にあおった。

「ふうっ、うまい！」

たてつづけに数杯飲んだ喜一郎の頬は少し赤らんできた。

「そりゃそうと梅子さん」

喜一郎はすぐに改まった表情になり、海兵团で世話になった教官とのやりとりを小さな声で伝えた。

「梅子さんの気持も聞かず勝手に決めてしもうて申し訳なく思うとる」

喜一郎はそう言つて頭を下げた。

「いい人なんじゃね、その教官さん。いいなあ、海軍さんは情が濃くて。それで喜一郎さんは私でいいわけ？」

「そりゃもちろんじゃ」

「お父さんとお母さんには私から話しとくから」

梅子は嬉しそうな顔をして言った。

食事が終わると二階に上がった。あらためて部屋の中を見回してみると殺風景なものだった。帰郷した西川照三の荷物はすでになく、自分の着替えが入っている中古の牛皮製旅行鞆と小さな本箱があるだけで、下士官の俸給が安いとはいえ艦の生活にどっぷり浸かっていたかがよく分かる。

その夜、喜一郎は寢床に入ってもなかなか寢付かれなかった。教官の言葉につられて梅子と結婚する仲介を頼んだが、梅子の父親の甚七は病弱なうえ、保身的でアカ嫌いだった。母親のチセもそれほど好意的であるとはいえず、結婚までそうすんなりといかないように思われる。そのこととあわせ心配なのは、結婚と運動がうまく両立するかどうかだった。喜一郎は結婚したとしても、社研を軸にした反戦と下級水兵の待遇改善をはかるという運動は止めるつもりはまったく考えていなかった。これまで社研の学習会では河上肇の『社会主義論』や『貧乏物語』、『経済学大綱』、日本海軍発行の『陸戦隊操法』、クラウゼヴィッツの『戦争論』などで議論し、『戦旗』に掲載された小林多喜二の「一九二八年三月十五日」「蟹工船」などを読んできた。そのおかげで思想は少し豊富になったが、情勢は予想を超えて進行しているような気がする。拘禁中に始まった満州事変と称する中国東北部への侵略戦争はますます拡大している。このまま事態が推移すれば海軍にも出動命令が下り、陸と海からの両面

作戦が展開されるのは明らかだった。早く手を打たなければ上層部の命令によって前線で戦う兵士たちに犠牲者が出ることは避けられない。社研に結集している我々がいまやるべきことは兵士たちに戦争の本質を知らせ、中国への侵略行為に荷担せず、戦争反対の声を上げさせることにある。

そのためには今年の冬に呉工廠の労働者が闘ったような組織と指導部を早急に確立しなければならぬ。喜一郎は四千人近くにおよぶ呉海軍工廠の大量解雇に反対する沢山のビラが出勤途中の労働者に手渡され、住宅地に撒布され、その運動に協力した本屋の若い店主が特高に逮捕されたという新聞の記事をふと思い出した。その若者は不起訴処分となったが、事件以降は〈赤い本屋〉として有名になり、子どもたちが覗き見にくるのだという噂を耳にしている。

いま必要なのは先を見通せる経験豊かな共産党指導者だと喜一郎は結論づけた。しかしその共産党は政府によって非合法とされ地下に潜っている。どうすれば接触できるか皆目わからない。ただ考えられるのは一カ所だけ。そこに接触を試みるほかに手だてはない。

翌朝、喜一郎は梅子に赤い本屋と言われている田中書店の場所を鉛筆で書いてもらい、昼過ぎに歩いて中通を南下した。場所は中通二丁目、堺橋筋の電車通りだった。予想より大きな構えで、看板の上方に友田誠真堂支店、真ん中に大きな字で田中書店と書いてある。喜一

郎は出入口付近に平積みされている雑誌を避けるようにして店内に入った。書棚には海軍各分野の兵士用の学習書が沢山並べてある。喜一郎は文学書の棚から一冊ぬきとり、そのページをめくりながら店主の顔を窺った。年は二十代半ばで背は高くないが眼に輝きがある。結局その日は雑誌を一冊買って店をでた。

二、三日してまた田中書店に行き、帳場近くに人がいないときを見計らい、文庫本を一冊渡しながら「相談したいことがあるのでオヤジさんに会わしてくませんか」と低い声で言った。店主は上目遣いにちらっと喜一郎の顔を見たがなんの反応も示さなかった。

つぎの日は梅子をやり店主の反応を待った。

そんな日が一カ月近くつづいた。喜一郎はもうあきらめかけていたが、これが最後だと自分にはいいきかせ、「どうしてもオヤジさんに会いたいのですが」と声をかけた。店主はちらっと周囲を見回し、早口で囁くように「この店は前の旅館の二階から特高に見張られています。用事があるんでしたら用件をメモにして平積みにしてある雑誌の間に挟んでください」と言った。

その日の夕刻、田中豊は弟に店番をまかせ、呉地区党オルグ寺尾一幹のアジトに行き、元水兵らしい三十近くの男がひんばんに出入りし、「相談したいことがあるのでオヤジに会わせてほしい」と言っていることを伝えた。黒縁眼鏡をかけた寺尾は右手で顎を撫でながらし

ばらく考えていたが、「よし、会ってみよう」と言った。

「日時はいつにしますか」

「早いほうがよいだろう。いつもの喫茶店でな」

メモのやりとりがあり、数日して姿を現した喜一郎に田中豊は目配せし小声で言った。
「これから案内します。店の前の電車通りを渡り、百メートル先の角で待っていてください」

喜一郎が店を出ていくのを確認した田中豊は弟に留守番を頼み、特高の監視を避けるため裏口から出て路地裏をぬけた。

落ち合った二人は他人のようなそぶりをして中通の喫茶店に向かった。目的の喫茶店につくと田中豊は、入口付近で張り番をするからと、喜一郎だけ中に入るよう勧めた。テーブルが十脚ほどある店内の一番奥のカウンター近くに黒縁眼鏡を掛けた二十代半ばと思われる着流し姿の男が座っていた。手招きされたのでその男の前に腰掛けた。

喜一郎は名前を告げてから、日本共産党と連絡をとろうとしている理由を手短に話した。
「二年前から軍隊内で数人の仲間たちと一緒に社会科学研究会を創立し勉強をつづけてきましたが、今年の八月、憲兵隊に治安維持法違反容疑で逮捕され、軍法会議の審理で五人のうち自分をふくむ三人が赤化信奉者として海軍を追放されました。しかし釈放された直

後にひらいた会議で社研の再建を確認し、これから軍隊の内外で連携した運動を展開することになりました。そのためには共産党の指導を受ける必要があるということになり、自分が党との接触の任務を与えられ、赤い書店といわれている田中書店に出入りしていればいつか会えるのではないかと思っていたわけです」

真剣な表情で話を聞いていた寺尾一幹ははじめて口をひらいた。

「軍隊内で社研グループを結成し勉強をしていたと言われましたが、これは称賛に値する行動です。もう少しはやく知り合いたかったですね。それで阪口さんは入党の意思があるのですか」

「もちろんです」

喜一郎は即座に応えた。

「わかりました。あなたの入党については私の責任で中央に連絡しますので安心して下さい。私のほうが少し若いようですが、これからは同志です。ペンネームは大形宗太郎としていますが、本名は寺尾一幹、呉地区担当オルグです。では阪口さんの入党を祝して握手を！」

寺尾は逞しい腕を伸ばして握手を求めてきた。喜一郎にとって記念すべき瞬間だった。「繁華街にある喫茶店での長話は危険です。あとの話は後日べつな場所です。三日後に田中

書店にメモを渡しておきます。以降はそれにもとづいて行動してください」

喜一郎は寺尾にうながされるようにして残りのコーヒを飲み干すと店をでた。入れ替わるようにして田中豊が寺尾の前に座りながら、

「どうでしたか」

と訊いた。

「大丈夫、彼は信用できる男だ。三日後の午前中、寿恵子にメモを持たせる。もう少し協力してくれるか」

「わかりました」

田中は返事をするらずぐに席を立った。喫茶店をでて、店に帰るため中通を下りながら、党オルグに紹介したのは何者なんだろうと思っていた。年は三十前、端正で引き締まった顔は意志の強さを表していた。今年の二月、呉海軍工廠が発表した大量解雇反対の闘争の指導を求めて、大阪にいた呉出身の古末憲一に手紙を出し、官憲の眼をかくぐって来呉してもらった。そのとき古末憲一に引き合わせた、工廠で働いているインテリ風の川窪鉄之助、いかにも役付きらしい風貌の重田安一、若さが漲っている蒲田正雄、片岡義夫、亀田勢らとはまったく違う雰囲気漂わせていた。彼はこれから何をしようとしているのだろうか。

その喜一郎は清水通で下宿している平原甚松の家に向かっていた。

軽くノックする。すぐに甚松の顔が覗いた。

甚松は喜一郎を自室に通しながら、いま帰ったところだと言った。

喜一郎は座卓の前に座ると、家人の耳に届かない程度の声で、ようやく党のオルグに会うことができたことを伝えた。

「どんなタイプの男でしたか」

甚松が意気込んで訊いた。

「わしより少し若い切れ者の感じだ。その場で入党を許可されたぞ」

「阪口さんに先を越されてしもうたか」

甚松が悔しそうな顔をした。

「慌てることはない。近いうちに隠れ家で会うことになっている。それより社研のメンバーとの連絡はうまくいつているのか」

「私服の尾行を気にしながらのことじゃけえ、なかなかかどりません。はいじゃが今年中には全員と連絡がとれるんじゃないかと思えます」

「党との連絡がついたとなると事態が動き出すのは早いような気がする。わしのほうも急ぐつもりだ」

喜一郎の顔には自信と闘志がみなぎっていた。つぎに会ったとき党オルグがどんな指導

方針を示すか、理論から実践に向かうことを待ち望んでいたのだ。

「じゃ、体に気をつけてな。党オルグとの段取りがついたらすぐに連絡するから」
喜一郎はすつくと立ち上がった。

外に出るとあたりはすっかり暗くなっていた。喜一郎は周辺の道路を見透かすようにして、ゆつくりと自宅に向かって歩き始めた。

家では座卓の上に料理を並べて梅子が待っていた。六畳と四畳半に三畳間しかない狭い家ではあるが家具のすべては新品だった。

約束した通り、十月末の日曜日の午前十時前、教官は和服姿で野村家にやってきた。

甚七は布団から起きあがり普段着に着替えていた。教官は下座にすわり、呉海兵団で新兵の教育を担当していることを甚七とチサに説明し、教育や訓練内容をざくばらんに話した。梅子がお茶を運んできた。

「娘さんは県女を卒業しておられるとのこと、ご両親の期待の大きさが分かるような気がします。しかしこの阪口君もなかなかの勉強家であることを少し話しておきたいと思います。ご承知かとも思いますが呉海兵団は六月一日と十二月一日が入団日になっており、訓練期間は五カ月です。団長は少将または大佐、その下に九十人の下士官がいて、約五千人の

志願兵や徴募兵の教育にあたります。その大勢の新兵が教官から教わったことをどれだけ理解しているかを試す試験があるのですが、阪口君は科目別の成績でも実地訓練でもいつもトップクラスに入っていました。それで私も目をかけていたわけです。私の目に狂いはなく、彼は海兵団はもちろんのこと、それにつづく機関学校も潜水学校も優秀な成績で卒業し、十年間で二等機関兵曹になりました。こういう例は滅多にないことなんです。ただ残念なことにもこのたびは赤化信奉者ということで海軍を除隊になりましたが、彼は民間人として立派に通用する能力を持った男です。阪口君の話によれば娘さんも彼を好いているようですから、ここはひとつ二人を結婚させていただきたい、そう思っただけで今日は参上した次第です。どうかよろしくお願いいたします」

話し終えると教官は両手をついて頭を下げた。

しばらくしてチサが呟くような声で言った。

「教官さんはそう言うってくださいますが、私どもは軍人と結婚さすため娘を県女に行かせたんではないんです。それにうちの人はアカは嫌いな性質ですからね。すんなりとハイと言うわけにはいかないんです」

「それはそうだと思います。それでどうでしょう。阪口君には今後一切アカの運動はしないという約束をしてもらう、そういうことで折り合いをつけてもらえないでしょうか」

教官がチサの顔を見ながら言った。

「でもねえ、いったんアカという烙印を押されたら世間様はそういう目で見ますからねえ」

「しかし起訴されたわけじゃないんです。ですから周りの人には話をすれば理解してくれるんじゃないかと思うんですが」

「可愛がってきた娘までが警察に引っ張られたんですからね。そう簡単に言われても……」
チサはなおも愚図っている。

「お父さん、いま言ったように阪口君には今後一切アカの運動はしないという約束をしてもらう。それで許してやってもらえませんか」

教官は渋い顔をして座っている甚七に言った。

「うむ……」

甚七は黙ったままだ。

「阪口君、誓ってくれるよな」

「はい」

神妙な顔をして喜一郎は頷いた。

「お母さん、ご迷惑をお掛けしましたが、私からもお願いします」

梅子は両手をつき、ハンカチで涙を押さえながら両親に向かって頭を下げた。

愚痴をいっぱいこぼしながらも、チサは喜一郎と梅子の結婚を承諾した。しかし入籍証明書への署名は拒んだ。軍人と姻戚関係になるのを嫌うささやかな抵抗のように思えた。

結婚式は甚七が病弱だということもあり、十二月初旬の吉日に野村家で執り行なわれた。仲人は教官夫妻、梅子の実家である金子家からは戸主の威馬三と妻、まだ嫁に行っていないかった妹の幸子が出席したが、喜一郎の兄である米太郎は多忙を理由に顔を出さなかった。内輪の結婚式なので角隠しはつけていなかったが、梅子は一番気に入っている和服で着飾り華やかで美しかった。喜一郎も羽織袴を身につけていた。

三三九度の盃は幸子が注いだ。順番に盃に注がれた酒をのみほす。

チサは梅子の晴れ姿を見ながら時折ハンカチを目に当てた。広島白島で寺の住職をしていた父の威馬三の家には子供が八人もいて、そのうちの三人は女の子だった。不景気が続く世の中だったから金子家の暮らしは貧しく、チサは子供を授からなかった。次女の梅子を養女にして、それから二十年が過ぎている。梅子は女の子だからいつかは嫁に行くことは覚悟していたが、それが現実になってみると、心の中に空洞ができたような寂しさがこみあげてくるのだった。

結婚式はあっけなく終わった。新婚旅行に行く予定はなかったので、内輪の宴がお開きになってから、梅子と喜一郎は別室で普段着に着替え、和庄町に借りた新居へと向かった。家は周旋屋が斡旋してくれた物件の中から、平屋の一軒家で裏口のある家を選んだ。

チサは入籍するための署名は拒んだが、花嫁道具一式を買い揃えてくれた。その真新しい家具が届くと古びた家の中は一変して華やかな雰囲気包まれ、梅子は箆笥や鏡台に触れながらはしゃいだ。

しかし世帯を構えたからには生活費を稼がなければならない。二人は結婚式を挙げた数日後、駅前近くにある職業紹介所に行き、梅子は中通八丁目の日の丸百貨店、喜一郎は生命保険会社の面接を受けた。数日後、二人に採用通知が届いた。

県女を卒業していたからといっても梅子は二十三歳になっていることもあり、売り子としての採用で、賃金は安く、勤務は午前と午後の二交代制だった。喜一郎も中途採用の二十九歳、月々の契約額で手取りが査定されるから足で稼がなければならない。それがどんなにしんどい仕事であるか、すぐに思い知らされた。

喜一郎は秘密裏に呉地区党オルグの寺尾一幹に会い入党したことを梅子に知らせていなかった。社研のメンバーだからと信用して重要なことを漏らすと、またつぎのことを知った

くなるのが人間の習性であり、ときによっては他の関係者に重大な被害を及ぼすことがある。そのことは組織のありようは違うが十年以上の軍隊生活の中で何度も経験してきている。

呉で民間人の知人がおらず、外勤の時間のほとんどを社研の活動に費やし点数の上がない喜一郎の仕事ぶりにくらべ、梅子は愚痴一つ言わず日の丸百貨店に歩いて通勤し、二交代制の仕事をこなしていた。

そのころから一カ月に一、二回の割合で幸子が広島から遊びに来るようになった。それも梅子の非番の日に限っていたから、梅子と手紙のやりとりをしていたのだろう。喜一郎から見ると幸子は姉の梅子に似て美人だったが性格は正反対で細身で気立ての優しい女性だった。喜一郎は梅子と二つ年下の幸子と話をするのが楽しみのひとつになった。

喜一郎は寺尾一幹に指示された日の午後、業務用の鞆を手にして田中書店に立ち寄った。田中豊はお客の動きを見ながら目配せした。喜一郎は本を探す振りをして帳場に近づき、本の上に置かれた紙片を素早くポケットに入れ、何食わぬ顔をして店を出た。

人通りの少ない堺川沿いの小公園のベンチに坐りメモに目を通した。「今夜アジトで会いたい、平原甚松と一緒に。大形宗太郎」という簡略な文章の下に手書きの地図が描かれ、読

み終えたらすぐに処分せよ、と書いてあった。喜一郎は地図を頭に書き写すと紙片を細かく裂き屑籠に捨てた。

師走の夜は駆け足でやってくる。喜一郎は定時きっかり会社に戻り、簡単な報告書を書いて退社した。

喜一郎は一度自宅に帰り、普段着に着替えてから甚松の家に向かった。

甚松は本を読んでいたが、阪口の話の聞くとすぐに外出の準備を始めた。二人は私服の尾行を警戒しながら寺尾一幹のアジトをめざした。暗くなってから初めての家を探すのは難しく、三十分あまりの時間を要した。路地を入り、突き当たりの家の戸をひっそりとたたき、すぐに戸が開き、黒縁眼鏡の顔が逆光に浮かんた。寺尾が無言で手招きする。表側の六畳間の奥にある三畳間に案内された。

襖を閉めたあと、「尾行、大丈夫か」と寺尾が初めて言葉を発した。喜一郎が頷く。

「あなたが平原甚松さんですか」

座卓ごしに寺尾が甚松の顔を見た。

「そうです」

「阪口さんから入党の意志があると聞いていますが」

「そのつもりで一緒にきました」

甚松がきつぱりとして口調で言った。

「わかりました。党中央に報告します。それでは具体的な話に入ります。じつは党としてはコミンテルンが出した二十七年テーゼに基づき軍隊に対する宣伝と組織化を重視し、すでに横須賀軍港では活動を始めています。呉においても党組織の確立が急務です。それにはまず呉地区軍事部を創設し、その下に水兵対策委員会を置く、というのが党中央の方針です」

「その軍事部というのは？」

喜一郎が訊く。

「軍隊に向けての活動方針を検討し決定する党の指導部です」

「水兵対策委員会の仕事は？」

「横須賀では社研を中心にして海軍細胞を組織していますが、呉では一步先んじて、水兵の共感を得るような新聞を出せないか、そう思っています」

「無からの船出となりますが、寺尾さんの構想を聞かせてください」

「軍事部の責任者についてですが、阪口さん、あなたにおねがいしたい」

「党に入ったのは数日前です。まだ何も分からないんですが」

「なあに、党は創立されてまだ十年しかたっていないません。要はやる気があるかどうかです」

寺尾はこともなげに言った。

「平原さん、わたしの案に異議がありますか」

「いえ、わしはそれでええと思います」

「つぎは水兵対策委員会の任務ですが、できるだけ早い時期に自前の新聞を発行したいと思っています。もちろん紙面の内容や編集、印刷と配布網の確立など解決しなければならぬことは沢山ありますが、まず最初に決めなければならないことは新聞の名前ですね」

——新聞の名前か。

ひたすら軍人の道を歩んできた喜一郎にとって考えてもいなかった課題だった。甚松も腕を組んだまま黙っている。

「これが昨年末に呉工廠細胞が発行した〈唸るクレーン〉という職工向けの新聞です」
寺尾はそう言いながら角封筒の中から三つ折りにしたザラ紙大の新聞を二人の前に広げた。

喜一郎はそれを手にした。一面の右肩に太字で「唸るクレーン」という題名が書いてあり、表裏には大小の字がびっしりと埋まっている。一目見て大変な作業だと思った。

「我々が対象とするのは海軍の水兵ですから、〈潜望鏡〉というのはどうでしょうか」
喜一郎が言った。

「潜水艦は水中に潜って隠密行動をとる。イメージが暗いですね」

寺尾が即座に否定した。

「聳ゆるマストではどうでしょうか」

甚松が寺尾の顔を見ながら言った。

「聳ゆるマスト、と言われましたか」

「そうです。聳えるでは山のイメージと重なりますが、聳ゆるという表現にすれば、艦が走りマストの旗が風にはためいている、そんなイメージを与えることができるんじゃないかと思うんです」

「聳える、ではなく、聳ゆるですか。阪口さん、どう思われますか」

「いいと思います。わしも除隊になるまでは三万一千屯の戦艦伊勢の機関部の任務に就いていましたから」

「よし、新聞の題名はそれで決まりだ。つぎは編集方針についてですが、紙面を充実させることはもちろんですが、とっつきやすいようにするため現役水兵の生の声を多く載せたと思っています。それには社研のメンバーに書いてもらうだけでなく、党の考えに共鳴する水兵に近づき、メモ的なものでも、聴き取りのような方法でもいいから掘り取っていく、そう考えているんですが」

「いいですね、大賛成です。艦の中では大きな艦になるほど下士官や上等兵らによる二、三等兵への酷使と理不尽な私的制裁が日常的に行なわれているし、食事や衣服などの待遇は最低なんです。ですから下船日に酔っ払った下級兵が集団を組み、夜陰に乗じて恨みに思っている上級兵を堺川に放り込むような報復行為が発生するんです」

たたきあげの喜一郎が言うと言得力がある。

「わしなんか、動作が鈍い、砲身や甲板拭きが雑だなどの理由をつけて毎日のように平手打ちを食い、櫓で作った精神棒で尻を叩かれていました」

甚松が言った。

「それと下船日の差別ですね。艦の碇泊中、下士官は週五日は外泊できますが、下級兵は四、五日に一回しか休暇を与えられない。そして船内での夕食が済んでからでないと下船を許されず、原則として翌日の朝食時までには帰艦しなければなりません。艦内に棲んでいるネズミを一匹捕まえることに休暇が増えるという海軍独特の習慣はありますけどもね。ですからそんな理不尽な制裁や差別の解消、切実な要求などを掲載すれば大歓迎されると思います。」

「阪口さんがいま言われた下船日のことですが一等兵の俸給では一人で下宿するのは無理なんです。下宿代は四、五円ですけえ」

一等兵の甚松が実感をこめて言う。

「よくわかりました。新聞の二面に投書欄をつくりそんな水兵らの要求を載せることにしましょう。それで原稿集めのほうはどうしますか」

「現役兵の山口義次や山下達吉など社研の連中に頼めばうまくやってくれると思います」
喜一郎が即座に応えた。

「わかりました。集まった原稿やメモは阪口さんの責任で手を入れ、まとまった文章にしてください。つぎに印刷器具についてですが、新品一式を買うと、それが広島市内であったとしても官憲の追及をうける恐れがあります。ですから当面はこれまで私が使ってきた器具をフルに活用する、それでなんとかなると思います。ただ鉄筆とヤスリはかなり使い込んでいるし、蠟原紙や新聞用紙は新しく購入する必要があります。これは資金問題をふくめて私のほうでなんとかします。編集とガリ切りは経験を積んでいる妻の寿恵子にやってもらう。創刊号の巻頭記事、中国への侵略戦争の本質については私が書くつもりです。すでに満州事変と称する侵略戦争が始まっています。ですから日中双方の軍隊から犠牲者を出さないようにしなければならぬ。それが新聞を発行する大きな目的の一つでもあるわけですから」

寺尾はこれまで自分の頭の中で描いてきた構想を一気に吐露した。

「創刊号の発行予定はいつごろになりますか」

喜一郎が訊く。

「いまが師走の半ば。できれば来年の一月下旬ころには出したいと思いますが、原稿の仕上がりと、投書の集まりしだいですね」

「わしはどうすれば……」

甚松が訊いた。

「あなたはこれまで阪口さんに次いで社研の中心メンバーです。しかも現役の一等兵であったわけですから、水兵が関心を持つような町の風景や話題、艦内の人間関係の矛盾、本の紹介などの記事を書いてもらいたいと思っています」

「そうなると田中書店に足繁く通わないといけませんのう」

笑いながら甚松が言った。

「さて、残る課題は極秘の配布網をどうやって確立するかです。憲兵や特高は昭和三年の3・15、翌年の4・16大弾圧でも党を壊滅させることができなかったということで、わが党の動きに眼を光らせています。この監視網をかくぐって新聞を発行・配布するのは緻密な方法と党員自身にも相当な覚悟が求められます。ですから点と点を繋ぐ線はできるだけ細くしておく。つまり一人で数部しか配布しないことを原則として、それを無数に組織する。

なぜかという弾圧を食らったとき芋ずる式に逮捕される危険性があるからです。極秘の配布網を確立するということはそれだけ重要なことなんです」

寺尾は喜一郎と甚松の顔を見ながら、自分が経験したことを交えながら話した。

「阪口さんと平原さんは知っておられないと思いますが、党はさきほど少しふれたように昭和三年三月十五日に大弾圧を受け、中央役員をふくめ全国で約六千人の同志や支持者が、その翌年の四月十六日には中央幹部の市川正一をふくめた約千人が逮捕されました。それから三年経った今年の一月に風間丈吉、岩田義道、紺野与次郎らが中央指導部を再建し、「赤旗」も四月に復刊されることになっていますが、呉や広島の党組織とは連絡が取れない状況がいまもつづいています。幸いというか、私は呉ではまだ官憲に顔を知られていないということ、広島地区からこちらに派遣され活動しているんですが、いつやられるか分からないことです。ですから組織を守るため軍事部の会議は最小限にとどめて、これからは街頭で連絡をとることにしたい。これからの連絡は田中書店を通してやりますので時折のぞいてください。私は年末年始を利用して新聞発行に必要な資金集めに広島に帰ります。お二人は新聞の配布網の確立と投書集めを急いでください」

喜一郎は寺尾の話を聞きながら皮膚が泡立つほどの緊張を覚えた。アジトを出た二人は尾行を避けるため橋を渡ったところで別れた。

それから数日後の午後、喜一郎は田中書店に立ち寄ったが寺尾からの連絡はきていなかった。

海軍では年末年始は交替でまとまった休暇が出るので、兵士のほとんどは古里に帰る。それは社研のメンバーといえども例外ではない。

喜一郎は会社では最低の成績ではあったがまだ首は繋がっていた。勤め始めて間がなかったので賞与はなかったが、月給を貰って正月を迎えた。

梅子は年末ぎりぎりまで仕事をしたが、正月は休みだった。

大晦日の夜、普段着の和服に着替えた梅子は上機嫌でお節料理づくりに励んでいた。喜一郎はタドン炬燵を入れ掛布団を掛けた座卓に足をつっこみ本を読んでいた。

「あなた、退屈だったら一本つけましょうか」
手を休めずに梅子と言う。

「いや、一人で飲んでも旨くない。もう少しあとでいい」

「まだ時間がかかるわよ」

「そうか、じゃ飲みたくなったら言うよ」

本を読んではいたが喜一郎はときおり別なことを考えていた。正月が過ぎれば忙しくなるのは間違いない。梅子と二人きりでゆつくりできるのは今年の正月だけかもしれない。自

分に課せられた任務はきわめて危険なものだが、決意したからには全力を挙げて遂行しなければならぬ。党軍事部の責任者となり水兵向けの新聞を発行することは、下級兵士の待遇改善はもとより、中国への侵略戦争を止めさせる役割を果たすことにつながる。いまこそ軍隊生活十一年の経験と軍人同士の繋がりが役立つのだ。だが軍隊内での反戦活動が上層部に知れることになれば、彼らは驚愕しながらも権力をむきだしにして弾圧に乗り出してくるだろう。だからすべての活動は隠密裡に、そして大胆に展開しなければならぬ。同志や読者を弾圧から守るためにも。

寺尾一幹は広島市内に住む母親の家に寿恵子と一緒に帰っていた。寿恵子は寺尾が京大在学中に知り合った才媛で、同志社女専を卒業後は日仏会館に勤めていたが、党の任務を帯びて名古屋市交通局のバス車掌になった。彼女を呉に呼び寄せたのは水兵向けの反戦新聞発行を手伝ってもらうためで、母には婚約者として紹介し快諾を得ていた。

寺尾は師走にもかかわらず、広島高校や京都大学時代の社研のメンバーや後輩の自宅を訪問し、資金集めに精を出していた。大学に行けるのは裕福な家庭に育ったものがほとんどで、卒業後は教師になったり大手の銀行や会社に勤めており、学生は冬休みを利用して帰郷していた。彼らの中には思想的に変質してしまった者もかなりいたが、それでも寺尾の求め

に応じて一円、二円というカンパをしてくれたので、正月明けには警察官の初任給にあたる四十五円をかなり上回る金額になっていた。

——これだけあれば当面はしのげるだろう。寺尾は金額を計算してからつぶやいた。

正月休みがあけ、市内の店舗が開店し始めてからしばらくして、寿恵子にガリ版印刷に必要なインクとインクローラー、鉄筆一式、用紙などの購入を頼んだが、買うときは一日に一カ所で一点ずつという注文をつけた。印刷用具の購入は官憲が眼を光らせており、足がつきやすいからだ。

十日過ぎ、寺尾と寿恵子は買い物袋を両手に持ち、呉線でアジトに舞い戻った。

翌日、寺尾は阪口喜一郎と連絡をとるため寿恵子を初めて田中書店に差し向けた。若くて美しい和服姿の寿恵子は居合わせたお客の視線を浴びた。寿恵子は店内に入ると平積みにした婦人雑誌を手にしてぱらぱらとページをめくったあと、元の位置に戻すとき素早い動作でメモ用紙を中段に差しこみ、店を出た。

少し時間をおいてから田中豊は店内を巡回するふりをしてメモ用紙を抜きとった。

喜一郎が田中書店に姿を現したのはその翌日の午後だった。喜一郎は本気で書棚の背表紙を見ていた。文章を書くための専門書のようなものを必要としていたのだ。喜一郎は文章入門という本を見つけ、それを帳場に置いた。田中豊は本の葉をぬきとりながらメモ用紙を

挟み、代金を受けとった。

喜一郎は堺川沿いの小公園のベンチに腰掛け、営業用の鞆を右脇に置いて足を組み、さりげない様子で周囲を見回した。監視されている様子はなかった。小さく折り畳んだメモを広げる。半月ぶりの寺尾からの連絡だった。〈印刷の準備はできた、明日原稿を受取りたし〉とあり、受渡し方法が書かれていた。

喜一郎は読み終えたとマッチをすり紙片を燃やした。これまでに受けとっている水兵の投書はまだ数通しかないが、今夜中に清書しなければならぬ。喜一郎は立ち上がり、靴先で燃えカスを押し潰すようにして公園をあとにした。

梅子は遅番でまだ帰宅していない。喜一郎は電灯のスイッチをひねり、これまでに集まっている投書の束を梅子に秘密にしている場所から取り出し、座卓の上に広げ黙読を始めた。下級兵士は労働者や農家の出身が多く尋常小学校しか行っていないため十分な読み書きはできない。そのため書いている意味は分かるのだが、文章はかなり粗雑で、艦のエンジニアとして軍隊生活してきた喜一郎が読んでも理解できないところがあり、それらは推測で手直しすることにした。

雑記帳をひろげ、万年筆を持つ。しかしすぐに手は動かない。喜一郎にしても尋常高等小学校卒で、習った漢字の数は限られていた。十八歳で海兵団に入ってから身体を軍隊に適

合するよう鍛えられ、学習時間は艦の内燃機関の構造や兵器名、使用方法が主であり、定期的に行なわれる模擬試験はそれをなぞるにすぎない。それは進級試験も同様だった。

だから短いものであっても、人に読んでもらう文章を書くことがいかに大変な作業であるかを初めて思い知らされた。

左手で前髪を引っ張りながら文章の手直しをしている最中に梅子が帰ってきた。

「あらあら、顔をしかめながら何を書いているのかしら」

梅子が冷やかした。

夕食時には座卓を譲ったが、後片づけがすんでから六畳間に移動させ、投書の手直しを続行した。

作業が終わったのは零時前だった。

「ふうーっ」

喜一郎は首をぐるぐる回して深呼吸した。

肥後ナイフで原稿を書き写した雑記帳を切り取り、それを小さく折って茶封筒に入れ糊付けし、洋服の内ポケットにしまった。座卓の上を片づけてから三畳間に運びこみ、布団を敷いた。台所でコップ酒を二杯のんだ。寝間着に着替え、電灯を消して布団の中に体を横たえたが頭は冴えたままで、すぐには眠れそうもない。

「あなた、済んだの」

まだ眠っていなかったらしい。

「ああ、なんとか。しかし慣れんことをするのは疲れる」

布団の中の足元には湯たんぽが入れてあるとはいえ、体はまだ温まっていない。

「なにか危険な仕事をしているような気がするけど」

「さあ、どうだろうな」

喜一郎は曖昧に答える。

「私が聞きたいといってもだめかしら」

「いまやってることは誰にも言えんことだ。しかしこれから忙しくなる。そのつもりでいてくれ」

「夫婦に隠し事があるなんて辛いことだわ」

「運動のためだ。そのうち分かる時がくる」

その言葉で梅子との会話は途切れた。

喜一郎は暗闇の中で天井を見ながら子供のころのことを思い出していた。

古里伯太村の東方には背の低い信太山が寝そべっていて、そこは子供たちの遊び場だった。しかし一年のうち数回は近県から一万人前後の陸軍部隊が集結し大演習を実施した。指

揮官の命令で数頭の馬に曳かせた野砲を搭載した台車の列が狭い坂道を揺れながら上がっていく。たまにその台車が転倒したり、馬を繋いでいる縄が緩んで一頭だけが勝手に走り出したりすることがある。その瞬間、形相を変えた指揮官が走り寄ってきて、子供たちが見ている前で、兵隊たちに怒声を浴びせ軍靴で足蹴にし鞭で叩いた。兵隊たちは両手で頭を抱えながら大声で詫びた。三八銃の銃床で殴られ頭から血を流している凄惨な光景を見たのは一度や二度ではない。子供たちは恐怖感からその場から走り去りたいと思ったが筋肉がこわばって動けなかった。軍隊にだけは入りたくないと思ったのはそんな理不尽な暴行を何度も見たからだ。

しかし人生は皮肉だった。阪口家は江戸時代からの中農で、善右衛門という屋号を持っていた。だが父の宗次郎は病弱で、喜一郎が芦部尋常高等小学校に入学した年の暮れに死んでしまった。勉強が好きで、運動能力に優れていた喜一郎は副級長に推され、級長の高田春次と勉強を競い合いながら将来は教師になる夢を描いていた。だが父の死によって家庭環境は一変し、高等小学校卒業後は家計を助けるため地元の織布会社に就職した。職場は織布機械を操る二、三十人ほどの若年の女が主役で、男のする仕事は機械の調整という単純なものではなかった。女たちはノルマに追われ、男も十二時間労働に付き合わされたが、わずかな賃金しか得ることはできなかった。

一年が経ち、喜一郎が仕事に慣れたとき、体の弱かった二人の姉が相次いで病没した。母の悲嘆ぶりは見ていられないほどで、その時の暗い情景はいまでも記憶の底に焼き付いている。

翌日の正午前、喜一郎は仕事着のスーツ姿で本通の東側の歩道を北に向かって歩いていった。六丁目付近で洋服姿の二十歳すぎの女性と会う手筈になっていた。左肩に薄茶色のバッグを提げ、右手に女性週刊誌を持っている、とメモ用紙に書いてあった。時間きっかりだった。数メートル先で洋髪の女性と目が合った。「Sさんですか」歩調をゆるめて小さな声で聞いた。女性が頷く。喜一郎は女の前方を少しさえぎるような格好で擦れ違う瞬間、内ポケットに忍ばせていた茶封筒を彼女の左手に渡した。ほんの一瞬の出会いであつたが理知的な顔だった。あの女性が寺尾さんの妻にちがいない。喜一郎にとっては初めて経験する街頭連絡だった。まだ心臓の鼓動は正常にもどっていない。しかし彼女は喜一郎より一回りも若いのに平然としていた。これまで何回も修羅場を経験してきているのだろう。

その日、暗くなるのを待って喜一郎は甚松の下宿を訪れた。彼は座卓を前にして何か書いていた。

「なにをしているんだ」

障子を閉めながら喜一郎が訊く。

「見てのとおり、慣れぬ文章を書いています」

甚松が振り返りながら言った。

「寺尾さんから頼まれた原稿を書いているのか」

「そうです」

「すこし遅すぎるんじゃないか。わしは今日渡したぞ」

「そうは言うても阪口さん、文章というのはそう簡単には書けません」

「それは分かるけどな」

喜一郎はそう言いながら甚松の側に座り、

「田中書店に寄ったか」

と訊いた。

「いや、まだです」

「明日にでも行ったほうがよいと思うが」

「しかし原稿を仕上げてからでないとい……」

「そんなことを言っていたら新聞の発行が遅くなる。寺尾さんは待っているはずだ」

喜一郎は少しいらついた口調で言った。

「じゃ原稿は今日中に仕上げて、明日にでも田中書店に持っていけます」

「たのんだぞ。情勢は急を告げている」

喜一郎は金釘のような右肩上がりの角張った字で書いた原稿が乱雑に置かれている座卓の上をちらつと見て腰を上げた。

空腹を覚えながら帰宅したのは八時前だった。梅子の声を聞き流しながら和服に着替えた。食卓の上には小振りで生きのよい鯛が尾を反らせている

「おお、鯛じゃないか。どうしたんだ」

喜一郎はびつくりしたような声をだした。

「わからないの？」

梅子が意味ありげに喜一郎の顔を見た。

「うーん、わからんなあ」

「今日はあなたの誕生日でしょ」

「じゃ今日は一月十八日か。誕生日なんかずっと忘れていた」

「さあ、どうぞ。三十歳の誕生日を祝って」

梅子は喜一郎の真向かいに座り、笑顔で銚子を差し向けた。

一月も終わりに近づいたある日の夕刻だった。

「これが創刊号の原稿だ。大変だと思うがよろしくたのむ」

そう言いながら寺尾一幹は座卓の上に雑然とした原稿を置いた。

寿恵子は原稿を手にとった。寺尾のを含め原稿用紙に書いたものは一枚もない。彼女は少しむっとしながら、

「あなた、この原稿、ザラ紙や雑記帳に書いたものばかりなのね。すべて字数を計算しなければならぬから割付するだけでも随分時間がかかるわよ」と言った。

「そうだろうな、書くことにかけてはみんな素人だからな」

「おれは違うが、と言いたいんでしょう」

「いや、そんなことは…」

寺尾は苦笑しながら頭に手をやった。

「どんなに早くしても、割付に半日、ガリ切りは正味三日かかると思うわ」

「そうか、印刷の手間を考えると一月中の発行は無理かもしれんな。まあ仕方ないさ。君しか頼れる者はいないんだから」

寿恵子は寺尾に手伝ってもらい座卓を三畳間に運び込んだ。防衛のためだった。三畳間は

日当たりが悪く、襖を閉めると昼間でも薄暗い。

割付は予定通り半日で終わったが、すぐにガリ切り作業に取りかかるわけにはいかない。ヤスリ版と鉄筆が擦れるカリカリという音は特殊な金属音なので、外に漏れると警察に密告される恐れがあるのだ。

川沿いに夜が忍び寄ってくると、寺尾は防衛のため六畳間で火鉢を抱えながら本を読む。寿恵子は特高に踏み込まれたとき素早く逃避できるよう大きな風呂敷を用意していた。裏窓には明かりとガリ切りの音が洩れないよう毛布が張り付けてあり、四〇ワットの電球はコードが届く目一杯の位置まで下げてある。寿恵子は三ミリ蠟原紙をヤスリ版の上に置き、色鉛筆で外枠線を引き、つぎに六行三〇字分で題字の囲みを作る。紙面は原紙を縦にした五段組の裏表、一面は一行十八字で四十八行となる。この枠内に見出しを付け、全体のバランスをとらなければならない。

最初に題字の【聳ゆるマスト】を細い線で縁取りし、「聳ゆる」の部分等特殊な鉄筆で塗り潰し、「マスト」は白抜きとし、枠内の余白に軍艦のマストを描き黒っぽくした。つぎに寺尾の書いた創刊の辞、「すべての水兵諸君に告ぐ！」を太字の二段抜きの見出しにする。そのあと本文を一字ずつ丁寧に刻み込んでいく。

——昨年九月十八日、天皇を絶対的統治者とする日本帝国主義は中国の柳条湖付近で発

生した満州鉄道爆破事件を口実として東北部に対する侵略戦争を本格的に開始した。この戦争の狙いはすでに植民地化している台湾と朝鮮を足掛かりに満州国を成立させ、資源の略奪と中国人民の搾取、社会主義国ソビエトに侵攻することにある。

兵士諸君、考えてみよ。このたびの侵略戦争に対し日本商工会議所に続いて日本工業倶楽部と日本経済連盟も「満州」侵略支持を発表した。また大新聞も相次いで「満州」侵略を積極的に支持し、軍部発表を丸飲みした戦況を競い合って報道している。社会大衆党や全国労働大衆党も翼賛組織に変身した。

わが日本共産党軍事部水兵対策委員会は、いずれ本格的に参戦することになるであろう海軍に所属する兵士諸君が侵略戦争に手を染めることを憂いている。

本紙を創刊した目的は、中国への侵略戦争の本質を見抜き、いま我々は如何に処すべきかを共に考えることにある。それと同時に、劣悪な環境の下で酷使されている水兵諸君の待遇改善をはかるため、次の要求を掲げ、諸君とともに闘うことを誓うものである。

- ・士官並みの食事をさせろ！
- ・被服修理費を支給せよ！
- ・外出及び外出中の絶対自由を与えよ！
- ・補充交替に水兵の希望を入れよ！

・下士官以下に和服着用の自由を与えろ！

・士官に対する奴隸的服従絶対反対！

・読書の自由、社会問題研究の自由を与えろ！

・信書検閲絶対反対！

・軍法会議懲戒罪等軍人に対する特別処罰法を廃止せよ！

・兵士に選挙権及び政治的集会への出席の自由を与えよ！

・海兵代表による軍艦生活管理のため海兵委員会を作れ！

・海兵团港務部その他海軍諸学校に海兵代表委員会を作れ！

本紙は兵士諸君と共にある。兵士諸君の購読と積極的な投書を期待するものである。

一面の下段は小見出しを付けた時事解説と初步的な社会科学の解説と本の紹介。

二面は扇動的小見出しで現役水兵の投書と聴き取りによる要求や不満の声、軍港での出来事、身近な話題、左下の編集後記は囲みを入れる。

まるでゴキブリのように、寿恵子は夜になると座卓に向かい、黄色っぽい光の下で極細の鉄筆で原紙の小さな升目に字を埋めていく。それは根気のいる作業だった。とくに字画の多い漢字を三ミリの枠内に入れるのは至難の技が求められる。また使用頻度が増すにつれや

スリの目が詰まってくるのでそのつど専用ブラシで取り除く。字を間違えれば修正液を使って書き直すことはできるが、印刷する際にそこだけ写りが悪くなるので書いている最中は絶対に気を緩めることはできない。しかも厳寒の中での作業だ。指先が冷えてくると筆先が鈍るので右脇には炭火を入れた七輪が置いてあり、時折その上で右手の指先を温める。ガリ切りを初めてから三日目の深夜、ついに作業は終わった。寿恵子は鉄筆を置き「ふうーっ」と安堵の吐息をついた。緊張感が一気にほぐれ、両手を伸ばし後方に円を描くようにして肩の筋肉をほぐした。

寿恵子は完成させた原紙を古紙で円筒状に包み紙紐でくくった。鉄筆を専用箱に収め、ヤスリ版をブラシで手入れしたあと風呂敷に包み押入の上段に仕舞った。七輪の火を壺に入れ、電灯を元の位置に戻す。六畳間をそつと開けた。瞬間、闇の中を鋭角の燈色の光が差し込む。

寺尾は熟睡しているようだった。

寿恵子は三畳間で寝間着に着替え、湯たんぽを足元に入れた寢床に体を入れた。

目が覚めたのは八時すぎだった。台所から薪の爆ぜる音がし、味噌汁の香りが漂ってくる。寺尾が朝食の準備をしているのだった。

起きあがった寿恵子は丈の短い雨戸を繰った。すぐに「起きたか」という声がした。

京大生の時に自炊した経験があるので慣れたものだ。寿恵子が着替えをしている間に朝食の準備ができた。

「昨夜は遅くまでご苦労だったな。くたびれただろう」

寺尾は洗顔をすませてから座卓の前に座った寿恵子にねぎらいの言葉をかけた。

「若いからへっちゃらよ。あとは日付を入れるだけにしておいたから」

寿恵子は寺尾の御飯を盛りつけ、味噌汁をお腕に注ぎながら明るい声で応えた。

食事を終えてから、寿恵子は丸めたままの原紙を寺尾に渡した。

寺尾は校正を兼ねて二枚の原紙に目を通した。調和のとれた肉太の見出しと本文の字は見事な出来映えだった。

「記念すべき新聞の誕生だ。日付は配布事情もあるから一九三二年二月上旬号としよう」

その日、寺尾は休養をかねて寿恵子を広島市内に住む母の家に帰らせた。

新聞の印刷にとりかかったのは夜になってからだ。座卓を三畳間に移したあと、玄関戸を施錠し雨戸を閉めた。六畳間の明かりを消して無人を装う。三畳間の窓には毛布を張り付け、電灯の配線を目一杯さげる。座卓の上に古新聞を重ね、謄写版のスクリーン枠の寸法で厚手のボール紙の真ん中を切り抜き、太めのロウソクに火を点け熱滴をボール紙の縁に垂らしながら熱した火箸で原紙を貼り付けていく。ガラス板の上に缶から掬い取った適量の

インクを盛りつけ、インクローラーで均等に馴染ませる。ザラ紙を揃えて古新聞の上に置き、ボール紙を枠にしてローラーに圧力を加えて一気に押し上げる。丁寧なボール紙を引き離す。ローラーをガラス板の上に置き、刷り上げたザラ紙に目を通す。

——うむ、まずまずの出来だな。

独りで納得し、ザラ紙四十枚を片面ずつ慎重に刷り上げた。題名と見出しの部分の裏面が黒っぽく滲んでいるのはやむを得ない。

柱時計を見た。十時すぎだった。四十部印刷するのに二時間ほど要したことになる。だが疲労感はなく、数日後には水兵たちの手に渡るのだと想像すると押さえようのない高揚感が湧き上がってくる。

寺尾は立ち上がり、火鉢で湯気を上げていた薬缶を持ち流しに向かった。両手のあちこちがインクで汚れているから洗い落とさなければならぬ。アルミの洗面器にぬるま湯をつくり石鹸で洗うのだが容易には落ちない。

座卓に座り直し、新聞を揃えて枚数を確認した。党中央に送る五部を手元に残し、三十五部を二つ折りにして包装紙にくるんだ。使用済みの原紙はかまどで燃やし、ローラーは何度も古新聞の上を往復させインクを抜きとり、ガラス板に残ったインクは雑巾で拭き取った。

その翌日、簡単な朝食を済ませた寺尾は着流しに下駄履きの恰好で二河川沿いの道をゆっくり歩きながら図書館に向かった。周辺の冬景色を楽しんではいるが、尾行がないか時折ちらっと後方を見る。

図書館は二河公園の南口にある。平日だというのにかなりの閲覧者がいた。空いている新聞を手にとった。一面は一月二十八日夜半に始まった上海における戦闘記事がほとんどで、陸戦隊の奮闘ぶりを写真入りで報道している。艦船は佐世保、呉、横須賀の各鎮守府から巡洋艦と特務艦各一隻、駆逐艦一二隻が派遣され、陸戦隊は現地防衛部隊をふくめ約二千人規模の編成となっている。

これに対峙する中国軍は抗日意識に燃える第一九路軍の精鋭三万三千人。陸戦隊は六千人の日本人が居留していた閘北から西方の中国領北四川路に進出しようとしていたが、中国のバリケードに阻まれた末、陸戦隊の象徴ともなっている白色の脛当てを標的とした集中攻撃を受け戦傷者が続出。戦闘はたった三日で膠着状態に陥っている。

他国の地で無為な血が流されているニュースは不愉快だった。真相を知るため「赤旗」を読みたいと思った。しかし党中央とはいまだ連絡がとれないでいる。かといって不用意に手紙を出すと発信・着信元を特高に嗅ぎつけられ、彼らの魔手が伸びてくるのを覚悟しなければならぬ。「聳ゆるマスト」創刊号では時間的制約もあり上海事変にふれることはでき

なかったが、第二号ではその真相と侵略の本質に迫らねばならない。その方針を確認するため早急に軍事部の会議を開かねばと寺尾は思った。

寿恵子は夕方に帰ってきた。両手に風呂敷包みを持っている。

「お母さん、お元気でしたわ。ほら、おみやげにお菓子を貰ったのよ。それにあなたにはお小遣い」

寿恵子は部屋に上がると風呂敷包みをひらいた。お菓子は百貨店の包装紙に包まれている。その上にある包みは自慢の広島菜の漬物だろう。

「二十六歳にもなって小遣いを貰うとはな」

寺尾は右手で髪の毛を梳きあげ、照れながら紙包みを受けとった。

「印刷のお仕事、どうでした」

「上出来だ。明日にでも届けてもらおうと思っている」

「じゃ今夜は何か美味しいものでも作ろうかな」

翌日の午後、寿恵子は包装紙にくるんだ印刷物を大きめのバッグに入れ、本通八丁目にある四階建の日の丸百貨店に向かった。

受付で野村梅子の売場を訊き、彼女の前に立った。初対面だったが笑顔が素敵な色白で小

柄な美しい女性だった。年は二十三、四だろうか。

寿恵子は彼女が野村梅子本人であることを確認したあと、林寿恵子だと名乗った。

「主人の大形宗太郎から頼まれましたね、これを阪口喜一郎さんにお渡しねがいたいのですが」

「阪口にですか？」

初めて見る自分より若い女性からの依頼に戸惑いながら梅子は言った。

「はい、大形宗太郎からだと言っていただければ阪口さんはお分かりくださると思います。大切なものですのでよろしくおねがいます」

きれいな標準語だったが関西風の訛りがふくまれていた、林寿恵子と名乗った若い女性の後ろ姿を見ながら、梅子は初めて逢ったとは思えない親近感を覚えた。

夕方、梅子は帰宅してから喜一郎に、大形宗太郎という人からの預かり物で、若い女性が店の売場に持ってきたと付け加え、包装紙にくるんだ品物を渡した。

それを受けとった喜一郎はすぐに、

「ついにできたか」

と言った。

「何が入っているの」

「いや、梅子には関係ないものだ。今日のことは他言無用だぞ」
怖い程の眼光だった。

夕食後、喜一郎はすぐに立ち上がり、外出の準備をはじめた。

「ちよつと出掛けてくる」

喜一郎はそう言つて暗闇の中に姿を消した。

心細い外灯をたよりに十五分ばかり歩いた。明かりが漏れているのが見えた。
表戸を軽くたたく。

「誰ですか」

「わしだ」

すぐに内側から戸が開けられた。

「さ、どうぞ」

甚松が喜一郎を招き入れた。

「夜分すまん。早いほうがいいと思つてな」

喜一郎はそう言いながら包装紙を解いた。中から二つ折りの真新しい印刷物が出てきた。
そのうちの一枚を甚松に渡し、喜一郎も一枚手にした。「聳ゆるマスト」という肉太の題字
が眼に飛び込んでくる。そのあと二人は無言で本文に目を通していた。

「やったぞ！ 甚松さん」

先に読み終えた喜一郎が昂奮を押さえきれない様子で甚松の肩をたたいた。

「阪口さん！」

甚松の目は潤んでいる。

「同志と社研の連中、それに仲間たちの喜ぶ顔が目には浮かぶようだ」

「ほんまに、歴史的瞬間ですよ」

二人はお互いの肩を揺すり合った。

配布ルートは水兵細胞と社研メンバーの創意で決められていた。入団して間もなく六年目を迎えるのに、検閲された日記が左翼思想に染まっているという理由で進級停止処分を受け海兵団付となっている木村莊重一等兵、赤化信奉者の烙印を押されかけた若林二等兵と山口義次三等兵、文章が得意な山下達吉二等主計兵、特務艦朝日乗組の北田健二等機関兵、稲垣宏一等看護兵曹、佐藤彊一等兵らが分担して購読を希望している兵士に手渡すことになっている。艦に届ける方法として小舟艇が発着する第一上陸場に設置してある幸便箱を利用することにしてあったが、それは読者が乗った艦が港内に碇泊していることが前提であり、演習のため不在が長期に及ぶときは危険を伴う。

喜一郎と甚松は新聞を二分し、翌朝から手分けして配布者の下宿先を訪れることにした。その方法であればたとえ留守であったとしても下宿を営んでいる家主に訊けばおよそのことはわかるし、預けることができる。

喜一郎はお互いの配布担当者を再確認して甚松の家を出た。

帰宅した喜一郎は、梅子の目から隠すようにして座卓の上に置いた新聞を三つ折りにして数部ずつ包装紙にくるみ毛筆で宛名を書いた。作業が済むと業務用の鞆の中に入れた。

その夜、喜一郎は寢床に入っても昂奮してなかなか寢付かれなかった。

——いよいよ明日から軍都呉市で党軍事部発行の新聞を配布する。その活動は中国侵略を大々的に押し進めようとしている権力の中枢を握る海軍上層部と真っ向から対峙していくことを意味する。これまで彼らは手先の憲兵を使って自分達に刃向かう者に対し治安維持法を最大の武器として容赦ない弾圧を加えてきた。それにより多くの共産党員や反戦兵士が逮捕され残虐な拷問を受けたのち監獄に放り込まれた。だがそうした弾圧を怖れていたのではいつまでたっても世の中を変えることはできない。大正末期から続いている経済恐慌の下で零細小作農民や労働者は日々の生活を営むことができないほど困窮している。彼らが極貧状態から解放されるためには、彼ら自身に資本家優位の社会の仕組みを知らしめ、団結して権力と闘う必要性を訴えねばならない。ゆえに党軍事部の当面する任務は水面

下で水兵達の要求を取りあげ、それを軍隊内で大きな世論にし、要求実現と社会変革に共感する仲間を増やしていくことにある。その役割を担うのが「聳ゆるマスト」なのだ。創刊号には水兵たちが投書した不満や要求も掲載されている。おそらく新聞を手にした読者は歓喜の声を上げ、「聳ゆるマスト」は前代未聞の快挙として注目されるだろう。だが一面トッ普を飾る創刊の辞は難解な文章が多々あり、自身の文章もまだ稚拙で、これからいっそう努力して読者の心を揺さぶるような記事を掲載し、尋常小学校しか出ていない兵士であつても読むことができる、分かりやすい文章表現が求められるだろう。

しかしそれをやりきれるかどうか、まだ自信はない。

朝、会社に出勤したのち、すぐに配布の仕事にとりかかった。特高の尾行を警戒しながら足を使つてのことだから神経もすりへるし時間もかかる。対象者が在宅であれば包装紙でくるんだ新聞を渡し、二月下旬に予定している第二号への投書を依頼する。留守であれば家主に預かってもらうという繰り返しで配布を完了するのに三日を要した。

配布を始めてから十日すぎの夕刻、甚松が訪ねてきた。梅子は遅番でまだ帰宅していない。喜一郎は甚松を六畳間に招き上げた。

「阪口さん、すごい反響ですよ」

座るやいなや甚松が言った。

「メンバーからの報告では艦内や海兵団内ではひっぱりだこで、購読希望者が増えているそうです。わしらのことが載っているということですね」

甚松の細面の顔から笑顔がこぼれている。

「そりゃよかった。ある程度の反響は予想していたが、新しい読者が増えているとはな」
喜一郎の顔からいつもの厳しさが消えている。

「次号はかなり増刷する必要があります。そのことを早く寺尾さんに伝えたほうがいいのではないかと思いますね」

「そうだな、じゃ明日にでも田中書店に行くとするか」

「それと軍事部の会議を開く必要があると思うんですが」

「そのことをふくめて伝える。ともあれ今日は乾杯だ」

喜一郎は台所から一升瓶を持ち出してきた。

肴はイカの塩辛と梅干しだった。

甚松の前に置かれた湯呑みに酒が注がれ、喜一郎が湯呑みを持ち上げた。かつんと軽やかな陶器のふれあう音がした。緊張感が解け、久しぶりの情報交換の場となる。

「二月十八日に起きた中国人による日本人僧侶襲撃事件以降の動きなんですけどね。月末

には呉鎮から四百五十名の陸戦隊が現地に派遣されました。第一艦隊の巡洋艦那珂と阿武隈、第二艦隊の駆逐艦白雪、吹雪、磯波に分乗しましてね。佐鎮と横鎮からも同数程度の陸戦隊が派遣されたようです。現地防衛軍が六百名余りいたわけですから総勢千八百名といったところですか。阪口さんも知っていると思いますが、戦闘は二十八日の夜半に始まりました。ところが中国軍が予想外に強くてバリケードを突破する前に反撃され、多数の死傷者が出て、呉鎮からも二名の戦死者がでたようです。稲垣同志の報告なんですがね」

「ついに戦死者が出たのか」

口は湯呑みを持っていきながら喜一郎が呻くように言った。

「それで戦局を挽回するため佐鎮と横鎮から約千名の支援部隊を急派することになったようです」

「しかしその程度の増派では三万を超えるという中国軍に勝つことはできんだろう」

「そうなんです。ですから陸軍の支援を求めるかどうか、東京の上層部では現地の司令部と連絡をとりあっているようです。しかし陸戦は陸軍が得意としますから、指揮権を渡せということになってくる。ですから海軍の偉いさんはいま頭を抱えているんじゃないかと思えます」

「甚松さん、上海での戦況がどう変化するにせよ、我々は全体像をつかみ兵士たちに伝え

る必要がある。わしもそのつもりで努力しますが、甚松さんも多くの兵士から情報を集めてください」

「わかりました」

翌日の昼前、勤務の途中に田中書店に立ち寄り平積みの雑誌の間にメモを挟んだ。

田中豊から寺尾のメモを受けとったのは四日後のことだった。ゆきつけの食堂で昼食の注文をしたあとメモに目を通した。週末に会議をひらくので平原と一緒に来るようにとある。喜一郎は場所と時間を頭に刻み込むと、その場で細かく破り食堂のゴミ入れに捨てた。

約束の日、市内が暗闇に覆われてから呉駅の西側に架かっている橋の袂で甚松と落ち合い、寺尾の指示した家をめざした。橋を渡り、左折して広島へ向かって延びている線路を横切り二河川沿いに南下する。右手に古い民家が軒を連ねている路地に入る前、尾行がないことを確認し、突き当たりの家の戸を二、三度かるく叩いた。戸を開けて顔を覗かせたのは林寿恵子だった。玄関の敷居を跨ぐとたたきが裏手まで延びている。寿恵子は奥の三畳間に二人を案内すると外に出ていった。

座卓を中心にして三人が座る。

型どおりの挨拶を交わしたあと、

「どうですか、新聞の反響は」

寺尾が訊いた。

「予想以上です」

喜一郎が答える。

「自分たちの要求や思いが載っているということで、購読希望者が相次いでいます」

甚松が言った。

「それはよかった。ガリ切りをした寿恵子も努力が実ったということで喜ぶと思います。しかし新聞は月二回刊を約束していますから、第二号は二月下旬に発行しなければなりません。日程的にはちよつと苦しいんですけどね」

「あと半月しかありません」

喜一郎が相槌をうつ。

「ときどき図書館で新聞を読んでいます、陸戦隊は上海で苦戦しているようですね」

「阪口さんからの報告が届いていると思いますが、呉鎮から二名の戦死者が出て、多数の負傷者が海軍病院に担ぎ込まれています。これは稲垣同志からの情報です」

甚松が言った。

「同志や社研のメンバーには陸戦隊員はいませんでしたね」

「はい。でもひょっとすると海兵団所属の元気のええ者が派遣されるかもしれません」

「じゃ次号は上海事件特集号としますか。兵士の要求や意見を投書してもらい、それを中心にして編集する。もちろん一面トップには党の見解を載せたいと思っていますが」

「いいですね、大賛成です」

喜一郎が目を輝かせて言った。

「しかし私は陸戦隊のことはよく知りません。ですから二号のトップは阪口さん、あなたが書いてください」

「えっ、この私がですか」

「そうです。阪口さんは軍事部の責任者でもあるわけですから。平原さんはできるだけ多くの原稿や投書を集めてください」

有無を言わせぬ寺尾の発言だった

爆発的喜びの後に苦悩が始まる。そんな思いだった。別れ際、甚松には稲垣宏同志からもっと詳しい情報を聞き出してくれるよう頼んでいたが、戦況を全体的に把握するためには商業新聞も読まなければならない。だが定期購読すれば足が付く怖れがある。喜一郎は梅子に一部買いを頼むことにした。中国への侵略戦争に反対する党の立場は寺尾から貰った最

近の「赤旗」で対応できるだろう。

寺尾一幹の話では、上海事件の発端は一月十八日に日蓮宗日本妙法寺上海布教主任の天崎啓昇が四人の信者らと寒修業のため団扇太鼓を叩きお題目を唱えながら三友実業社タオル工場を通行中、突然十数人の中国人の暴漢に襲われ一人が死亡、四人が重軽傷を負ったところにある。

共同租界に住む日本人居留民は暴漢が中国人であり、三友実業社が抗日の拠点と目されていたことから激高。翌十九日夜半、土砂降りの雨を突いて光村芳蔵が率いる右翼団体の青年同志会のメンバーが同社を襲撃し、工場内の物置小屋に放火。その帰路、駆けつけた共同租界の中国人巡捕と乱闘になり、同志会側は巡捕二人を日本刀で惨殺、二人に重傷を負わした。だが同志会側も一人が銃殺され、二人が重傷を負った。

翌二十日、村井倉松上海領事は呉鉄城上海市長に嚴重抗議。中国側は犯人の逮捕、損害賠償、陳謝など、日本側の要求を全面的に受入れ、事件解決のため誠意を持って対応すると言明した。

しかし居留民はこの回答に満足せず、同日午後にはひらいた大会には六千人が参加し、昂奮した千人余の群衆が総領事館と陸戦隊本部に押しかけ「自衛権を発動して抗日運動を絶滅せよ」と強硬に主張した。

この日を境に陸戦隊の増強が始まり、二十八日には中国軍との戦闘が始まった。

梅子が持ち帰る新聞は、毎日のように一面トップで軍部発表の戦闘場面を写真入りで報道していた。

海軍当局は約千八百名の陸戦隊を使えば容易に戦況は決着すると安易に考えていたが、陸戦隊の戦闘能力は陸軍と比較してかなり劣る。これに対し南京から上海沿線に配置されている蔡廷鍇が指揮する第十九路軍は三万三千人、その精鋭さは鉄軍とも称され戦意は抗日に燃えていた。中国軍は兵力数において陸戦隊と比較して優位に立ち、陸戦隊は中国軍のバリケードを突破できず、いたるところで死傷者が続出した。

この事態を打開するため海軍は開戦から三日目に佐世保と横須賀から千人の陸戦隊を増強。さらに野村吉三郎中将を司令官とする第三艦隊を編成し上海に急派。二月二日から三日にかけて閘北と呉淞砲台に総攻撃を仕掛けたが戦況は好転せず、中央上層部に陸軍支援を要請する電文を打った。陸軍側は支援要請に応じる意思表示を行なったが、海軍側が、上海は固有の守備範囲だとし陸軍の派遣兵員に制限を加えたため、陸軍側は統帥権干犯だと態度を硬化させ、派遣中止を表明した。

海軍上層部は陸軍の派兵中止の通告にあわてた。すでに現地の戦闘は陸戦隊だけで勝利する見込みはなかったからだ。

二月四日になると海軍は派兵制限に関する方針を撤回することを陸軍側に伝えた。

これをうけ陸軍は翌五日午前に、久留米の第二師団、名古屋の第三師団、東京の第一師団で編成した第九師団を上海に派遣することを立案し、天皇に上奏、裁可を得た。

二月九日から十日にかけて第九師団は十六隻の輸送船に分乗し出撃。十三日には艦砲射撃の援護を受けながら上海東北の呉淞砲台下を通過。二日後に呉淞付近と上海租界地へ揚陸することに成功し、陣地の構築を始めた。

二十日早朝、日本軍は江湾鎮方面に向けて総攻撃を開始したが堅固な陣地を構えている第一九路軍のバリケードを撃破することはできず、二十三日には北翼から中国軍の猛反撃をうけ、からくもこれを撃退した。

その日、現地陸軍司令部は戦況の打開をはかるため、政府に増援部隊の派遣を要請した。政府はただちに閣議をひらき、善通寺の第一一師団と宇都宮の第一四師団の増派を決定し、天皇の裁可を得た。

増援の報を受けた日本軍は二十五日から再び江湾鎮西方に対し総攻撃を開始。中国軍の第一線陣地を奪取したが壊滅させることはできず、三日間の戦闘で戦死九六名、戦傷三六六名の損害をうけ、弾薬や重砲弾が欠乏するにいたった。

軍司令官白川義則大將が率いる増援部隊の第一一師団の先遣隊を乗せた輸送船が徳島県

小松島を出港したのは二十七日の午後四時。日本海の吹きすさぶ波浪にもまれながら二日後の二十九日の午前七時に揚子江河口に到着した。白川軍司令官らは泊地で海軍側と作戦会議をひらき、三月一日の払暁、呉淞に上陸を始めた。そして二日には劉河鎮に進出し、中国軍撤退要求ラインを越える西北の嘉定方面に向かつて前進した。第九師団もこれに呼応して南翔鎮に進出したが、中国軍の撤退方針により捕捉殲滅させることはできなかった。軍司令部はこれ以上追撃しても中国軍に損害を与える見込みは薄いと判断し、各兵団に現在地にとどまり戦闘を中止するよう伝達。

三日午後二時、軍司令部は一方的戦闘行為停止を発表した。これは同日午後四時からスイスのジュネーブで開催される国際連盟総会を意識しての作戦だった。

しかし、日本の思惑は外れた。総会は中国側の提案を受入れ、満州事変と上海事変は連関したものだという評決を下し、満州国成立を認めなかったのだ。反対の立場をとったのは日本だけで、国際的孤立が鮮明となった。

喜一郎は日々の新聞に目を通しながら、上海事変は満州国成立に向けた陽動作戦ではないか、という疑問を抱いた。

満州事変と称されている柳条湖付近での満州鉄道爆破事件は中国の東北部に侵攻するための謀略事件であったことが明らかになっている。上海事変は日本が満州国成立を宣言す

る一カ月半前に日蓮宗僧侶が中国人の暴漢から襲われた事件が端緒になっているが、いかに激しい抗日運動が展開されいたとはいえ中国人が僧侶を襲うことは考えられなかった。

——ひょっとすると僧侶襲撃事件は関東軍による謀略かもしれない。国際連盟総会が二つの事変を連関したものであるという評決を下したのもそのことを裏付けているような気がする。しかし推察で記事を書くあとで恥をかくこともありうる。ここは反戦の立場を明確にして、真実のみを読者に伝えなければならぬ。

喜一郎は座卓を前にしてしばらく瞑想していた。考えてみると軍隊の諸施設は一般社会から隔絶するため高い塀で取り囲み、出入口は二十四時間態勢で衛兵が監視し、外出許可証を示さないかぎり自由に出入りすることはできない。軍艦は鉄の檻にも似て、水兵たちは上陸もままならず、上官の命令によってのみ行動する強力な破壊力を有する特殊な世界だった。高塀に囲まれ、鉄の檻に入れられて自由に新聞や本を読むことすら禁じられている兵士たちに、国の内外で起きている社会的な事件を簡略にして正確に伝えるのが「聳ゆるマスト」の使命なのだ。

喜一郎は姿勢を正した。もはや保険外交員の仕事は意識になかった。書いては消し、また破り捨て、食事の時間を惜しむように、柳条湖事件や上海事件が本格的な中国侵略への始まりであることを書き綴っていく。そして圧倒的に貧農の子息の存在によって成立している

日本軍隊内にあって、戦争に賛同し他国を侵略することは、罪のない他国の人民を殺傷する行為であり、自身もまた侵略軍の一員としての代価を払わなくてはならなくなる。だからこそ日本共産党は侵略戦争に反対しているのだ。

一週間かけてようやく書き上げた。

喜一郎は原稿を何度も読み返し、ミスがないか確かめ、字数を計算した。

その日の夕暮れ時、喜一郎は田中書店に向かった。店内に入り、本を探すふりをしてしながら周囲の視線がなくなるのを待った。帳場に雑誌と一緒に封書を置いた。田中豊は素早く封書を帳場の下に隠しながら本代の精算をした。

中通を歩くのは一週間ぶりだった。丸めた雑誌を右手に持った喜一郎はひと仕事終えた開放感から、どこかの食堂で一杯やりたい気分になっていた。キャバレーやカフェには極彩色のネオンがきらめき、職工たちや水兵たちが群をなして歩き、華やいでいた。上海では日本が仕掛けた戦争で多くの犠牲者がでたというのに、そのことに痛みを感じていないのだろうか。工廠では昨春、ロンドン軍縮協定の締結を理由に四千人近い職工が首を切られた。それからまだ一年も経っていないというのに、中国侵略が拡大するにつれ八千人近い臨時工が雇用され、なお膨張している。通行人の中には戦争で一儲けを企む死の商人たちも混じっているはずだ。満州国の成立は資本家たちの喝采を受け、多額な投資がなされるだろう。

そして土地を持たない多くの貧農たちは政府や軍部の巧妙な宣伝に乗せられ、新天地を夢見て移住していくに違いない。

いまこそ我々の力が試されている。

寺尾は二月を過ぎても阪口からの原稿が届かないのでいらついていた。平原甚松からは水兵たちの投書が前号の倍近く届いている。これらは次号に回すことにした投書以外は字数の計算と割付はすませてある。

田中豊が阪口の前稿を自宅に届けてくれたのは三月七日に入ってからだった。

——これでは読者に約束した旬刊発行が維持できないではないか。

寺尾は心の中で愚痴りながら阪口の前稿に目を通した。漢字の多用が目立ったが、短期間の間によく調査したことが窺われ、文章は几帳面に書かれていた。これなら三号からの政治記事は彼にまかせられると寺尾は思った。寺尾と寿恵子は多忙だった。工廠細胞の「唸るクレーン」発行に携わり、ときにはビラや細胞会議の概要なども作成しなければならず、ガリ切りに専念している寿恵子は疲労が重なり、最近では肌の潤いがなくなってきた。「聳ゆるマスト」第二号の一面は体裁の面から寿恵子にやってもらわなければならないが、二面については阪口と平原に分担してもらうことを考えていた。しかし平原の金釘文字はガリ

切りにむかず、阪口にしても未経験の分野で、下手をすれば力を入れすぎて原紙を傷つけた。り字画の多い字を枠内に書き込むことはできないのではないかとも思われた。そんな二人と比較すると寺尾は広高と京大の社研メンバーであつたときに資料作成のため何回かガリ切りや印刷を経験したことがある。今後はその経験を生かしてガリ切りの仕事は分担することが良策だと判断し、寿恵子と相談し実行に移した。

ガリ版は一式しかなかったが、非常手段として昼夜作業をしたので三月十日すぎには五十部余の印刷を終えた。手元に五部、あとは包装紙に包み寿恵子に託した。

こうして「聳ゆるマスト」第二号は梅子から阪口の手に渡った。

第二号を受けとった喜一郎と甚松は翌日から配布ルートを精力的に回った。

旬刊発行という約束を守ることではできなかったが、喜一郎が書いた巻頭記事は上海事件がまだ完全に決着しておらず、商業新聞が禁忌としている天皇の事変への関与や陸海軍の確執などを明らかにしていたので、枠を拡大した水兵たちの投書欄とともに大きな反響を呼び、投書と読者拡大に積極的に動いていた木村莊重や山下達吉、稲垣宏などのもとに新規購読の申込みが相次いだ。

「聳ゆるマスト」第二号の反響は喜一郎のメモを通じて寺尾に知らされた。

寺尾は喜一郎の書いたメモを読みながら氣力がますます充実し、すぐにも第三号発行の

準備に取りかからねばと思った。そのためまずやるべきことは軍事部の会議を早急にひらくことだった。

喜一郎は第二号の配布を終えた数日後に田中書店に立ち寄り寺尾のメモを受けとった。この頃になると喜一郎は、官憲の眼をかわしながら非合法新聞を持続的に発行することがいかに困難な任務であるかを自覚するようになり、二月末に保険外交員の仕事を辞めていた。

官憲の追及をかわす意味からも自宅で何回も会議をひらくことは好ましいことではなかったが、ガリ版器具を移動さすのはそれ以上の危険をとまなうのでやむをえなかった。

夜が支配する時間帯になってから阪口と平原が時間を少しずらしてやってきた。

寺尾は奥の三畳間に案内した。すぐに寿恵子が火鉢で湯氣を立てていた薬缶を使いお茶を淹れて座卓の上に置き、六畳間に姿を消した。

「新聞、好評のようですね」

寺尾は微笑を浮かべながら二人の顔を見た。

「トップ記事を書くのが遅くなり申し訳ありませんでした。文章は自慢できたものではありませんが、なんとかお役に立ててほっとしているところです」

そう言つて喜一郎は頭をさげた。

「阪口さんの上海事件についての記事と水兵たちの思いが噛み合い、読者の共感を得たのだと思います」

水兵たちの窓口的な役割を担当している甚松が言った。

「上海では日本軍が三月三日に一方的な戦闘行為停止声明を出してから、英米仏などが中国との仲介に乗り出しているようですが、事件の発端ははまだ謎のままです。私は満州国成立を列強国の目から反らすために起こした関東軍の謀略ではないかと考えています。それにしても上海に派遣され最前線で戦った陸戦隊の兵士たちは大変だったと思います。慣れない他国の地で、しかも中国軍の中でもアイアンアーミーと称されている精鋭部隊の大軍と戦闘を交えたわけですから。あとから陸軍も二師団を送り込みましたが、それでもなかなかバリケードを突破することができず、相当の犠牲者を出している。他国を武力でもって侵略すれば、最前線で戦う兵士、言い換えれば将来のある若者が命を失い、傷つくことになる、それが戦争の本質です。白髪頭の政治家たちの思惑や軍上層部の命令と飽くなき資本家の欲望の犠牲になるということですよ」

寺尾はいつになく能弁だった。

「これは病棟長をしている稲垣看護兵曹からの情報なんです、呉鎮からは二名の戦死者

が出ただけでなく、負傷者もかなりいるようで、宇品港から呉線經由で海軍病院に収容されているようです」

甚松が寺尾の顔を見ながら言った。

「日本軍の一方的な戦闘停止声明は政府首脳や軍部のいろんな思惑が絡んでいます。これからしばらくは英米などの影響力が強い国際連盟を舞台にした戦争処理についての駆け引きがお行われると思いますが、上海地区における戦争続行はもうないでしょう。それにしても好戦的な軍上層部の連中は図に乗りすぎている。こんな無茶なことがまかりとおれば政党政治は衰退し、軍人が政治の実権を握ることになります。彼らは国際政治の舞台で政治の駆け引きなどした経験がありませんから、国際連盟で孤立することをなんとも思っていない。上海の日本人居留民も軍事力だけに頼る生活をしていたら中国人だけでなく、同じ租界地に住む英米人からも見放されるようになるでしょう」

さすが党オルグだ。言うことは理路整然としており、国内外の情勢をよく把握している。喜一郎は寺尾の話を聞きながら、もっと時間を大切にして勉強しなければ、と決意を新たにしていた。

「ところで第三号の発行についてですが、創刊号で旬刊を読者に約束したことは記憶していますよね。そうになると今月下旬にはなんとしても出さなければいけない。阪口さんと平原

さんはどう考えておられますか」

寺尾は二人の顔を見ながら訊く。

「第二号が遅れた責任は私にあるわけですから、なんとか挽回したいと思っています」

喜一郎は申し訳なさそうに答えた。

「わしも異論はありません」

甚松が言った。

「第三号のトップ記事は私が書くことにします。投書はまだ未掲載のものがありませんから、平原さんにはあと数通の確保と、いつもの街の話題と本の紹介をお願いしたいと思っています」

「じゃ今回は私は何も書かなくてもいいんですね」

喜一郎はほっとしたような表情で言った。

「いや、そうではありません。上海に派遣されている陸戦隊はどんなに遅くとも四月上旬か中旬までには帰還するはずですよ。ですから阪口さんには第二号の続編のようなもの、例えば〈海軍陸戦隊の帰還を歓迎する辞〉と題するような記事を書いてもらい、それを第四号のトップ記事にしたい、そう私は考えているんですが、どうでしょう」

重要な任務だと思ったが反対する理由はなく、喜一郎は頷いた。

「平原さんの考えはどうですか」

「それでいいと思います」

「これで第四号までの発行の段取りは決まりました。ただ問題なのは妻の寿恵子の体調があまりよくないことです。これまで随分と無理をさせてきましたからね。ですから出来はあまりよくありませんでしたが第二号の裏面は私がガリ切りをしました。その経験から考えたんですが、トップ記事は新聞の体裁を守るため彼女に頼みますが、その他の記事は分担してガリ切りをしてもらおうと思っています。もちろん私も手伝います。ただそれを実行するためには事前にガリ切りの練習をしておく必要があります」

「私は一度もガリ切りというのをやったことがないのですが、できるでしょうか」

喜一郎は当惑した顔で訊いた。

「大丈夫です。ちょっとしたコツさえ覚えれば切れるようになります」

寺尾がこともなげに言った。

「わしの字は金釘流でして……」

甚松が顎を撫でながらつぶやいた。

「そのことは承知しています。ただし練習日は一回だけ。三日後の夜、この部屋でということでもいいですか」

「異存はありません。よろしく願います」

喜一郎と甚松は同時に頭をさげた。

「これで今夜の議題は終了です。このあとは第二号の発行が成功したことを祝ってささやかな祝宴をひらきたいのですが、異議はないですよね」

寺尾が珍しくおどけた口調で言った。

隣室で待機していた寿恵子がすぐに台所に行き準備を始めた。肴は小イワシの煮付けと湯豆腐、それに沢庵という質素なものだったが、時々酌をしてくれる寿恵子を交えての祝宴は初めてのことで、熱燗が腹に沁みた。

三日後の夜、喜一郎と甚松は寺尾の家の三畳間にいた。ガリ切りの教師役は寿恵子で、寺尾は表側の六畳間で本を読んでいた。窓には毛布が貼り付けられ、電灯のコードが目一杯下げている。防衛のためだと察した。部屋の隅には練炭を入れた七輪が置いてあり、わずかな暖が漂っている。

「じゃ早速ですが、最初は阪口さんにやってもらいましうか」

寿恵子は喜一郎を座卓に置いてあるガリ版の前に座らせ、製版の原理について説明した。「これがガリ版です。真ん中に付いているのがヤスリで、この上に原紙を置き鉄筆で字を

書いていきます。原紙には蠟がひいてありますから、凹凸のあるヤスリ面と鉄筆が接触することにより蠟が剥離し、印刷のときインクが染み込んでいく仕組みになっています。ヤスリと鉄筆には種類があり、先の細い鉄筆を使うとき筆先に力を入れすぎると原紙が破損することがありますから気をつけてください。それから罫線を引くときは専用のヤスリを使わなければいけません。ですから紙面が完成するまでは色鉛筆で仮の線を引いておきます。力の入れ具合によつては原紙が千切れることがあるからです。題字や見出しを書くときは最初に薄く輪郭を描き、あとで専用の鉄筆で擦り潰していきます。鉄筆を持つ角度は七十五度から九十度。その角度で均等な筆先で書かないと孔が不均等になり、印刷するとかすれてしまいます。それと原紙は手の脂を嫌いますから、鉄筆を握る手の下にはハンカチのような布を当てる、そのことを忘れないでください。説明が長くなりましたが、これから実際にやつてもらいます。いつもは三ミリ方眼紙を使っていますが、お二人ともガリ切りは初めてだということなので、今日は四ミリを使います」

ガリ版の木枠の部分に原紙を載せ、竹差しを当て赤鉛筆で仮枠を作り、恐る恐る字を書いていく。指先を動かすたびにカリカリという音がする。微妙な凹凸のあるヤスリ面が邪魔して形の整った字を書くことができない。書き進めるほどに真冬だというのに額に脂汗が浮いてくる。三ミリ方眼紙を使って活字とあまり変わらない整然とした紙面を作る、そのこと

がいかにも困難な作業であり、時間を必要とするかを実感した。

喜一郎は縦十六字、四十行を書き終えたところで鉄筆を置いた。

「ふうーっ、すごい集中力が必要だなあ」

右手で額の汗を拭いながら嘆息する。

寿恵子は原紙を電灯の光にかざした。

「初めてにしてはまあまあ出来だけど、全体的に筆力が弱い感じですね。これでは印刷したとき字がかすんでしまいます」

つぎは甚松の番だった。

鉄筆を持ち、喜一郎が書いた下段に書き始めたが、いつも本人が言っているようにひどい悪筆だった。漢字が右肩上がりになる独特の四角い字は四ミリ枠に収まらず蛇行している。それでも真剣な表情で挑戦しているのは彼の性格を反映していた。

「聳ゆるマスト」第三号の包みは三月二十日すぎに梅子から受けとった。前号の倍近い厚さだった。一面トップは寺尾が書いた上海事件と満州国成立宣言についての関連性、政府と軍上層部の動向と、日本共産党の見解を述べた記事だった。一面下段から二面にかけては甚松の四角い字で埋め尽くされていたが、二面は兵士からの投書が主体となっていることも

ありクセのある字がかえって親しみを感じさせるから不思議だった。読者はこの字はだれが書いたのだろうと噂するにちがいない。

毎日、朝から晩まで原稿用紙に取りついていた喜一郎は、夕食後、ひさしぶりに解放された気分で甚松の下宿を訪ねた。

喜一郎は包装紙にくるんだ甚松分の新聞を渡しながら、

「第三号の紙面を見させてもらった。甚松さんの字も親しみを感じてわるくないなあ」と言った。

「まあ、座ってください」

甚松は喜一郎から受けとった新聞を座卓の上に広げ、そのうちの一枚を手にしてざっと目を通した。

「安心しました。なんとか格好ついてますよね。なにせ三晩つづけて寺尾さんの家に通ったんですから。ですが自分が書いた字が印刷物になるというのは初めての経験なんで、なんだか妙な気分ですね」

「そんなもんかもしれないなあ。文章を書くことも似たことが言える。新聞の記事となるとウソは書けんし他人の文章を真似ることはできん。そのうえ事件の真相を易しい文章で伝え、党の主張を明確に述べる必要がある。しかし上海事件は日本と中国だけでなく、英米な

ど列強の思惑なども絡み合っているから、情勢を理解するだけで大変なのにそれを記事にしなければならん。このところ毎日のように原稿用紙と格闘しているがそう簡単に書けるもんじゃない。考えようによっては艦のボイラーに石炭を放り込んでいるほうが脳神経にはいいんじゃないかと思うほどだ」

「お互いに慣れん仕事ですけえの」

「しかしこんなザラ紙一枚の新聞でも読むのを楽しみにしてくれている七十人近くの読者がいる。それを思うとへこたれるわけにはいかん。できるだけいい記事を書いて喜んでもらわんとな」

喜一郎は闘志を新たにしながら甚松の顔を見た。

「上海事件の記事は四月五日ころまでには必ず書き上げる。そのことは寺尾さんに伝えておくから、投書集めのほうは頼んだぞ」

「任しといてください」

喜一郎は甚松との会話で体内に蓄積していた鬱屈がすこしほぐれたような気持になり、下宿を出た。

家に帰ったのは十時前だった。

梅子は火鉢の傍で雑誌を読んでいた。窓際にそのままにしてあった座卓を梅子と一緒に

隣室に運び、布団を敷いた。

会社を辞め、月末から喜一郎の給料は入らないのに、梅子はまだ何も言わない。座卓の上や周囲には新聞の切り抜きや本などの資料が乱雑に散らかっていた。限られた紙面の中にどう書けば上海事件の本質と党の見解を伝えられるか、喜一郎は数日前から悩んでいた。

戦艦伊勢の乗組であつたころ上海港に寄港したことは数度あつたが、共同租界地や激戦地となつた閘北周辺の地理に詳しいわけではない。しかし地理を理解していなければ戦況を把握することはできない。喜一郎は田中書店で上海付近の地図を購入し新聞で報道された戦闘場所の確認をしていた。

上海は揚子江の河口が海水と混じり合う南端にあり、黄浦江の水流が南北にひろがる共同租界地を分断するようにして揚子江に辿り着く。その河口の北側に呉淞砲台、南側に高橋砲台があり、南京市を起点として上海市街をつらぬく京滬鉄道は呉淞砲台に近い呉淞鎮駅が終点となっている。日英米仏伊の五カ国が管理している共同租界地は東西に幅広く延び、黄浦江が東に向かって大きく左に蛇行する北側付近に日本領事館、その北方に海軍陸戦隊本部、その西側に中国領の北四川路が南北に通じ、激戦地となつた閘北はその西側にのびる北停車場駅の北側一帯、陸戦隊本部と鉄道を挟んだ直近の位置にある。事件の発端となつた

三友実業社は陸戦隊本部からかなり離れた揚子江に近い租界地の東端にあった。

戦闘は一月二十八日夜半、北四川路の西側で中国軍との小競り合いから始まり、陸戦隊は閘北に向けて総攻撃を開始した。しかし相手は中国軍の中でも歴戦の精鋭部隊と称されている第十九路軍三万三千人で、南京から上海にかけての沿線に防衛線を展開し、前年九月十八日に発生した柳条湖事件以降に中国全土でひろがった日貨排斥運動の急速な広がりのなかで戦意は高く、堅固なバリケードを突破するのは困難をきわめた。このため翌二十九日には空母能登呂から艦上機を出撃させ北停車場や北四川路を爆撃。空陸からの攻撃を仕掛けたが見るべき戦果を上げることができず、中国軍の反撃で兵力一千八百名の陸戦隊は多数の死傷者を出すにいたった。このため海軍は三十日から一日にかけて佐世保と横須賀から一千名の陸戦隊を急派。二日には出雲を旗艦とする第三艦隊が編成され現地部隊はその指揮下に入り、その日から再度の閘北への総攻撃、三日からは呉淞砲台と高橋砲台への拠点攻撃を強行したが、多数の死傷者を出しただけで戦線は好転せず膠着状態に陥った。

現地司令部の戦況不利の報告をうけた東京の海軍軍令部は、一月末には陸軍に対する支援要請を検討しはじめ、三十一日に大角岑生海相は芳沢謙吉外相と荒木貞夫陸相に正式に支援要請を行なった。二月一日、陸軍側は要請に応えることを表明した。しかし折衝のなかで海軍側が上海は固有の警備区域であることを理由に兵力派遣のみを要請し指揮権を手放

そうとしないことが判明。陸軍側は統帥権の干犯だと態度を硬化させ、天皇への上奏を延期し海軍側の出方を待った。

四日、海軍側は指揮権の移譲を意味する派遣兵力の制限を撤回。陸軍側はこれを了解し、五日午前、派遣部隊の編成を天皇に上奏、裁可を得た。

軍人の職を離れて、天皇の果たす役割や政争にあけくれる民政党と政友党の主導権争い、陸海軍部の確執がよく理解できるようになった。戦争が起きる要因は社研で勉強したつもりだったが、軍人という肩書きを付けて見る目と、一市民の目で見るとはまったく違うことも新しい発見だった。戦争を欲しているのは資本家と軍の上層部であることははっきりしている。資本家は侵略した国の土地をただ同然で略奪し、現地人を安い労賃で働かせ搾取し大金を手にする。これらはすでに植民地に行っている台湾や朝鮮でやられていることだ。この二つの国では政治家や左胸にあふれるほどの勲章を付けた高級将校たちは高額な俸給だけでは満足せず、資本家連中から高級料亭で饗応を受け賄賂を懐にし、高級官吏たちもそのおこぼれにあずかっている。

不思議なのは戦争でもっとも実害をこうむる圧倒的多数の庶民が戦争の勝敗に一喜一憂し、わずかな収入からむしり取られた税金が資本家の懐を肥やすための戦費に浪費され、最前線で死傷するのは赤紙一枚で召集された一家の主や若者たちだという現実を直視するの

ではなく、逆に戦争に反対する者にたいし、国賊、非国民、アカなどと言って糾弾し地域社会から排除する行為を当然視していることだった。

そんな彼らを知りだといつて非難することはたやすい。しかし我々は手間と時間はかかるが選挙や自前の新聞などを通じて真実を伝え階級闘争の仲間として迎え入れなければならないのだ。

それが可能であることを我々はいま経験しつつある。二年前に数人の現役水兵が集い社研を創立したとき、前途は雲をつかむ思いだったが、いまでは志を同じくする者は十数人となり、今年二月から非公然の「聳ゆるマスト」という新聞を発行した。そのご上海事件の最中にあつても読者は増えつづけ、第三号では七十人に近い読者を獲得するにいたっている。我々は読者、いや仲間と言ったほうがよいのかもしれないが、これまで以上に政治の仕組みを明らかにし、戦争が兵士や庶民にいかにか悲惨な結果をもたらすかを明らかにしていかなければならない。

上海事件は三月三日の午後、中国軍を北方二十キロの地点まで後退させた時点で日本軍の戦争停止声明で終結を見た。しかし勝利したとはいえず日本軍は一カ月余の戦闘で陸海軍の戦死者は七六九名、戦傷者は二二二二名、うち呉鎮関係は戦病死二八名、戦傷一五六名に及ぶ。計算すると兵員の損耗率は一七パーセントに達する。この数字は中国軍の抵抗がいかに

に頑強なものであったかを示している。

三月一日の満州国成立宣言の陽動作戦だと言われている上海における戦闘は日本軍と中国軍兵士の間に多くの犠牲者を出しただけでなく、戦闘に巻き込まれ生命や住居を失った日中双方の一般市民の損害も多大なものがある。

三月六日、呉鎮所属の二名の戦死者の海軍葬は第一練兵場で行なわれ、軍関係者一万人、市民四万人が参加して霊を弔った。

三月二十三日、巡洋艦大井に乗って帰還した総勢七百名の陸戦隊は第一練兵場で鎮守府長官の閲兵を受けた後、軍楽隊を先頭に市内の大通りを凱旋行進し、市民から熱狂的な歓迎を受けた。

喜一郎は満州事変を境に国策を全面的に支持するようになった商業新聞を読みながら、死傷者を迎えた遺族の心の内に秘められた哀しみと苦難の前途を想像せずにいられなかった。若い兵士たちは虚飾に彩られた盛大な葬儀を催されたとしても二度とこの世に甦ってはこない。負傷した肉体は元にもどることはなく、不自由な体で生き続けなければならぬ。戦争とは酷いものだった。

喜一郎は座卓の前に正座した。記事の筋書きはすでに頭の中で整理されていた。見出しは「上海から帰還する兵士諸君を迎ふる辞」と書いた。本文は関東軍の謀略が噂さ

れる事件の発端と概要、さらに海軍上層部が陸軍に対抗して勲功を焦るあまり中国軍の戦闘能力を過小評価し、租界地での戦争に踏み切り多数の犠牲者を出した。軍部の暴走と武力でもって他国を侵略することがどういう結果をもたらすか、そのことを記述する。

党の方針は揺らぐことなく、昨年九月十八日に関東軍の謀略により始まった満州事件が起きる二カ月前に発行した「赤旗」に、「日本帝国主義の戦争準備と闘え！」という記事を掲載し、日本帝国主義が中国東北部であらたな侵略戦争をおこそうとしていることを具体的な事実をもって暴露した。そして八月一日の「反戦デー」には非合法の集会やデモを各地で組織し、中国東北部と朝鮮・台湾から日本軍隊の即時召還を要求。満州事変の端緒となる八月十八日の柳条湖事件の翌十九日には全国の労働者や農民、兵士に向けた檄文を発行し、中国東北部における日本軍の進撃の意図と目的を明らかにし、「帝国主義戦争反対、中国から手を引け」と国民に呼びかけた。

そのときのスローガンは半年経ったいまでも色褪せていない。

・親愛なる兵士諸君！ 中国の兵士と連帯し、革命的闘争に決起せよ！

・帝国主義的戦争と警察的天皇制反対！

・一切の軍事行動に反対せよ！

・中国侵略の象徴である満州国成立に反対し、日本軍隊の即時全面撤退を！

- ・ 一人の兵士も戦線に送るな！
- ・ 帝国主義戦争の新たな危険にたいし闘え！
- ・ 革命の中心部隊赤軍を援助せよ！
- ・ ソビエト革命政権を守れ！

喜一郎はペンを置いた。

短い記事であつたが、書くことによつて党の揺るぎない方針を体感できたように思えた。原稿用紙を揃え、抹消、加筆、訂正部分を確認しながら総字数を計算した。見出しをふくめ上三段に収めるためにはあと二、三回は手を入れなければならぬだろう。

それにしても、と喜一郎は思った。寺尾から指示されたのは原稿用紙四枚の升目を埋めることだった。だからすぐにでも書けるだろうと思つていたのだが、容易でないことをすぐに思い知らされた。言葉で話すことと書くことはまったく違うのである。しかも自分のために書く日記とちがい、一定の読者がいる党軍事部の新聞であるから事実そのものを正確に伝え、党の歴史と方針を背景にして記述しなければならない。そのためできるだけ多くの資料に目を通したが、引用の漢字が多いため、生硬な文章だと甚松から指摘された域からまだ脱却できていない。

その日の夕刻、喜一郎は着流し姿で田中書店に立ち寄り店主に原稿を預けたのち、甚松の下宿を訪ねた。

甚松は喜一郎が来るのを待ちかねていたようだった。湯気をあげていた火鉢に掛かっていた薬缶の湯を使ってお茶を淹れてくれる。

「阪口さん、新聞の読者百人になりましたよ」と嬉しそうに言った。

「百人だと？」

喜一郎はびっくりしたような声をだした。

「とにかく評判がいいらしいんです」

「そんなに増えると配布のほう心配になってくるな」

「心配はいりません。党員も増えているし、新ルートもできましたから」

「そうか、上海で戦争中だったのに、みんな頑張ってくれたんだ。わしは今日の午前中に原稿を書き上げたので、ここにくる前に預けてきたところだ」

「さすがですね。次号のトップ記事を読むのが楽しみです」

甚松が微笑しながら言う。

「断っておくが文章は上達しとらん」

喜一郎はわざとぶつきらばうに言った。

「いやあ、それはお互いさまですけえ」

甚松がさらりと受け流す。

「しかし満州国の樹立や上海での戦争に党は全面的に反対しているから、これから官憲の監視態勢はますます強化されることは間違いない。甚松さんも氣をつけて活動してもらわんと。そのことは他の同志にも伝えておいてもらいたい」

喜一郎は真剣な目で甚松に言った。

「わかってます。わしも最近は証拠になるようなものは何一つこの部屋に置かんようにしてますから」

「お互い、何かあったら決めたルートを使って知らせることを忘れないようにしよう」

喜一郎は戸を開け、外の様子を窺うようにして外に出た。

西の稜線に沈む前に夕日がひつこいほどの赤色の光芒を放つ呉湾特有の残照はすでに消えかかっていた。喜一郎は尾行のないことを確かめ、山裾の細く曲がりくねった道を自宅のある北に向かって歩いた。

梅子はきょうは早番なので先に帰っていた。いつも台所で忙しくしているのに疲れた顔をして六畳間に座っている。

「どうした。気分でも悪いのか」

喜一郎が心配そうな顔で訊いた。

「このところ街中は戦勝気分で浮き立っていてね、百貨店も忙しいのよ。それで疲れてしまつて」

梅子が気だるい声で応えた。

「呉鎮所属の陸戦隊から戦傷者がかなりでたというのに、そんなに賑やかなのか」

「今夜は外食したい気分なのに、あなたの立場を考えるとねえ」

疲れた顔をした梅子はふらっと立ち上がり、台所に向かった。

「聳ゆるマスト」第四号は四月初旬に発行された。一面下段は寺尾、二面は甚松の字であった。甚松の報告によれば読者の評判は上々で、とくに戦争時の酷使にたいする兵士の不満の投書が話題になっていると言った。喜一郎は原稿書きと配布が無事に終わったことで肩の荷をおろした思いだった。

甚松からの報告と喜一郎の私信は寺尾宛に田中書店に預けた。しかし寺尾からの返事はしばらく途絶えた。

喜一郎は知らなかったが、特高や憲兵は満州事変から上海事変にたいする国内の反戦闘

争の高まりを抑圧するため、全国的規模での弾圧に乗りだし、広島市では三月五日を起点として官憲の動きが活発になり、共産青年同盟オルグの吉岡道人、呉工廠の元細胞長だった片岡義夫らが逮捕された。そして拷問を交えた取調べにより呉市内に党オルグが潜入していることを掴んだのだった。

寺尾は身辺が危うくなってきたのを直感し、「聳ゆるマスト」第四号を印刷した直後に本局近くの今西通二丁目の二階に引越していた。

四月中旬のある日、寺尾はその二階で中央から中国地方オルグとして派遣されてきた三好惣次と面談し、昨年十月に呉地区オルグとして着任してからの活動報告をおこなった。新任の三好はその報告をメモしたあと、広島市で弾圧が始まり多くの同志が逮捕されていることを伝え、官憲の追及をかわすためできるだけ早く上京するよう寺尾に伝達した。

寺尾は事態が切迫していることを知った。印刷用具や書類などは三好が立ち去った直後に処分した。広島市内に住む母親と会うことは時間的に不可能だった。寺尾は惜別の思いで母宛の手紙を書き綴り、翌日の朝、着流しに下駄履きという恰好でポストに投函した。

その直後だった。近づいてきた目つきの鋭い私服の不審尋問を受けた。特高らしい私服は一人だった。寺尾は猛然と彼の胸ぐらを掴みその場にねじ伏せ逃走しようとした。だがその特高は小柄だったが滅法腕力が強く突き放そうとしたが組み手を離さず、寺尾は私服と揉

み合いながら「私は共産党だ！誰か助けてくれ！」と何回も大声で叫んだ。騒ぎが大きくなれば下宿にいる寿恵子が気付いてくれるかも知れないと考えたからだ。しかし通行人は恐怖と好奇心の眼差しで遠くから見つめるだけで手出しをする者はおらず、ついに力尽きて路上に組み伏せられてしまった。そのころ特高刑事を先頭にした武装警官隊は寺尾の下宿を急襲し寿恵子を逮捕、部屋の搜索を行なった。

田中豊から、五月五日に平原甚松が、十日に寺尾と林寿恵子が逮捕されたことをメモで知らされたのはその数日後だった。喜一郎は自分にも危険が迫っていることを感じた。すぐに引越さなければ危険だ。

喜一郎は梅子が帰宅してからすぐに党オルグの寺尾と寿恵子が逮捕されたことを話し、明日は仕事を休み引越し先を見つけてくれるよう頼んだ。

梅子が周旋屋で紹介された下宿は市内北東部の山裾に位置する草里町にあった。あれこれ言っている場合ではなかった。野村チサが買い揃えてくれた家財と余分な物は周旋屋に売却を依頼し、その日のうちに引越しを済ませた。家は狭い道に面して立っており、部屋は二階で六畳と四畳半の二間、家財がなくなり一度に殺風景となった。

下宿生活に逆戻りしてから喜一郎は変相のためチョビ髭をたくわえはじめた。

特高刑事を先頭に武装警官隊は喜一郎が引越した翌日、和庄の家を取り囲んだが空振り

に終わった。しかし彼らはそのごも追及の手を緩めることなく工廠内の党組織の壊滅に乗り出してきた。最初に海工会の幹部である上田稔が逮捕され、彼の自白と押収書類により黨員名と連絡方法などを官憲が把握し、最初に細胞長の川窪鉄之助と佐々木万寿司、ついで西川成美、宇都宮寿作、小川一雄、重田安一、野原一男、池上繁雄の八名、六月に入り広村中央小学校訓導の城戸薫、田中書店の田中豊らが逮捕され、呉署管内の逮捕者は五十二名に及んだ。

五月十日に逮捕された寺尾一幹は三十日の未明に呉署からの脱走に成功し、灰ヶ峰を越えて広島方面に逃走。呉署が早朝から百八十名の署員を総動員し非常警戒網を敷いたが、役に立たなかった。

喜一郎は素早く動いた。

六月初旬のある日の夜、喜一郎は中折れ帽を目深に被り家を出た。最初に特務艦朝日乗組の北田健二の下宿を訪ね、寺尾一幹と平原甚松が逮捕されたことを知らせた。北田は軍隊内では緊迫した空気は感じられないと言った。喜一郎は北田に小倉正弘の下宿先を教えてもらい、早々に下宿をあとにして小倉の下宿へと向かった。木村莊重の実家の住所を教えてもらうためだった。木村莊重は反戦思想の持主として海軍上層部から疎外され、六年間一等兵に据え置かれたまま五月末日でもって満期除隊となり帰郷していた。彼は現役時代から社

研のメンバーで情報提供者でもあった。

「梅子、島根県の津和野町まで行きたいんだが、金はあるか」

帰宅した喜一郎は火鉢に手をかざすようにしながら梅子に訊いた。

「どのくらい要るのかしら」

「そうだな、往復で五円もあれば」

「津和野まで何しに行くの」

「このまま呉におるとわしも特高にやられるかもしれん。しかし任務を放棄して呉を離れるわけにはいかん。それでつい最近まで海兵団にいた木村莊重という男に早急に会う必要がある。彼は後任としてふさわしい男だからな」

梅子はしばらく考えていたが、

「いいわ、明日銀行へ行って引き出してくる」

「すまん、迷惑ばかり掛けて」

「なに言ってるのよ。そんなことは承知の上で結婚したんじゃない。あなただって途中で音を上げたくないでしょ。そんなことより道中気をつけてくれないと」

梅子は喜一郎の顔を見ながら励ますように言った。

その翌々日の早朝、喜一郎は呉線に乗り津和野に向かった。

途中、広島駅と小郡で乗り換え、津和野駅に着いたのは午後二時すぎで、西隣りの木部村へ行く交通手段はなく歩いて三時間余りかかった。木部村の人口は約二千五百人、戸数は四百戸ほどだと木村莊重から聞いている。村に辿り着いたときには山間はすでに夕暮れの気配がたちこめていた。

村人に尋ね、開け放してある土間から声を掛けると莊重が座敷から特徴のある卵形の顔を覗かせた。二カ月余り見ない間に随分と日焼けしている。

座敷に座った喜一郎は来村の理由を話した。

「平原甚松が五月五日に、党オルグの寺尾さんは五月十日に逮捕されたんだが、寺尾さんは三十日未明に呉署から脱出に成功した。莊重さんが海兵団を満期退団したのはその翌日だった。わしは北田と小倉を下宿に訪ねて聞いたんだが、軍隊内ではまだ憲兵は動いてないらしい。しかし寺尾さんと平原の部屋は搜索を受けているはずだから、わしもかなり危険な状態にある。日程はまだ未定だが三好オルグから上京するよう指示を受けている。だからいまのうちに代わりの責任者を決めておく必要がある。どうだろう、軍事部の任務を引きうけてもらえないだろうか」

「わかりました。やらせてもらいます。わしは軍隊内の待遇改善はどうしてもやらねばならんと思つとるんです。阪口さんも知つてのとおり、わしは海兵団に六年在籍して一等兵に

据え置かれました。はいじゃが入団した翌年五月の山東出兵には陸戦隊の一員として派遣された経験があります。任務は日本人が経営する工場の番兵、夜は経営者が高級将校を接待する料亭の護衛の役じゃった。ご存じだと思いますが将校連中は月に四、五百円の俸給を貰つとるんです、それにもかかわらず毎晩のようにタダ酒をくらつとる。あのときはほんまに腹が立ちました。まあ貧乏百姓の息子だったことありますが、軍の上層部に反感を持ち、社会変革の意識を持ちはじめたのはそのときの体験が大きく影響しとるんです」

莊重は喜一郎より五歳年下だったがカラツとした性格だったので、彼の話しぶりにいつのまにか引き込まれ、地酒を飲みながらの二人の談笑は夜遅くまで続いた。

朝早く食事をすませ農業と種牛業を営んでいる両親に別れの挨拶をして、喜一郎と莊重は津和野駅に向かった。天気は良く周辺にひろがる稲の穂先は勢いよく伸び、若い緑色が目に染みた。日差しは少し強かったが、ときおり稲の穂先を波打たせながら吹き渡ってくる風は心地よく、空気も新鮮だった。

広島駅に着いたのは午後をかなり回っていた。喜一郎は五月中旬に活動資金を得るため帰京していた中国地方オルグの三好惣次と白島の縮景園で会う約束をしていた。しかしそれは木村莊重が軍事部の後任を引きうけ広島に出てくれることを前提としたものだったから、時間は厳密に決めていなかった。

午後四時前、入園料を払い園内に入った。二人は真ん中の人口池を見ながら左回りの道を歩いた。見覚えのある商人風の和服を着た三好は目立たない東側の奥のベンチに腰掛け京橋川を眺めていた。

喜一郎は三好から少し離れた所に腰掛け、「遅くなりました。木村莊重さんと一緒です」と低い声で言った。

「中国地方オルグの三好惣次です」

彼は軽く頭をさげた。

「木村さんは任務に就くことを了承してくれました」

前を向いたままで左隣りに座っている莊重を紹介した。

「木村さん、入党する意志はありますか」

三好が言う。

「もちろんです」

莊重はきっぱりした口調で答えた。

三好は警戒のため周囲を見回し、ちらつと莊重の顔を見たあとと言った。

「閉園の時間が迫っているので簡略に話します。党中央は阪口さんに上京を要請し、新しい任務に就いてもらうことを決めました。そして軍事部についてですが、これまでは呉地区

に限定していましたが広島地方軍事部と改称して、その責任者に木村莊重さん、あなたにやってもらいたいと思っています。しかし木村さんは呉の海軍部内では顔が知られているそうなので、第五号からの新聞は広島市内で作成したものを呉に持込み、配布したいと考えています。当面の発行費用は私が東京で工面してきましたのでそれを充当します。ただ今は弾圧直後なのでもう少し様子を見る必要があります。ですから木村さんには明日にでも村に帰り農作業に専念してください。広島市内には今回の弾圧をのがれた優秀な同志がいますので、新聞の発行再開時にはその同志たちに協力してもらおうことにしています。阪口さんは中央から連絡が届きしだい上京していただきたい。東京では阪口さん夫婦のアジトを用意する手筈になっています。ですからアジトに着いたら中央の組織部長である紺野与次郎さんからなんらかの方法で連絡があると思います。そのあとは紺野さんの指示に基づいて動いてください。ただ東京も監視の眼がきびしくて幹部がつぎつぎ逮捕されています。私は上層部に特高のスパイが潜り込んでいるのではないかと思っていますがね。最後になりましたが寺尾同志は呉署を脱走後は各地の黨員やシンパの献身的援助で列車を乗り継いで無事に上京することができました。いまではすっかり元気になり活動を再開していますので安心してください。以上が党中央が考えた当面の方針と報告です。質問があれば遠慮なくどうぞ」

「呉署に留置されている平原甚松はどうなりますか」

喜一郎が訊いた。

「起訴されるか、不起訴となるか、いまのところなんとも言えません。もう暫く様子を見守るしか方法はありませぬね」

「わかりました」

「木村さん、なにかありませんか」

「よくわかりました。もうしばらく木部村でおとなくしています」

「これは帰りの旅費と、五月二十日付の〈赤旗〉第七十七号です。寺尾同志から活動報告をうけ、私が原稿を書いたものです。阪口さんたち水兵細胞が弾圧を覚悟して現役兵士に向けて発行した軍港新聞についての記事が載っています。通信員とあるのは私のことなんです。この記事は全国に大きな反響を巻き起こしました。呉軍事部の活動の誇りとして大切にしてくださればと思っています」

三好は懐に入れていた旅費を入れた封筒と包装紙にくるんだ「赤旗」を二人に渡した。

三人はベンチから立ち上がった。そしてその場から別な道を通り園外に出た。

呉線に乗り、自宅に帰ったのはあたりがすっかり暗くなった七時前だった。階段を上がり襖を開けた。梅子は火鉢の横で雑誌を読んでいた。

「あら、お帰りなさい。疲れたでしょう」

「ああ、津和野に着いてから大変だった。木部村は駅から歩いて三時間もかかる不便な所でな」

喜一郎は疲れ切った表情で言った。

「あなた、顔が汽車の煤で真っ黒だわよ、銭湯に行ってきたら。夕食まだでしょうから、その間に用意しときますから」

「そうしょうか。これ、工面してもらった旅費の残りだ。広島市内で会ったオルグが出してくれたんであまり使ってない」

喜一郎は懐に入れていた残金と封筒を梅子に渡した。

時間が遅いせいか銭湯は空いていた。喜一郎は露出した皮膚にこびりついた煤を洗い落とし、浴槽に体を伸ばした。じわっと旅の疲れが体内から出ていく心地がする。

「ああ、いい湯だった」

洗面用具を梅子に渡しながら喜一郎は言った。

「さ、一本つけたから、風呂上がりはどうぞ」

梅子はそう言って銚子を手にした。

「すまんな、気を遣わせて」

喜一郎は盃に受けた酒を味わうように飲み干した。

「それでどうだったの、オルグの話」

待ち構えていたように梅子が訊く。

「呉にいたら危険だから上京して新しい任務に就くように指示された」

「まあ、東京へ。懐かしいなあ」

梅子が嬉しそうに言った。彼女は県女を卒業してから、東京で洋裁学校に通っていた時期があるのだ。

「できるだけ早くということだったが、主だった同志にはそのことを伝えておきたいし、梅子の実家にも挨拶しておかないといけんだろう」

「そうよねえ。それでいつごろ出発する予定なの」

「そうだな、今度の旅で奴らの警戒はかなり緩んでいるように感じたが、もっと様子を見る必要がある」

「それだったらこうしたらどうかしら。今月いっぱい私が仕事すれば給料をもらえるですよ。だから呉が出るのは来月初め。それからしばらく広島白島の実家に世話になるというのは」

「いい案だが、白島の家、わしらが居候する余裕があるかなあ」

「だめなら近くで家を借りればいいじゃない。顔のほう、広島市内なら大丈夫なんでしょ」梅子はその気になっているようだ。

「よし、そうしよう」

喜一郎は二、三度頷くようにして言った。

「さあ、忙しくなるわよ」

梅子は上機嫌で呟いた。

喜一郎はその翌日から、日中は本を読んで過ごし、夜になると主だった同志の下宿先を訪ね、五月五日に平原甚松が、十日には寺尾オルグが逮捕されたが、寺尾オルグは二十日後に呉署を脱走したこと、自分は新しい任務に就くため上京する、後任には木村莊重が就くことになっていることなどを伝えた。

話を聞いた同志は一樣に喜一郎との別れを惜しみ残念がったが、了承してくれた。

仲人の教官にも会いたかったが、迷惑を掛けるようなことになってはいけないと思い、上京してから手紙を出すことにした。

その間、梅子は実父の金子威馬三と手紙のやりとりをしていたが、居候はあきらめ近くの下宿屋を探してもらい、とりあえずそこへ移り住むことになった。

布団や台所用品を運送屋に頼み、呉を離れたのは七月初めだった。

半年余りの緊張状態から解放された喜一郎にとって、白島での生活は新婚時代に逆戻りしたように感じられた。

白島に住むようになってしばらくして梅子はミシンを貸与されての洋裁のアルバイトを始めた。東京での暮らしに備え、いまのうちに少しでも稼いでおきたいと思ったからだ。

喜一郎はたまに梅子に誘われて近くに外出するだけで、一日のほとんどを政府によって発禁処分となっている社会科学の本やプロレタリア文学を濫読し、その感想を雑記帳に書いて過ごしていた。そして時折、縮景園でオルグの三好惣次から手渡された〈赤旗〉の紙面を広げた。「聳ゆるマスト」創刊号に掲載した兵士の要求が一面の左下段に全文紹介されていた。そのスローガンのものに集約したのは喜一郎であつたから、いろんな思いが甦ってくるのだつた。

上京してからの任務先は横須賀だろうと推察していた。横須賀における党の活動は、平原甚松が乗組んでいた艦が修理のため半年間ドックに入っていたときには始まっていたというから呉よりも二、三年早い。その横須賀の水兵細胞ではまだ新聞は出されていないと聞いている。喜一郎は任務についたら「聳ゆるマスト」のような新聞を発行したいと考えていた。しかし今度は寺尾一幹の力を借りることはできないだろう。とすれば自分が書く能力を身

につけなければならない、そんな思いで本や雑誌を読み、感想を書き連ねていたのだ。

八月二十日頃までに上京してほしい、アジトは白金台に用意してある、という党中央から手紙が届いたのは八月に入ってからだった。

権力と富が集中する東京に足を踏み入れるのははじめてのことだ。喜一郎は党中央から手紙を読んだあと、体内から闘志が湧いてくるのを覚えるとともに、もう二度と呉と広島に帰ってくることはないだろうと思った。

——そうだ、上京する際に伯村に立ち寄り兄や親戚に迷惑が掛からないよう籍を抜き、ついでに友人や恩師に梅子を紹介し、東京で新しい仕事につくことを知らせておこう。

その日の夕食時、党中央から上京を促す手紙が届いたことを梅子に話した。

「ようやく東京へ行けるのね。いつ出発するの」
目を輝かせながら梅子が言った。

「そうだな、伯太村に一週間ほど滞在するとして、八月五日頃に出発すると二十日までに東京に着けるだろう」

「大阪の伯太村というと、あなたの古里なんですよ」

「そうだ。兄貴や友人たち、それに恩師の松下先生に知らせておきたいんだ。東京で仕事することになったことをな」

「世帯道具などはどうするの」

「白金台に家を用意してくれてるから、出立前にそこへ送ればいいだろう」

「あと一週間しかないわ。大急ぎで準備しないと」

日めくりカレンダーを見ながら梅子が言った。

翌日から喜一郎と梅子は体中から汗を吹き出させながら出立の準備にとりかかった。

喜一郎と梅子が金子の父と母に別れを告げ、広島発二三時五五分の京都行寝台急行に乗ったのは八月初旬のある日のことだった。

2

切符を買ったのが直前だったので座席は最後尾の中程だった。二人の着替えなどを入れた牛革の旅行鞆は空いた座席の下に押し込み、梅子に二段目を譲り、喜一郎は最上段に落ち着いた。

車内のスピーカーから車掌の声が流れたあと、列車はゆっくりと動きはじめた。大阪まで約八時間の行程だった。喜一郎は窮屈な空間の中で下着一枚になり、カーテンを閉めて横になった。少し蒸し暑さを感じたが冷房が効いているので我慢できないほどではない。

古里に帰るのは四年ぶりだった。芦部尋常高等小学校を卒業して十六年が経っていたから村には数えるほどの友人しか居ない。しかも兄の米太郎は事業に失敗し、先祖伝来の田畑や家売り払い伯太小学校前の借家に移り住んでいたから長逗留もままならない情況にある。しかしどうしてもやっておかなければならないことがあった。東京で任務につくことに

なれば危険度はより高くなるはずだった。だから最悪の場面をも覚悟しておかなければならない。党の運動はまだ端緒に入っただけだが、国家権力はその萌芽すら権力機構を脅かすものと恐れ、治安維持法をふりかざし根っ子から摘み取ろうとしている。そのため彼らは手段を選ばない。党員とシンパを弾圧するだけではなく、国賊、非国民と罵り、国民に恐怖感を植え付け村八分にするよう仕向けている。また家族と親族に圧力を掛けるのは彼らの常套手段だった。事業に入れあげ、運動にあまり興味を示そうとしない兄ではあったが、幼少のころよく面倒をみてくれた優しくて頼りになる存在だった。それだけに自分の信じる運動によって兄に迷惑をかけてはならないと思っている。古里に帰る目的のひとつは村役場を訪れ分家届を出すことにある。下から梅子の軽い寝息が聞こえてくる。気は強いが心根の優しい女房だった。

そういえば藤野リエはいまどんな暮らしをしているのだろうか。芦部尋常高等小学校のとき藤野利三郎という親友がいて、よく彼の家に遊びに行ったものだった。彼には三つ年下のリエという可愛い妹がいて、喜一郎になつき、ときおり一緒に遊ぶこともあった。それが成人になるにつれ恋心が変わっていったのは自然の成り行きだった。ふたりの愛は喜一郎が織布会社を辞め、呉海兵団に入ってから変わることはなかった。

喜一郎が二十五歳の時だった。

この年の二月に東京湾で旗艦に天皇が座乗した観艦式が百隻以上の艦船を集結して展開された。その帰路、呉鎮所属の艦隊は神戸に寄港し艦は市民に一般公開された。乗員は交替で休暇が与えられ、神戸の夜の街は多くの兵士たちで賑わった。機関兵にも交替で休暇が与えられ、喜一郎はリエに逢うため朝早く神戸駅から列車に飛び乗り伯太村に帰った。

帰村した喜一郎はリエに逢うため近所の子供に手紙を託した。リエは村の風景が茜色から暮色に変化する頃、阪口家の旧宅前にある妙福寺の境内にやってきた。ふたりは近所の人たちの目を避けるため本堂の裏手にまわった。

「どうしはったん」

「ああ、横浜沖で観艦式があつてな、呉の艦隊は神戸に立ち寄り市民に公開されてる。それで休暇が出たのでリエちゃんに逢いとうなり急いで帰ってきたんや」

「ちようど良かったわ。喜一郎さん、うち、できたみたいなんや。まだ先生には診てもらってはないけどな」

リエは着物の上から下腹をさすりながら言った。

「なんやて、赤ん坊ができた？」

リエは嬉しそうな顔をして頷いた。

「そうか、それやったら明日にも兄貴に行ってもらわんといけんな、結婚の申し込みに」

「でもなあ、両親にはまだ言うてないんや。そやからすぐにきてもらっても困るんや」

「じゃ、わしはどないすれば」

「うちにもわからへん。うちの両親はきついさかいなあ」

「ほならわしのほうは今晚にでも兄貴に相談してなんとかええ方法を考えてもらうわ」
もうあたりはすっかり暗くなっていた。喜一郎はリエをしつかりと抱きしめたあと、足早に消えていく彼女の後ろ姿をみつめていた。夕食後、喜一郎は兄の米太郎に、交際しているリエが身ごもっていることを話し、対処策を相談した。

「なんてこった。薄々は気付いていたが、よりによって藤野家の娘を身ごもらすとはな」
米太郎は苦々しい顔をして言った。

「小学校時代からの知り合いで、惚れ逢うた仲やからどうにもならへん」

「藤野の父親は土建業をやっててな、家柄をすごく気にする性格なんや。しかもわしが事業に失敗してまだ先行きが見えん状態やないか。そやからお前と藤野利三郎が小学校時代から仲良しや言うても、そう簡単には承知せんやろ。しかし出来てしまったことはしょうがない。折を見て話してみるわ。結果は手紙で知らすからしばらく待っていてくれへんか」
腕組みをした兄の米太郎が言った。

喜一郎が兄からの手紙を受けとったのはそれから二週間後だった。

よくも嫁入り前の娘を傷物にしてくれたと散々なじられ、あんたの家とわしの家とは家柄が違う、娘とは今後いっさい会わんでくれ、今後阪口家の者がわが家の敷居を跨ぐことは絶対に許さん、そう言つて追い払われたと書いてあつた。

手紙を読み終えた喜一郎はしばらく悄然としていた。妙福寺の境内で逢つたときリエが嬉しそうな顔をして下腹をさすつていた情景が変転し、哀しそうに肩を落として涙を流しているさまが走馬燈のように浮かんでは消えていく。しかし時間が経つにつれ、狭い村内にあつて何が家柄だ、みんな同じ人間ではないか、という猛烈な反発心が湧いてきた。

そのときの気持が帰村を拒みつづけ、四年余りの歳月が流れた。

赤ん坊が無事に生まれていれば四歳になっている筈だ。しかし子供が男の子であるのか女の子であるのかは知らされていない。喜一郎は一目でいいからリエと子供に逢いたいと思つた。

間もなく大阪に到着するという車内放送で目が覚めた。

上半身を折り曲げた窮屈な恰好で着替えをすませ、カーテンをあけフロアに降りた。梅子は窓際に立ち、流れゆく風景を眺めていた。

「どうや、よく眠れたか」

「まあまあね。でもあなた、何か寝言を言ってたみたい」

「そうか、夢を見ていたんかもしれん」

喜一郎と梅子は他愛のない朝の挨拶がわりの会話を交わした。

列車は七時四十分丁度に大阪駅のホームに到着した。喜一郎は右手に牛皮の旅行鞆を持ち久しぶりに踏むホームの感触を確かめていた。二人は構内の食堂で朝食をとったあと、阪奈線に乗った。

和泉府中駅を降りたのは十時過ぎだった。

伯太小学校の前にある兄の米太郎の家まで歩いて辿り着いたときには二人とも汗びっしりになっていた。

兄は留守だったが兄嫁が愛想よく迎えてくれた。二人は奥の部屋に通され、しばらくして兄嫁が沸かしてくれた風呂で汗を流した。

ふたりが狭い裏庭を見ながら団扇を使っていると兄嫁がスイカを大皿に盛って姿を現した。

「さあさ、何もありませんがスイカでも食べてください」

「お義姉さん、気遣いさせてすみません」

喜一郎はあぐらを組んだまま頭をさげた。

「兄貴、その後どんな塩梅ですか」

スイカを食べながら喜一郎は世帯やつれた兄嫁に訊いた。

「それがなあ、こんなご時世やろ。お金を貸してくれる人もいなくて、事業のほうもなかなか思うようにいかんようです」

「そうですか、お義姉さんも苦勞が絶えんようですね。ところで子供たちはどうしてますか」

「貧乏世帯で上の学校にやることができず、いまは堺で働いています。住み込みですからたまにしか帰ってこないんです」

兄嫁は哀しそうな顔をして言った。

「兄貴やお義姉さんには随分と迷惑を掛けましたからなんとかしたいんですが、下士官は俸給が安うて貯金などできませんから、どうにもならなくて」

喜一郎は申し訳なさそうに言った。

「そんなことより、喜一郎さんのお力になれず申し訳なく思ってます」

「いや、そんなことはありません。いまでも感謝してます」

兄嫁はこれ以上話をするのが辛いといった風情で、食べ終えたスイカを盆に載せ台所に消えた。

兄の米太郎が帰宅したのは日没前だった。

「帰ってたんか」

「ああ、四年ぶりや」

「そうやな。で、今度はなんの用事だ」

「任務で東京に出ることになってな、丁度いい機会だから墓参りしたり、役場に行つて戸籍を抜いときたいと思つとる。あつ、紹介するのが遅うなつたが女房の梅子や」

「初めてお目にかかります。野村梅子です。宜しく願ひします」

梅子は三つ指をついて挨拶した。

「喜一郎の兄の米太郎です。よろしゅう願ひします」

米太郎も軽く会釈する。

「手紙に書いたように結婚式は挙げたんやが、養父母の反対で入籍できんでな」

「そうか、お前もあれこれ大変やな」

そこへ台所で立ち働いていた兄嫁が姿を見せた。

「あんた、準備できましたから」

といいながら酒肴を卓袱台の上に並べた。

「喜一郎、久しぶりだ。さあ一杯いこう」

米太郎は上機嫌で喜一郎の差し出す盃に銚子を傾けた。

「さあ、梅子さんも。結婚式に出れんかったから、一年遅れの結婚祝いや」
そのあと喜一郎が米太郎と兄嫁の盃に酒を注いだ。

「乾杯！」

身内だけの、ささやかな祝杯だった。

その夜、片づけられた四畳半の部屋に二組の布団が敷かれ、蚊帳が吊られていた。

「あんた、此処にいつまでいるつもりなの」

梅子が小声で喜一郎に訊いた。

「そうやな、明日の午前中に墓参りをすませ、役場に行く。それからのことはクリーニング屋をしている堀川一芳と相談してからだ」

「なんか心苦しい気がするの。お義姉さんに気を遣わせて」

「それはわしかて同じことや。兄貴も経済的にいちばん苦しいときやからな」

喜一郎は腕を伸ばして梅子の手を握った。

翌日、朝食をすませた喜一郎と梅子は阪口家の菩提寺である無住職の妙福寺に向かった。

「これがわしらに住んでいた家や」

寺門をくぐる前、喜一郎は門前の二階建の家を指さした。

本家の墓所は黒鳥山公園北側の小高い丘の上にあった。梅子が花を供え、喜一郎が柄杓で水をかけ墓石を清める。そのあと墓石の前にぬかづき父母や姉たちの霊を弔った。

「どうや、いい眺めだろう。すぐ下に広がっているのが黒鳥山公園。明治になって合併するまで公園の周辺は黒鳥村だったがいまは伯太村になっている。右下が陸軍第四砲兵連隊の駐屯地。広いだろう。一年に一回は奈良や和歌山、神戸の駐屯地から総勢一万人、軍隊用語で言えば一個師団規模の兵隊が集まってな。後方に見える低い山並みの信太山が満州の地形によく似ているということで大演習が行なわれたもんや。演習地の面積は百万坪もある。その駐屯地の下の方が伯太小学校。わしが二年在席した芦部尋常高等小学校はずっと左手の下の方になる」

喜一郎は懐かしさに抱かれるような表情で梅子に説明した。

墓参から帰りに駐屯地の下にある町役場に立ち寄り分家届の書類を提出し、受理された。伯太村で錦屋というクリーニング店を営んでいる堀川一芳の家に着いたのは昼前だった。

鉢巻き姿で汗だくになって仕事をしていた一芳は喜一郎の顔を見るとすぐに、

「おう、帰ってきたか」

と大声で言った。

「四年ぶりだ」

「もうすぐ一段落つく。女房が奥にいるから勝手に上がって待つといてくれ」

喜一郎と梅子は玄関から奥に声を掛けて座敷に上がった。

すぐに嘉子夫人が二人を奥座敷に迎えた。

「お久しぶり、昼食、まだなんでしょう」

「はい」

「すぐ用意しますから、座って待っててくださいね」

入れ替わりに一芳がランニング姿で汗を拭きながら入ってきて、どっかと座った。

「墓参り、済んだか」

「ああ、帰りに役場に立ち寄り分家届を出してきた」

「かなりの決意らしいな。何処へゆく」

「東京だ」

「ほう、それはまた」

「紹介しておく。妻の梅子だ」

梅子は頭を下げた。

「堀川一芳です。阪口とは小学校時代から仲良うしています。しかし美人だ。喜やん、い

い人を見つけたんだな」

そう言って豪快に笑った。

「それで、帰ったのは昨日か」

喜一郎が頷く。

「予定は？」

「一週間くらい居てもいいんだが、兄貴の家、狭いので居づろうてな」

「そうか、それならわしの家に逗留すればいい。空いている部屋がある」

「いいのか」

「ああ、全然かまわん。今晚からでもいいぞ」

「それは助かる。じゃそうさせてもらおうか」

「積もる話は山ほどある、そうだろう喜やん」

「そりゃそうだ」

喜一郎は微笑しながら応えた。

その日から喜一郎と梅子は堀川家の客人となった。

堀川夫妻の間には小学校に通っている男と女の子がいた。だから夜の食卓は賑やかだった。夫婦に似て開放的な性格で、梅子もすぐに家族の一員として迎えられた。梅子の明るい

笑顔を見るのは久しぶりだった。

談笑の中で、梅子は東京で洋裁学校に通っていたことがあると喜一郎が話すと、堀川夫妻だけでなく二人の子供は目を輝かせて梅子の顔をみた。そして食事がすむのを待ち構えていたように、梅子の手を引いてミシン台が据えてある部屋に連れて行ってしまった。

「梅子さん、迷惑じゃないかしら」

嘉子夫人が心配そうな顔で言った。

「心配いりません。広島を出立するまではミシン縫いのアルバイトをしていましたから」

「そうなんですか。じゃ子供たちに何か縫ってもらおうかしら」

「いいと思いますよ」

嘉子夫人は二人の男を放り出してミシン部屋に向かった。

「女はおしゃれに目がない」

一芳が愉快そうに喜一郎の顔を見た。

「ずっと気になっているんやが、藤野リエさん、その後どうしているか知ってるか」

喜一郎は小声で訊いた。

「赤ん坊が生まれるまでは家にいたんやけど、池上村の南家に嫁いだんや。まあ嫁いだといえど世間体はええが、家柄を守るための厄介払いというところやないか、わしはそう思う

とるんやが」

「赤ん坊と一緒にか」

「そうや。しかし嫁いだ相手の男は素行が悪うてな。リエさんも随分と苦勞してると聞いとる」

「生まれた子はどっちや」

「男の子や」

「男の子か……」

「逢いたいんやろ」

「そりや、わしにとつては初めての子供やからな」

「しかし難しいな。世間の口はうるさい。逢うとリエさんを苦しませることになるだけや。喜やんの気持は折りをみてわしのほうから伝えておくわ」

「そうやな。しかしリエさんには悪いことをしたと思うとる。いまになつては会つて謝ることもできんけどな」

「そう自虐的にならんでもええのとちがうか。お互いに惚れおうとつたんやから。喜やんが遊びのつもりで付き合つていたとは誰も思うとらん」

「二目でいいから子供の顔を見たいんやがな」

喜一郎は指で目頭をおさえながら言った。

「過ぎたことや、あまり気にしとると今度は梅子さんが傷つく。さ、一杯いこう」
一芳は銚子を差し出した。

「芳やんにはいろいろ心配かけてすまんと思うとる」

「なに言うてんのや、古くからの友達やないか」

喜一郎は彼の心遣いを心底うれしく思った。

「それで、これからどうするつもりだ」

「東京で新しい任務に就くことになつとる」

「共産党の仕事か」

「そうや。官憲の眼が厳しゅうなつてな。呉で活動するのが難しゅうなつたんや」

「喜やんの一途さは子供のころからまったく変わつとらんな。しかし危険な仕事や。一歩間違えば監獄行きやで」

「そのことは最初から覚悟しとる。しかし女房の梅子と一緒にや。慎重に活動せんとな」

「よう分かつとるやないか」

「どうやら酔うたようや。横にならしてもらっていいかな」

「めしはどうする」

「いや、もう十分だ」

喜一郎は体を揺らしながら立ち上がった。

その翌日の夕刻。喜一郎は一人で堀川家の前の家に住んでいる恩師の松下ユウ先生を訪れた。

「あら、誰かと思ったら阪口さん」

「先生、お久しぶりです。この時間であればご在宅だろうと思いお訪ねしました」

「ま、玄関先ではなんですから、さあ、上がってくださいな」

松下先生は喜一郎を応接間に案内した。

「ちよつと待っててね、すぐにお茶を淹れるから」

喜一郎は床の間を正面にして、出された座布団に座った。しばらくして盆を両手で持って松下先生が姿を見せた。

「お待ちせしました。粗茶ですがどうぞめしあがれ」

そう言いながら湯呑みを喜一郎の前に置いた。いつ見ても先生は若々しかった。芦部尋常高等小学校に赴任してきたのが二十歳すぎだから、三十半ばを過ぎたところだろう。

「ほんとうにお久しぶり。この前お会いしたのはいつだったかしら」

「四年前です」

「男前の写真を貰ってからもう四年が経ったのねえ。阪口さんには外洋にでると地球が丸いことがよく分かるとか、鯨やイルカが群になって泳ぐ姿を見た話とか、いろいろ珍しい話をしてもらったわね」

松下先生は昔のことを懐かしむような表情をして喜一郎に言った。

「それで、休暇で帰ってきたの」

「いえ、海軍は昨年の秋に除隊になりました」

喜一郎は除隊になるまでの顛末を話した。

「そうだったの。あなたは子供のときから正義感が強かったからね。それにクラスをまとめるのが上手だった。先生はあなたに随分と助けられたのよ」

「いや、それは褒めすぎです」

「海軍を退いて、いま何をしているの」

「呉にいたときにはこんな新聞を出していました」

喜一郎は内ポケットに入れていた茶封筒の中から「聳ゆるマスト」第四号をとりだし、座卓の上にひろげた。

「二面の〈上海から帰還する兵士諸君を迎ふる辞〉とある記事はわたしが書いたものです。

文章は硬いんですが」

「まあ、軍隊に向けてこんな新聞を出していたの」

松下先生は驚いたような顔をして新聞の記事に目を通した。

「この新聞、憲兵や特高に見つかったら大変でしょう?」

「はい。それで身辺が危なくなつて、これから東京に行つて新しい任務に就くことになつてゐるんです」

「いま国民が満州国の成立で熱狂的になつてゐるときに戦争反対の新聞を出すなんて、阪口さんはすごいことをやつてゐるのね」

松下先生は喜一郎の顔を真剣な眼差しで見つめながら言つた。

「戦争がなくなつて、みんなが幸せになる世の中をつくるためです。先生、御迷惑でなければ、その新聞とこの本を進呈します」

喜一郎はそう言つて『弾丸ヲクグツテ』と題した本を松下先生の前に押しやつた。

「阪口さんからの贈物ですから、ありがたく頂戴します」

松下先生は本の上に折り畳んだ新聞を置き、両手で捧げるようにしながら言つた。

「それでは先生、今日はこれで失礼します」

喜一郎は膝の上に両手を置いて一礼をし、松下先生の家を辞した。

堀川家に帰ると二人の子供が大はしゃぎしていた。梅子が昨夜からきょうの昼にかけて縫っていた子供たちの洋服ができあがり、ハイカラな洋服を着て喜んでいたのであった。

「松下先生、元気やったやろ」

一日の仕事が一段落したのか、タオルで汗を拭いながら一芳が部屋に入ってきた。

「ああ」

「優しゅうて、いい先生やったからな」

「ほんとやな」

「明日からどうするつもりや」

「あと二、三人会っておきたい友達がいるから訪ねてみるつもりや」

「そうか。日差しが強いから気をつけてな」

夕食をよばれたあと、団扇を使いながら裏庭を眺めていた。その傍にいつのまにか梅子が座っていた。

「あなた、堀川のご主人も奥さんもいい人ですね。それに子供たちもあんなに喜んでくれて、私も家族の一員になったみたい」

「そない言うてくれるとわしも気分が楽や」

「でもちよっと退屈だな。あなたは友達のところへ行けるけど、わたしは行くところがな

いから」

「じゃこうしようか。明日な、日が落ちると少し涼しうなるから近くの伯太神社に行こう。秋祭りには村内の各集落から山車が出て賑やかなんだ。岸和田ほどの豪勢なもんじゃないけどな。その神社と山車を収めてある建物を見ておくだけでも記念になるやろう」

梅子は嬉しそうに頷いた。

滞在中、藤野利三郎にも会いたかったが、リエとのわだかまりがあり決心がつかなかった。しかし集落の盆踊り大会を見たり、友達に会っているうちに一週間が過ぎ、東京に行かなければならない日が近づいてきた。

喜一郎は数日前に和泉府中駅に赴き東京行きの寝台急行券を入手していた。そのことは一芳に伝えてあり、出立日の前の晩には兄の家を訪れ知らせてある。

夕暮れの残照がまだわずかに残っている七時すぎ、堀川一芳夫婦となきべそをかいっている二人の子供たちに見送られ、喜一郎と梅子は家を出た。

そのあと喜一郎はためらいながら松下先生の玄関戸を叩いた。すぐに戸が開いた。

「まあ、誰かと思ったら」

「先生、先日は失礼しました。紹介が遅くなりましたが妻の梅子です。これから二人で東

京に向けて出立します。なにかとお世話になりました。お元気で長生きしてください」
喜一郎はそう言うのと、梅子と一緒に頭を下げた。

「これはご丁寧に。阪口さんも奥様もお気をつけてね」

松下先生は目頭を押さえながら、家の外に出て喜一郎と梅子の後ろ姿を見送った。

喜一郎は牛革の旅行鞆を右手に持ち、和泉府中駅の改札口を通った。丁度そのとき和歌山行きの列車が到着し、どっと乗客が降りてきた。喜一郎と梅子が雑踏を避けるようにして跨線橋に向かっているとき、

「おーい、阪口じゃあないか」

という聞き覚えのある声が飛んできた。

喜一郎が立ち止まると雑踏の中から抜け出した太縁の眼鏡を掛けた男が目の前に立った。

「やあ、高田じゃあないか」

喜一郎はびつくりしたような声を出した。

「帰っていたのか。これから何処へ行く」

「東京だ、新しい仕事が待っている」

「そうか。お前のことだから平凡な仕事じゃないんだろう」

「紹介しておく。昨年の秋に結婚した女房の梅子や」

喜一郎は側に立っている梅子に目をやった。

「高田春次と言います。よろしゅうにおねがいます」

「梅子でござます」

梅子は軽く会釈した。

「あまり時間がないんや。話はまたの機会や」

「残念やな、ゆっくり話ができんで」

「おなじ思いだ。しかしここで高田と会えるとは、まさに奇遇や」

「ほなら阪口、元気だな。梅子さんも」

「高田もな」

喜一郎は高田と握手を交わしたあと急かされるような足取りで跨線橋の階段を上がった。

高田春次はその場に立ち、二人の後ろ姿が見えなくなるまで見送っていた。

3

梅田駅には九時前に着いた。

下関駅を始発とする急行寝台列車は大阪駅を九時四十五分に発車する。梅子は構内の売店で二合瓶の酒とつまみを買った。

やがて蒸気機関車が重量感のある動輪の轟音を響かせながらホームに着いた。座席は指定だからあわててゐることはない。喜一郎は梅子に案内されるようにして列車に乗り込んだ。これから十一時間のほとんどを狭い三段ベッドで過ごさなければならぬ。予約したのが遅かったから下段はふさがっていて、今回も梅子は二段目、最上段が喜一郎だった。

喜一郎は寝間着に着替えてから、窮屈な姿勢で梅子から手渡された酒をちびちびと飲みながら、偶然に出会った高田春次のことを思い出していた。

彼は喜一郎と同じ伯太村の生まれだったが家は裕福で、尋常高等小学校を卒業してから、中学校から師範学校へと進学し、いまは大阪市で小学校の教諭をしている。高等小学校では

高田が級長で、喜一郎は副級長だった。しかし没落した中農だったから、いくら成績がよくても進学することはかなわず、地元の小規模の織布会社に就職した。だが会社の一日の労働は十二時間と長く賃金は安かった。仕事は織布機の修理という下働きだったから将来の展望などは持てず、結婚の約束をしている藤野リエと一緒にすることなど考えられなかった。しかし十七歳の時に受けた徴兵検査は甲種で、二十歳になれば兵役に就かなければならぬ。このまま劣悪な労働条件下で働くより、どのみち軍隊に入らなければならないのであれば、十八歳で入隊できる海兵団に志願しようと決心した。上官の横暴ぶりを子供の頃から見てきた陸軍よりも海軍のほうがスマートで自分に向いていると思ったのだ。もちろんそのことは藤野リエにも話をし同意を得ていた。

試験に合格し、呉海兵団の門を潜ったのは一九二〇年六月一日だった。

その翌日から軍艦に乗務するための猛訓練としごきが始まった。冬季のみ早朝六時、それ以外の季節は班長の号令で五時半に起床。ハンモックを取外しカラスという階級章の入っていない訓練服を着用し校庭に整列して海軍独特の体操をする。それが終わると駆け足で食堂に行き使い古したアルミの食器で粗末な朝食をとるのだがすべて時間で管理され、動作の鈍い者はビンタを張られる。その後は座学で新兵修身本を使用して徹底した皇国史観をたたき込まれ、甲板拭き、軍艦や兵器の名称、機関の動かし方と手入れの方法などを教え

られ、科目ごとにそのつど中間試験が実施される。教室外にあつては石炭の積載・砕炭、専用スコップを使つてのボイラーへの投げ入れ方、仮設を使つたマスト昇り下りの練習、専用海域でカッター櫓ぎを手の皮がむけ臀部がみみず腫れになるほどやらされ、冬季で飛沫を浴びると寒さのため皮膚感覚は麻痺した。それらの一連の行動の中で緩慢な態度を示したり、櫓を手放したりすると、就寝前に本人だけでなく同じ班に属する新兵は連帯責任として精神棒で臀部を殴打され、ハンモックで正常な姿勢で寝れないほどの激痛に襲われる。そんな社会の常識を逸した教育が休日の日曜日を除いて五カ月間おこなわれた。

喜一郎が十年で二等機関兵曹に進級できたのは、頭脳が明晰であつただけでなく身体能力に優れ、進級のための試験に合格しつづけたからだ。だが喜一郎は不条理な上官による暴力は許すことができず、己はこれまで一度も下級兵に向かつて手を出すことはなかった。だが軍隊は冷厳な階級社会であり、たたき上げの下士官はどんなに努力しても兵曹長が頂点であり、尉官になることはできない。

海兵団に入ることを決めたのは、海軍はスマートだからと思つたのが大きな要素になつていたが、それは入団後の生活ですぐに幻想であることを悟つた。新兵修身本には理由のない私的制裁は行なつてはならないと明記してある。だがそれは建前であつて、教育現場では無条件で命令に従う皇軍兵士を養成するため上層部はこれを黙認し、下級兵に対する暴力

行為は公然と行なわれていた。そんな私的制裁を横目で見ながら資本家どもは金儲けのため政治家や高級軍人に賄賂を贈り、侵略戦争に賛同している。

こうした欺瞞に矛盾に満ちた社会を変える方法はないのだろうか。そんな思いが社会科学研究会の発足に結実したのだった。反戦新聞「聳ゆるマスト」の発行はまだ初歩の段階に過ぎない。横須賀で活動するようになったら、同志たちの力を借りながらもっと立派な新聞を出さなければ。

喜一郎は飲み干した酒の空瓶を枕元の片隅に押しやり、横になった。

列車は予定通り八時二十五分に東京駅に到着した。手提袋だけの身軽な梅子は雑踏を縫うようにしてずんずん歩き、喜一郎は牛皮の旅行鞆を右手にして脇目もふらずに梅子の背中を見ながら歩いた。朝食を構内の地下街でとり、駅前から白金台方面ゆきの市電に乗った。党中央の組織部長である紺野与次郎から届いた地図を見ながら古びた本屋に辿り着いたのは十一時すぎだった。

喜一郎が店内にはいり名前を言うと、年寄った店主は鍵を渡しながら、家はすぐ横の路地を入った突き当たりの二階屋だと言った。

年代物の家だったが一軒家であることに満足した。施錠を外し中に入る。ガラス窓が閉じ

られ、暑気がこもっていたのでつぎつぎに開け放つ。一階は六畳間と台所だけ。二階は六畳一間という狭い家であったが掃除はゆきとどいていた。広島から送った布団袋と日用品の包みは六畳間に置いてあった。

「ちよつと狭い感じだなあ」

喜一郎がつぶやいた。

「あなた、東京じゃこんなものよ」

梅子が経験者らしい口振りで言う。

「そうか」

「これから私が磨きをかけたら見違えるように綺麗になるから」

梅子は自信ありげに言いながら、

「あなた、とりあえず普段着に着替えて包みを解きましょう。そうしないと昼御飯も炊けないし、横にもなれないでしょ」

喜一郎は梅子に促され、下着一枚になり日用品の包みを解いた。それを梅子がつぎつぎに台所に運ぶ。布団は奥行きの狭い押入に収めた。一段落するとどつと汗が噴き出してきた。濡れたタオルを硬く絞って体を拭くが汗はなかなか止まらない。

「でも都会は便利がいいわねえ。御飯をガスで炊けるんだから」

梅子は古新聞の皺をのぼし、その上に飯をよそおった碗と茶瓶を置いた。

「夕食はなんとかするから、昼はお茶漬けで我慢してね」

「しかし梅子がいると助かるなあ」

喜一郎がしみじみと言う。

「そう言ってくれると嬉しいわ」

「財布のほう、大丈夫か」

「しばらくはね」

梅子は微笑を浮かべて言った。

その夜は二人とも長旅の疲れが出て早々と横になった。

翌日から喜一郎は党中央の連絡を待ちながら、梅子と一緒に近くの古物商を訪れ、当面の生活必需品として小振りな座卓や鏡台などを買い求めた。

家主が本屋を営んでいることも便利で、新刊書はもちろん古本も扱っていた。ざっと棚を見回しただけだったが発禁本もかなりあるようだった。党中央も粋な場所を借りてくれけものだと感じた。これだと手元にある本を読み終えても時間を持て余すということはないだろう。

夏の残照が消えるころになると、毎日のように梅子と連れだって付近の地形を知るため歩き回った。

喜一郎が東京に出てきてから二週間ほど過ぎたある日の昼前、

「ねえあなた、私すこし退屈しているの。ちよつとでいいから上野に出てみない。たまには外食するのも悪くないでしょ」

と梅子が言った。

「そうだな、上野がどんどころかまだ見たことがないから付き合ってもいい」

「まあ、嬉しい。じゃすぐに支度するから待っててね」

梅子はすぐに鏡台に向かい化粧を始めた。

喜一郎は漫然としてその様子を見ていたが、梅子が真剣な表情で口紅を引いている、その姿に見惚れながら、

「梅子、以前から思っているんだが、女はどうして口紅を引くんだろう」と尋ねた。

梅子は一瞬、首を傾げるようにして考えていたが、

「女であることを証明するため、じゃないかしら」と答えた。

「ふーん、そうなんだ」

喜一郎は梅子の答えに納得したわけではなかったが、それ以上は詮索しなかった。

「そんなことより、あなたも支度してくれないと」

「男は簡単だ、下着の上に着慣れた和服を身につければいいんだから」

梅子は化粧が終わると一番気に入っている和服を身につけた。

梅子と一緒に市電に乗るのはこれで二度目だった。

市電から降りると梅子は松坂屋をめざした。七階建の店内に入り、エレベーターに乗ろうとした瞬間、喜一郎は「おっ！」と小さな声を上げた。上階から降りてきたエレベーターの扉が開くと同時に着流し姿の寺尾一幹が姿を現したのだ。

「寺尾さんじゃないですか」

一瞬、寺尾はぎくりとしたように立ち止まった。そして声をかけた相手が喜一郎だと分かると、

「おう、阪口さん、こちらにきていたのか」

と言うとすぐに二人を店内の隅に案内した。

「そうか、東京にきてから二週間になるんですか。いまこちらでも弾圧がきびしくて大変なんです。しかし奇遇だ。まさかこんなところで出会うとは」

「寺尾さんに出会うことができてほっとしています」

「しかしここはまずい。いま住んでるところは白金台ですか」

「そうです」

「分かりました、今日は急ぐ用事があります。近いうち必ず連絡します。アジトは私が交渉して借りたのでよく知っていますから」

寺尾はそう言う風のように雑踏の中に消えた。

数日して寺尾から手紙が届いた。

手紙に記してある日時と場所で重要な会議を開くので一人で来るようにとあり、アジトの略図が添えてあった。聞いたことのある町名だったが、喜一郎にはその場所が分からな
い。

「梅子、この地図だがな、御徒町というのはどのあたりなんだ」と略図を梅子に渡した。

「ああ、御徒町ね。こちらから行くと上野駅の少し手前になるわ」

「そうか」

「いつ其処へゆくのか」

「四日後だ」

「わたし、そのあたりはよく知ってるから近くまで案内してあげようか」

「そうしてくれると助かる」

当日の夕刻、およその見当が付くところまでくると梅子と別れた。

通りから外れた路地裏の奥にある一軒家の呼び鈴を鳴らした。すぐに寺尾一幹が出てきて格子戸を開け、喜一郎を招き入れた。喜一郎の穴蔵のような家とは段違いの庭木のある大きな家だった。部屋に入ると二人の男が床の間を背にして立派な座卓の前に座っていた。一人は二十台半ばの小柄だがいかにも秀才といった精悍さを漲らせている。右手の男は自己と同年代のように思える。

四人が席についたところで寺尾が喜一郎を二人に紹介した。

「紺野さん、この人が阪口喜一郎さんです」

喜一郎が頭をさげる。

「党中央の組織部長をしている紺野与次郎です」

名前は寺尾からよく聞かされていた。

「長谷川茂です。軍事部長をしています」

喜一郎は礼を返す。

寺尾はすぐに本題に入った。

「阪口さん、折角こちらにきてもらったのにすぐ連絡をすることができず申し訳なく思っています。というのもあなたと東京で会うことになっていた三好惣次さんがまだこちらに帰っていないからです。ですから偶然でしたが上野でお会いすることができてよかった。私はいま横須賀軍港で任務についているんですが、紺野さんと連絡をとり今夜の会議となつたわけです。阪口さんの任務については紺野さんからお話することになっていますので、異論があればおっしゃってください。それからこの家はある大学教授から提供していただいていますので絶対に口外しないでください」

「わかりました」

すぐに紺野が落ち着いた口調で話し始めた。

「満州国傀儡政権をでっち上げてから以降、政府や軍部は党の活動に対する厳しい弾圧態勢でもって壊滅させようとしています。とくに首都である東京と周辺の陸海軍基地では憲兵と特高警察が連絡を取り合って眼を光らせていますから片時も油断できません。しかしそんな状況にあっても党は活動しています。寺尾同志が話したように横須賀軍港でも水兵細胞が生まれています。ですから海軍の重要拠点である呉軍港で立派な活動をされた阪口さんのような人を迎えることを党中央としては非常に心強く思っています。阪口同志、あな

たにはこれまでの経験を生かしてもらうため中央軍事部の一員に加わっていただきたい、そう考えているんですが、ご承知いただけますか」

紺野が喜一郎を顔を見つめながら言った。

「はい、喜んで」

「官憲の厳しい監視網をくぐつての活動は大変だと思いますが、これからは長谷川、寺尾の両同志、それから長谷川さんの横に座っている宣伝部長の藻谷小一郎同志、彼は九月中旬に創刊号を出す〈兵士の友〉の編集責任者でもあるんですが、それぞれが連絡を取り合つて任務を遂行してくださるようお願いがしたい」

「わかりました」

「軍事部責任者は松村昇さんですが、彼は軍事に関する知識はありませんから残念ながらあまり任務に忠実とはいえません。ですから横須賀軍港の活動については四人で相談しながらやってください。それから呉軍港では阪口さんと一緒に活動した平原甚松という人がいたと聞いていますが」

「はい。平原は五月五日に逮捕されましたが、彼は口が固いですから、いまはもう釈放されてはいるはずですよ」

「じゃ平原さんもこちらにきてもらいましょう。その段取りは阪口さんにお任せしたいと

「思います、よろしいですか」

「わかりました。おそらく今頃は大崎上島の実家に帰っていると思います」

「では私はまだ仕事がありますのでこれで失礼します。阪口同志、体に気をつけて活動してください」

立ち上がった紺野は喜一郎に近づき右手を差し出した。瞬間、喜一郎も立ち上がり握手を交わした。

しばし緊張がほぐれ紫煙が部屋の中を漂う。

「でも寺尾さん、お元気な姿を見て安心しました。警察署を脱走するなんて誰にもできることじゃありませんからね」

喜一郎が寺尾の顔を見ながら言った。

「いやあ、必死でした。留置場や演武場が逮捕者で満杯だったのが幸いしました。私は取調室に一人で監禁されていたんですが、数日前から肺病患者をよそおって盛んに咳をした。すると警官たちは次第に近くから離れていきましてね、深夜に監視役の警官が廊下で居眠りしている隙をつき未明に呉署を脱出することに成功したわけです。灰ヶ峰を抜け、熊野から矢野を通り、広島市内のさる高名な人に数日かくまってもらい、その人が中古の学生服と靴、それに学生証や旅費まで工面してくれました。しかし山陽線に乗るとやられると思いま

してね、閑散な駅から山陰線と中央線を乗り継いで十日ほどかかりました。東京に着いたときはへとへとでしたが党と連絡を取らないといけない。しかし私は近畿圏はわりと詳しいけど、東京は初めてでしよう。でも神様のお陰というのか、神田の町を歩いているとき友人、目の前に座っている藻谷小一郎さんのことですが、ばったり出会うことができた。ほんとうに幸運でした」

「そうでしたか」

「私は運のいい男だと思います」

寺尾がしみじみとした声で言った

「さあ、寺尾さん、あまり時間がありません。当面の活動方針を決めておきましょう」

長谷川が議事の進行をうながした。

「横須賀軍港の三人の同志には最近会ったばかりだから、阪口さんが当面やるべことは市内の軍事部関係のアジトと、横須賀軍港周辺の地理を覚えてもらうことになる。私も最初は地理がよくわからずに泣かされたものです」

そう言いながら寺尾はポケットから二枚の地図を取りだし、喜一郎の前に置いた。

「阪口さんとの連絡は寺尾さん、あなたがやってくれますか」

「承知しました」

「じゃあ、今夜の会議はこれで終わりです。

「阪口さん、これは当面の活動資金です」

長谷川は茶封筒を喜一郎の前に置いた。

「このあと、呉なら一杯やれるんですがね。ここではすぐに足がつく」

冗談半分に寺尾が言った。

その翌日から喜一郎は市電に乗ったり歩いたりして地図に印がしてあるアジトの確認を開始した。東京は広く、人もクルマも多くて目眩を覚えるほどで、時折立ち止まりタオルで汗を拭った。それでも十日もするとおよその地理を頭に刻み込んだ。

明日から横須賀へ行ってみよう、そう思っていた前日に寺尾からの手紙が届いた。

良心派と目されていた大学教授たちが一斉に逮捕されるという言論弾圧事件があった翌日、党中央と連絡をとるため上京した三好惣次はあちこちのアジトを回ったのち、富坂町のある教授の家を訪れた際、張り込んでいた富坂署の私服三人に逮捕された。そしてこれから共に活動することになっていた水兵細胞に属する三名の兵士も治安維持法違反容疑で逮捕され、横須賀はいま官憲の厳重な警戒網が敷かれているので市内への潜入はしばらく控えてもらいたいと書かれていた。

経験豊かなオルグや現役水兵が逮捕されるのは党にとって大きな損失であり、官憲の魔手が身近に迫っていることを意味しているように思えた。

喜一郎は横須賀ゆきをあきらめ、寺尾にもらった東京市街図を梅子に渡しながら、

「東京の街を知るため少し歩いてみたらいい」

と言った。

その日から梅子はいそいそと出掛けるようになった。喜一郎は留守番役で、本を読みながら次の連絡を待った。

九月中旬に入って寺尾から、一週間後に御徒町のアジトで軍事部の会議を開くので出席するようにという連絡があった。

日が落ちかける頃、梅子と入れ替わるようにして喜一郎は自宅を出た。

アジトに着いてみると寺尾の姿は見えず、長谷川茂と藻谷小一郎、初顔の森田二郎の三人が座っていた。

会議が始まる前、喜一郎はなぜ寺尾さんが出席していないのかと長谷川に訊いた。

「寺尾同志は今月の十三日、上野でレポ中に逮捕されました」

長谷川茂が悲痛な顔をして喜一郎に伝えた。

——寺尾さんが逮捕された。

喜一郎はその情報に愕然とすると同時に、婚約者である林寿恵子の若々しい笑顔を思い出し、彼女が悲嘆にくれるさまを想像せずにはいられなかった。

「横須賀の組織も八月末に全部やられてしまいました。水兵の同志たち、少し油断しすぎたようです。逮捕の発端は戦艦山城で発生した時計の盗難事件からです。それで艦内で一斉に私物検査が実施され、河田毅三等兵が担当する砲台の私物箱から三二年テーゼのパンフレットが出てきた。それを期に横須賀鎮守府では全艦船や海兵团などで全員の上陸禁止措置をとり、一斉に私物検査が行なわれました。巡洋艦榛名乗組の西氏恒次郎三等機関兵、戦艦長門乗組の吉原義次三等兵も反戦日記や違法な資料を所持していたということで逮捕され、彼らの影響下にあった同年兵数名が法務官の取調べを受けているようです。そのご逮捕された三名の同志は横須賀市内にある大津海軍刑務所に投獄されました。ようやく水兵細胞ができた直後のことで党にとっては大きな打撃です」

湿った声で長谷川は報告した。

——なんと不用心な。

喜一郎は心中でつぶやいた。艦内の私物検査は日時を選ばず抜き打ち的に実施され、検閲済の手紙であつても没収されることがある。そんな危険な場所に党の文献や日記を私物箱や袋に入れておくのは軍隊内の掟を知らないからだ。しかし軍隊経験の浅い三等兵であつ

てみれば、彼らの責任というより軍事部の指導方針に問題があるように思える。いずれにせよもう少し早く彼らと接触することができていたら逮捕に繋がるような危険な行為を止めさせることができたかも知れないと喜一郎は思った。

「それで今日の議題の一つは、寺尾同志の後任についてですが、阪口さんをお願いしたい。これについては紺野組織部長の承諾を得ています。どうでしょう」

長谷川が喜一郎の顔を見た。

「私でよければ」

「決まりました。つぎに軍事部についてですが、今回のような初歩的な弾圧を防ぐため要員をふやしたいと思っています。私としては前の会議で名前が出ました平原甚松さんできるだけ早くこちらにきてもらい任務について貰いたいと思っていますのですが。阪口さんの意見は」

「賛成です。彼はベテランですからきつと役に立つと思います」

喜一郎がきつぱりとした口調で答えた。

「つぎに逮捕された三好惣次中国地方オルグの後任に、いま東京で活動している錦織彦七、滝川恵一の両同志を派遣することになりました。それで広島地方軍事部の責任者に内定している木村莊重同志ですが、いまは島根県の本部村に帰っていると聞いています。阪口さ

ん、あなたに木村同志を迎えに行ってもらいたいのですが」

長谷川がそう言って喜一郎の顔を見た。

断る理由はなかった。

「錦織、滝川両同志は阪口さんが出立してから三日後に広島に着くよう手配したいと思っています。木部村に行っていたくのは阪口さんだけです、よろしいですね」

「わかりました」

出立は切符の購入などの準備がありますので、今月下旬を予定しています。阪口さんには出立の日時が決まりましたら別途連絡しますので、ぬかりのないようお願いしたい」

「ちよつとよろしいですか」

喜一郎が手を挙げた。

「どうぞ」

「広島での新任オルグとの連絡方法はどんなっているんですか」

「それについてはまだ決まっています」

長谷川が困惑した表情をして言った。

「木村莊重同志は妹さんの右田美子さんを広島に呼び寄せ下宿生活をしています。彼女は呉の海軍病院で看護婦として働いていたのですが、いまは広島バスの車掌をさせています。」

木村莊重さんも中央からの連絡を待っているはずですから、広島に出たときはその下宿を連絡場所にしたらいいと思うのですが」

「そうなんですか。初めて聞く話です。では錦織同志と滝川同志にはそのように伝えておきます。それでいいですね、阪口さん」

「結構です」

「最後になりますが、横須賀軍港付近はまだ厳しい警戒態勢が敷かれています。軍事部としてはほとぼりが冷めるまでしばらく様子を見ることにしています。ですから許可なしに近づかないようにしていただきたい」

梅子に行き先を知らせ、家を出たのは九月下旬に近いある日の夕刻だった。

喜一郎は東京駅に出て、午後九時四十五分発下関行の急行寝台に乗り込んだ。発車時間になると機関車はホームの屋根を切り裂くような汽笛を鳴らしたあと列車を牽引してゆっくりとホームを離れ、西に向かって走りはじめた。大阪が午前九時四〇分、広島は午後五時一〇分、山口線の乗換駅である小郡に着いたのは午後八時二一分だった。

その夜、喜一郎は駅周辺の安宿に泊まった。

翌朝、山口線に乗り、津和野駅で降りた。

津和野駅からは徒歩で木部村に向かう。見渡す周辺の田圃は六月に来たときとくらべ一変し、黄金色に輝いていた。豊かに実った稲穂は頭を垂れ独特の芳香を放っている。喜一郎はひさしぶりに東京の雑踏から解放された思いで、ときおり稲穂を揺らしながら渡つてくる秋の風を胸一杯に吸い込みながら歩いた。

木村莊重の家についたのは午後二時過ぎだった。玄関も障子も明け放たれた家には誰もいない。喜一郎は縁側に上がり肘枕をして庭先を眺めていたが、いつのまにか旅の疲れが出てそこに寝込んでしまった。

「やあ、来ていたのか」

庭先からの大きな声で目が覚めた。

日焼けした髭面が上から見下ろしている。

「久しぶりだ。どうやらうたた寝をしてしまったらしい。変わりないか」

「このとおりで。元気だけ取り柄だから。少し待ってくれ、すぐに風呂を沸かすけん」
喜一郎は莊重の両親に挨拶し、あらためて玄関から座敷に上がった。

莊重につづいて風呂に入り、汗を拭いながら母屋に入ったときには酒肴の準備ができていた。

「さあ、飲んでくれ。東京からここまでくるには二日仕事じゃけんの」

莊重はそう言いながら銚子を差し出した。

「この間は呉からだったから長いとは思わなかったが、東京からだ腰が痛くなるほど時間がかかる」

喜一郎は猪口に注がれた酒をひと息に飲み干した。

「いよいよ時機到来か」

莊重が訊く。

「そうだ。迎えにきた。と言っても支度があるから二、三日待ってもいいが」

「支度といっても、多少の物は広島に置いてきておるから特にない。しかし局面は厳しいようだから親戚や友人たちには挨拶しとかんといけんだろうな」

莊重はつぶやくように言った。

「そうだな。横須賀の組織は八月末に潰されてしまった。帰ってから再建にとりかかる」

「阪口さんも大変じやのう」

「お互い様だ。弾圧が迫ってきているからといって引くわけにはいかん」

「危ないが、それだけにやり甲斐があるというもんじゃ」

莊重はそう言ってから豪快に笑った。

「この〈兵士に与ふ〉というパンフレットは薄いものだが、党中央が作成した軍事部の綱

領ともいえるもので、天皇制軍隊の本質や軍隊内の階級的矛盾、恐慌や侵略戦争との関係、兵士委員会をどうすれば組織できるかなどが書かれている。これからの運動に参考にしてもらいたい。もう一枚、この〈兵士の友〉という新聞は今月の十五日に創刊されたものだ。ほら、この一面の最下段には軍港新聞発行という見出しで〈聳ゆるマスト〉のことが載っている」

喜一郎はそう言いながら一面刷りの「兵士の友」を莊重の前に押しやった。

莊重は「兵士の友」を両手で持ち喜一郎の指差した記事に目を通した。

「呉軍事部の新聞が全国版で紹介されるとはな。これはやり甲斐がある。それに発刊の辞が兵士の言葉で書かれふりがなが振ってあるのがいい」

莊重は紙面から目を離さずに言った。

「どうだ、内容の充実した新聞だろう」

「わしらもこれに負けんような新聞を出さんといけんですのう」

莊重は新聞を二つ折りにしながら己に言いきかせるように呟いた。

「その通りだ。山下達吉、稲垣宏、小倉正弘同志は健在で〈聳ゆるマスト〉の発行を心待ちにしている。五号以降は広島で印刷して呉に持ち込むことになるが、編集責任者は莊重さんだ。広島に出てからは新たな配布ルート確立やガリ切り、印刷などはゼロからの出発と

なるが、東京で逮捕された三好惣次さんの後任オルグには錦織彦一と滝川恵吉の二人が派遣され、錦織さんが広島地方の軍事部を指導することになっている。今頃は東京を出立する準備をしているはずだ」

「そうか、オルグが二人も来てくれるとは勇氣百倍だ。みんなに読まれる新聞をばんばん出して、軍の上層部に一泡吹かせてやるか」

莊重はそう言つて勢いよく酒を飲み干した。

喜一郎と莊重が木部村を後にしたのは三日後の朝だった。

広島市内の下宿に着いたのは午後三時を過ぎていた。妹の美子は勤務なのか不在だった。錦織彦七と滝川恵吉が訪ねてきたのは翌日の夕暮れ時だった。

すぐに喜一郎と莊重の四人で組織問題についての協議が始まった。

瘦身の錦織が最初に口をひらいた。

「阪口さんから聞かれたと思いますが、横須賀はもちろんのこと、呉も官憲の警戒網はかなりきびしくなっており、呉市内で新聞を発行するのは危険です。ですから新聞は広島市内で完成させ、秘密ルートで呉に持ち込みたい、そう考えています。その関係で呉地方軍事部を広島地方軍事部と改称し、責任者は木村莊重さんにやっていたたく。もちろん私たち二人も全面的に協力します。それでよろしいですか」

「広島から呉への配布ルートは決まっているのでしょうか」
莊重が訊く。

「横須賀と違い、呉では阪口さんと平原さんの二人が居なくなっただけで党組織はそのまま生きています。ですから新聞の受け渡し場所さえ確保すれば問題ないと思います。とはいってもそのことを同志たちに徹底しなければなりません。幸い私はまだ顔を知られていないので呉に入って援助したいと思っています」

錦織がよどみなく言った。

「ガリ切りと印刷は誰が担当するんですか」

「滝川オルグが全協や文化関係の人に協力者を探してくれるよう依頼することになっています」

「じゃ、わしは新聞の編集に集中すればいいんですね」

「基本的にはそうなります」

「わかりました」

「それから木村さんをお願いしておきたいのですが、官憲の探索をかわすため下宿は絶対に固定しないようにしてください。そして移動したときはアドレスを必ず私に連絡してくださいさるようお願いしておきたい」

「了解です」

莊重はきつぱりした口調で答えた。

「阪口さん、ほかになにかありますか」

「わたしが呉を離れて三カ月ほど経ちます。ですから新聞の配布に協力してくれた同志や社研の連中が同じ下宿に住んでいるかどうかまったく不明です。配布の中心的人物で投稿をしてくれた山下達吉が健在であれば一定の役割を果たしてくれるのではないかと思っていますが」

「その山下さんの下宿先は？」

「蔵本通三丁目にある呉署の斜め角を少し奥に入った岩方二丁目です」

「家主の名前、覚えていますか」

「いや、忘れしましたね」

「じゃほかの同志に当たってみます。とにかく配布ルートをきちつとしないと新聞の発行はできませんから」

錦織の発言で会議はおわった。

その夜、遅番だったのか右田美子は疲れた顔をして喜一郎に挨拶をすると台所で化粧を落とし、隣室に消えた。

喜一郎は翌朝には東京に帰ることになっていた。今度はいつ莊重と会えるか分からない。二人は六畳間で枕を並べて横になり、小さな声でこれまでの軍隊生活のありようや、今後の党活動について遅くまで話をした。

翌日から広島地方軍事部の活動が始まった。

莊重は呉では官憲に顔が知られていたから、着流しにカンカン帽子をかぶり薄い色眼鏡を掛けて変装し、呉線の川原石駅で下車した。そして川原石港から蒲刈を経由して大崎上島に向かう連絡船に乗った。船の速度は遅く大崎上島港に着いたのは夕暮れ時だった。

とも綱を木製のピッチに巻きつけている係員に訊き、東に向かって歩いた。平原の実家がある中野地区には本家の大平原を筆頭にして同姓の家があふれていた。やがて豪勢ではないが、それでも庭木のある家に辿り着いた。

玄関戸は開け放つてある。声を掛けると日に焼けた甚松によく似た年配の女性が出てきた。

「広島からきた木村莊重といっています。平原甚松さんに会いたいのですが」
莊重が言った。

声が聞こえたのか甚松が姿を現した。

「やあ、木村さん。久しぶりですよ」

顔を見るなり甚松が言った。

「いつ帰ったんですか」

「七月に入ってからです。ともあれ玄関口では込み入った話もできませんので外に出ましよう」

どうやら母親に遠慮があるようだった。

甚松は皺がよった着流しの裾を気にする様子もなく莊重を海岸沿いの木材置き場に誘った。ふたりは丸太に腰掛けた。彼方に本土の対岸が見える。目の前の海峡には小型の漁船がポンポンと軽快な焼き玉エンジン音を響かせ、煙突から輪のような煙を吐き出しながら往來している。左方からは目に染みるような朱色の光芒を放ちながら夕日が稜線に沈みかけていた。

「わしが住んどる山間の木部村とはひと味ちがう美しい瀬戸内の光景ですよ」

目を細め、つぶやくように莊重が言った。

「眺めはいいんですが、姻戚関係とか人間関係が濃密すぎて、わしのような人間には向かんです」

反戦の闘志を秘めた甚松だからこそその述懐のように思えた。

「平原さんは五月五日に捕まったと聞いとりますが、その後はどうだったんですか」

「呉署の留置場ではかなりひどい拷問を受けましたが完全黙秘をつらぬきました。家探しをしても証拠は何もないわけですから、彼らも釈放せざるを得ない。いまは静養中といったところです。それで、今日はどんな用件で」

「阪口さんが木部村までやってきましての、一緒に広島に出てきたのは四、五日前です。三好惣次さんは八月に東京で逮捕されたということで、後任としてやってきた中央オルグの錦織彦七さんと滝川恵吉さん、それに阪口さんとわしの四人で話をしたんですが、わしが呉軍事部から広島地方軍事部と名前を変えた組織の責任者になりました。阪口さんは中央の軍事部の任務に就いて横須賀の水兵細胞の指導を担当しているそうですが、経験のある指導部員がおらんので、組織部長の紺野与次郎さんに平原さんを推薦した。それでできるだけ早く上京してもらいたいということになった。わしはその伝達係としてこちらにやってきたというわけです」

「東京ですか。一度は行ってみたいと思っておりましたが、かなり危険な任務になりそうですな」

甚松は右手で顎を撫でるようにしながら言った。

「わしもこれから呉に帰って水兵細胞の連中と連絡をとり〈聳ゆるマスト〉を再刊しなければならんです。ことが順調に運ばいいんですがの」

「しかし状況がどうであれ、われわれの仕事は権力の弾圧を怖れていたんでは何もできません。この島でしょぼく生きて生きるより東京で活動する、そのほうが男としての生き甲斐がある。オルグの錦織さんに伝えておいてください。支度が整いしだい上京すると」

甚松はすつくと立ち上がり、暮れなずむ東方の海を見ながら莊重に言った。

その夜、莊重は甚松の家に上がり込み、母親が作ってくれた瀬戸内の新鮮で豊富な魚料理を肴に酒を酌み交わし、夜遅くまで歓談した。

最初に連絡がとれたのは小倉正弘二等兵だった。彼は父親から海軍に志願する条件として毎月五円の仕送りを受ける約束を得ていたので、下宿は和庄の民家と繁華街に近い元町のビリヤードの二階の二カ所にあった。だが彼は水雷施設艦白鷹乗組の二等兵だから五日に一回程度しか上陸できない。莊重は下宿先の家主に前回の下船日を聞き出し、六月に田中豊が逮捕されてからは弟が切り盛りしている田中書店前にある山下旅館で宿泊しながら下船日を待った。その間、山下達吉の下宿を訪ねたが、八月下旬に憲兵隊がやってきて逮捕されていたのを知った。家主の女将は山下の人柄について、

「おとなしい人で、うちに居るときはたいてい本を読んでいた。たまに蓄音機を回したりして、警察に捕まるような悪い人ではありませんでしたよ」

と語った。

和庄の下宿で小倉と会ったのは山下旅館に泊まりはじめた数日後だった。海兵团では異色の存在だった莊重だったが、二十歳を少し過ぎた小倉と会話を交わしたのは初めてのこ
だ。

小倉は五日ぶりの上陸で和服を着てくつろいでいたようだったが、莊重の話を聞いているうちに次第に姿勢を正していた。

「そういうことで、近々〈聳ゆるマスト〉を再刊することになっています。小倉さんには読者への配布と投書集めの責任者の役を担当してもらいたいんですがの」
莊重は若さが漲っている小倉の顔を見ながら言った。

「私は三号からの読者です。私でよければ協力させてもらいます。投書については最近おこなわれた日向灘での小演習で嫌な事件が艦内でありましたので、それをまとめて送りたいと思います」

「そうですか、訪ねてきた甲斐がありました。よろしく願います。それからオルグの錦織さんがぜひ小倉さんと会いたいと言っています。次の下船日にどうでしょうか」

「いいですよ、しばらく演習はないはずですから」

「じゃ五日後の午後六時、中通八丁目の喫茶店ユキということでどうでしょうか。もちろん私も同行します」

「わかりました。海軍時間を厳守します」

そう言うのと小倉は屈託のない笑みを浮かべた。

当日、莊重と錦織は別行動で呉入りし、六時前に喫茶店ユキの扉を開けた。目立たない隅の方で小倉は待っていた。

錦織と莊重は小倉の隣りの椅子に座り、店員にコーヒーを二つ注文したあと、

「私がオルグの錦織彦七です」

と自己紹介した。

「施設艦朝日に乗っている小倉正弘です」

小倉は軽く頭を下げたあと、瘦身の錦織の顔を見た。

「長時間の話はできませんので簡単に言います。小倉さんは日本共産党に入党する意志はありますか」

「以前からその気持を持っていました」

「嬉しい言葉です。これからは同志として話をします。木村さんから聞かれたと思います
が、党はいま〈聳ゆるマスト〉再刊の準備を進めています。しかしご存じのように官憲の監
視の眼がきびしくて呉で発行することは不可能です。ですから五号からは広島で作成した
ものを呉に持込み、配布したいと思っています。その受取と配布を小倉さんに担当してもら
いたいのです。きわめて危険な任務ですが、外で動けるのはあなたしかいない。引きうけて
もらえないでしょうか」

小倉はしばらく考えていたが、

「新聞の受け渡しの方法は考えているんですか」
と訊いた。

「手は打ってあります。じつはこの八月からこの通りから少し上にある摩天楼というカフ
エに佐藤静江という人を女給として潜らせています。その人が役割を果たすことになって
いる。年は二十二歳ですが、背が高くてすらりとした美人、しかも意思の強い人ですから任
務遂行のためにはうってつけの人です」

そんな若い女性が危険な党活動に加わっているのであれば男として負けてはいられない
と小倉は思った。

「わかりました。やらせてもらいます」

「新聞を持ち込む同志はまだ決まっていますが、名前は防衛のため聞かなくていい。それから何かあったときのため木村莊重さんの住所をお知らせしておきます。ただし防衛のため移転することがあります。その時はこちらから連絡しますので承知しててください」

錦織は懷から紙片を取り出し小倉に渡した。

「小倉さん、よろしゅう頼みます」

そう言いながら莊重は右手を差し出した。

つづいて錦織が小倉に握手を求めた。

三人は時間をずらせて喫茶店を出た。錦織は呉駅に向かい、莊重は野村旅館に帰った。稲垣宏一等看護兵曹と宮内謙吉三等看護兵と会っておく必要があったからだ。稲垣宏は海軍病院の第七病棟長であったころ山本俊次という文学好きの三等看護兵が同じ病棟に派遣されてきて、彼との交流が深まる中で河上肇の『貧乏物語』などの左翼文献を読むようになった。稲垣は「聳ゆるマスト」二号が発行された直後に海軍徴募兵の身体検査の助手として岡山に出張した。その留守中に届いた本が左翼文献であったことから、帰任後に司法官の取調べを受け、左翼思想を理由に海軍病院第七病棟長の任務を解かれ海兵団付けとなったという経歴の持主で、同志だった。文学愛好家の宮内謙吉は「聳ゆるマスト」一号からの読者で

三十一歳、莊重の妹右田美子と同棲していたことがある。

その翌日の夕刻、莊重は二十八歳になる稲垣の下宿を久しぶりに訪れ、来意を伝えた。

「右田美子さんはお元気ですか」

稲垣が柔らかな声で聞いた。

「海軍病院に在職中は稲垣さんにはよくしてもらい感謝しています。美子はいま広島市内のバス会社の車掌として元気に働いています」

「そうですか。それはよかった。しかしバスの車掌ではもったいないですね」

「わしの活動を助けるためで、わしにとつては有りがたい存在です」

「女性でもそういう生き方ができるんですね。尊敬します。〈聳ゆるマスト〉が再刊されるのもそういう献身的な人がいるからなんですよ。新聞の再刊は大歓迎です。いま軍隊内では要求や不満が鬱積していますから、水兵たちから歓迎されると思います。彼ら、つまり海兵团で満期の三年を迎える兵士たちですが、上官たちは満州事変や上海事変が起きて以降、日本はこれから中国大陆に大々的に侵攻して勝利しなければならぬ事態に直面しているのに満期がきたから退団するとはなにごとか、貴様らには愛国心はないのか、などと言って簡単に退団を許可してくれないわけです。生活を維持することができない俸給で酷使しておいてですよ」

「そうなんですか。様変わりですのう」

「ですから満期を迎える兵士たちの中では、強制延期反対、満期者に定職を与えよという要求が渦巻いているわけです。再刊する新聞にはそういう兵士たちの声を載せると大きな反響を呼ぶと思います。もちろん私も投書するつもりですが」

稲垣は降格人事で落ち込んでいる様子はまったくなく、冷静に隊内の動きを観察しているようだった。

「稲垣さんに会えてよかったと思っております。わしとしては投書はもちろん大歓迎ですが、海兵団内の配布と読者拡大に協力してもらえば有りがたいんですがの」

「喜んで協力します」

「それから海軍病院には私の妹と交際していた宮内謙吉三等看護兵がいるはずですが、連絡がとれますか」

「それはどうでしょうか。ご承知だと思いますが、彼は文学愛好家で同志の一人ですが、ニヒリスト的な性格を合わせ持っています。新聞は第一号から読んでくれますが、同志だといつても細心の注意を払う必要があります。私は同じ病院内にあつても彼と話をしたことはありません」

「わかりました。他の同志に接触してもらうことにします。それから文学といえは同志の

佐藤疆一等兵も文学愛好家グループの一員じゃなかったんですか」

「そうです。彼はプロ文をよく読んでいました。頭のいい闘争意識のはっきりした男です。そのプロ文の関係でカフェ百万ドルの女給をしている正富真佐子さんと相愛関係になったんですが、私が海兵団付けになってからグループは自然消滅しました。ですからその後どうしているかわかりません」

「連絡はつくでしようか」

「下宿先は変わっていないと思いますのでつくと思います」

「じゃ早急に佐藤さんと連絡を取り、彼にも協力を依頼し、その結果を知らせてもらいたいんですが」

「承知しました」

「それで配布ルートについてですが、責任者として特務艦朝日に乗っている小倉正弘さんに引きうけてもらうことにしました。稲垣さんの配布部数はとりあえずわしの方に知らせてもらうことにして、受取り場所はこの下宿でいいでしようか」

「それでいいです」

「これが妹と一緒に住んでいる下宿の住所です」

と言いながら莊重は紙片を稲垣の前に置いた。

「稲垣さんへの手紙の差出人の名前は妹の名前を使います。ただし下宿は特高警察の動き次第では移転することがあります。そのときは別途連絡したいと思っています。なにせ四月段階と比べて彼らの監視態勢は格段にきびしくなっていますから気を遣わなければなりません。稲垣さんも身辺に気をつけて、何かありましたらすぐに連絡してください」

「わかりました」

「じゃあ、わしはこれで安心して広島に帰ることができます。新聞は中旬までに第五号として発行したいと思っています。楽しみにしておいてください」

莊重は握手を交わしたあと稲垣の下宿をあとにした。

莊重が呉に滞在して活動中、オルグの滝川恵吉は広島市内で新聞発行に協力してくれる人物を全協や文化関係に所属する同志に打診していた。

最初に黒崎保の名前があがった。黒崎保は一九一四年生まれの十八歳。広島市内の松本繁太郎法律事務所で書生をしながら修道中学校夜間部の三年生として通学していた。彼の兄道人は共産青年同盟の広島地区オルグとして活躍していたが、三十二年三月十日に市内で逮捕され、起訴されてからは広島刑務所に勾留されている。黒崎保は松井弁護士には内緒で刑務所に行き差入れをしていたが、熱心に救援活動をしてしていた伊藤正朔と話をするよ

うになり、山本宣治の下で活動した経験を持つ石川茂一を紹介され、それが縁となり入党。地元作家の三戸信人、柴野利秋の推薦で作家同盟に加入し、広島文化連盟の一員として文学新聞を購読するなど文学の勉強を始めていた。そのご彼は松井法律事務所を辞め、九月から呉海軍工廠で働くつもりで職業紹介所を通して履歴書を出したが、兄の活動歴を理由に不採用となり、広島市内で新聞配達をしながら下宿生活をしていた。

その彼に声をかけたのは文化連盟責任者の石川茂一だった。黒崎保は十月初旬のある日、党オルグの滝川恵吉と会い、広島地方軍事部への協力を要請され、了承した。

その数日後、指定された喫茶店に入ると、滝川恵吉の隣りに和服を着た二十代半ばと思われる男が座っていた。滝川がコーヒーを注文したあと、男は広島地方軍事部責任者の木村莊重だと名乗った。言葉は山陰訛りだった。滝川は活版刷りの「赤旗」と「兵士の友」をちらっと広げたあと、これと似た新聞を今年の二月から四月にかけて呉軍港で出していたのだが、弾圧によって中断している。この十月から再刊するための準備を進めているのだが、協力してくれないだろうか、と言った。

黒崎はその新聞は兄の道人から聞いたことのある、呉工廠党細胞が発行した「唸るクレイン」より少し遅れて発行された「聳ゆるマスト」ではないかと推察した。黒崎はやりがいのある任務だと思い即座に引きうけた。

「見込んだ甲斐がありました」

莊重が感激したような声で言った。

「これはきわめて危険な任務です。ですからいま君が関わっている文化サークルなどの仕事から一切手を引いてもらいたい」

と滝川が言った。

黒崎に異論はなかった。

その後、黒崎は木村莊重と街頭連絡をした際、年が明けたら陸軍に入隊するという体格のよい古田稔を紹介された。早稲田大学在学中に失業反対国際デーの街頭デモ行進に参加したことを理由に退学処分となったため、七月に広島市の生家に帰り、いまは党広島地方委員会に所属し地下印刷の任務についているのだという。古田は、今度は「聳ゆるマスト」の印刷に専念することになったのでよろしく、と言って黒崎に右手を差し出した。そのあと木村莊重から下宿を印刷所に使わせてほしいと頼まれた。黒崎保の下宿は縮景園の近くで、家主の洋服屋の横の細い路地を入ったところに独立した木造二階建の離れがあり、一階は物置、二階は六畳一間で地下印刷所としては絶好の立地条件を買われたのだった。

謄写印刷機は石川茂一が知人の大工に台座と木枠を作ってもらい、二回に分けて運び込んだ。蝶番は黒崎が付けた。インク缶、ローラー、ザラ紙、鉄筆とヤスリ版などは古田がマ

ントの下に隠して数回に分けて持ち込んだ。木製の木枠には絹のスクリーンは付いておらず、原紙に直接インクローラーを当て印刷することになっていた。

「聳ゆるマスト」の〈再刊の辞〉は莊重が書き、錦織が援助することになっていた。

莊重は海兵団を満期になるまで日記を書き続けてきたので、文章を書くことは苦にならない。とはいえ日記文は私的な文章であり、新聞記事とはことなるものであったから、直近の「赤旗」や「兵士の友」を参考にしなければならぬ。

昼食をすませ、しばらくして莊重は座卓に置いた原稿用紙を前に姿勢を正し、万年筆を手にした。

——本紙は天皇制権力の手先である憲兵隊と特高警察による弾圧で一時中断に追い込まれたが、日本共産党軍事部水兵委員会は不屈の精神であらゆる困難を克服し、再び兵士諸君に本紙を届ける新たな態勢を確立した。まず最初にそのことを報告し、兵士諸君と共に喜びを分かち合いたいと思う。

今春に一号から四号まで発行した本紙が指摘したように、昨年九月十八日に起きた満州事変、さらには今年の一月二十八日に発生した上海事件は傀儡満州国の成立を列強の目から逸らす関東軍の組織的かつ計画的な謀略事件であったことが明らかになった。政府と陸海軍上層部は傀儡満州国成立後も内乱状態にある中国への侵略戦争を拡大し、一九二七年

に關東軍によつて爆殺された張作霖の息子である張学良が支配する東北部の都市錦州へ飛行機による爆撃を行ない、華北に向かつて進撃を開始した。日本軍は中国領土を蹂躪するだけでなく、農民の食料を略奪し、家屋を焼き払い、多くの人民を虐殺している。

これらの残虐な行為は国際連盟総会において非難され、満州国成立に一国の賛同も得られなかったことにみられるように、日本はますます国際社会から孤立する道を辿っている。

また日本の侵略行為と戦おうとせず、国際連盟の決議に依存するだけの蒋介石が率いる南京政府の方針は青年や学生を憤激させ、祖国を侵略者から守るための義勇軍が自然發生的に組織され、満州国周辺はいうにおよばず、中国全土に抗日闘争が燃え広がっている。

このため第一線で戦っている日本軍兵士の死傷者が続出し厭戦気分が高まっているが、政府は軍部に屈服して侵略戦争の本質を意図的に隠蔽し、資本家や全国で組織されている在郷軍人会などにより陸軍が作成したパンフレットなどを国民に配り排外熱を煽っている。中国の侵略戦争に動員されている前線兵士の八割は農村出身である。戦線が拡大されれば必然的に死傷者は激増し、増援要員が必要となる。このためこれまでは農家の戸主は農産物増産のため満期後の徴兵を猶予されてきたが、それもいまは有名無実なものとなりつつある。

海軍も上海を根拠地として陸軍と歩調を合わせるようにして艦隊を北上させている。兵

役満期者に対する延期工作はそれに起因している。

兵士諸君。中国への侵略戦争の拡大は軍上層部と、前線で戦う兵士、兵役満期を迎える兵士の矛盾をより深刻なものにするだろう。

日本共産党は今年の七月、パンフレットにして発行した「三十二年テーゼ」で、民主主義革命の主要任務として、①天皇制の打倒、②寄生的土地所有の廃止、③七時間労働制の実現、を明記し、当面の中心スローガンとして「帝国主義戦争と警察的天皇制反対、米と土地と自由のため、労働者と農民のための人民革命」を掲げている。

そして具体的方針として、国防献金の強制的徴収反対、出征兵士の家族の補償、出征による地主の土地取上げ反対などを提起し、その実現のため先頭に立つてたたかっている。

呉鎮守府内における兵士諸君の要求は本紙にこれまで掲載してきたが、いまの時点でもっとも重要なことは、兵役満期を無条件で認めること、満期を迎える兵士に職を確保すること、上官の下級兵士に対する私的制裁を止めさせることを海軍当局に要求することである。わが水兵委員会は兵士諸君とともにその実現のため全力を尽くすことを誓う。

本紙は兵士諸君とともにある。日常の要求や不満をどしどし投書してくれることを待望している。

莊重は肩の力をぬき万年筆を置いた。

周囲はすっかり暗くなっている。古びた柱時計を見た。夕食の時間はとうに過ぎていた。座卓の周辺には書き損じた原稿用紙が小山のようになっている。それをちらっと横目で見た莊重は、あらためて阪口喜一郎の苦労を思った。

その翌日の午後、錦織がきて、原稿に目を通した。

「三十二年テーゼのところ、少し硬いと思いますが、これでいいでしょう。兵士からの投書は一回で掲載できないほど集まっていますから、明後日の夜までにはガリ切りを終え、印刷したいと思っています」

錦織からクレームが出るのではないかと思っていた莊重はほっとした。

錦織は原稿を二つ折りにして懷に入れ、すぐに部屋を出ていった。

ガリ切りは古田が担当した。完成した二枚の原紙は円筒に入れ、マントの下に隠して黒崎の家に持ち込んだ。

十月上旬の日暮れは早かった。

簡単な夕食をすませた古田と黒崎は、窓に毛布を張り付け、特高に踏み込まれても発見されないよう巧妙な細工を施した床下の隙間から謄写版を取り出した。古田が蠟燭の熱滴を焼き鋺で原紙を木枠に貼り付けた。黒崎が印刷台にザラ紙を二十枚ほど置く。ガラス板の上

にインクを盛りつけローラーで均したあと、下方から上方に向かって原紙の上を滑らせる。古田が木枠を上げると同時に黒崎が刷り上がった用紙を取り出した。

「ちよつと見せてくれ」

古田は刷り上がった一面の刷り上がり具合を確認した。

「いい感じた。黒崎君、取る方はまかせるぞ」

「はい」

緊張した声で黒崎が返事する。

インクを一回馴染ませれば二十枚は刷れる。刷り終えたザラ紙は黒崎が耳を揃える。慣れた手付きだった。二人でやったので百数十部の新聞を刷り上げるのに三時間もかからなかった。

古田は古新聞の上でローラーのインクを抜き取りながら、

「それにしても黒崎君は新聞の耳を揃えるのが上手だなあ」

と言った。

「いや、それほどでもありません」

年下の黒崎は照れながら答えた。

「新聞配達をしていたんだってね」

「ええ、少しの間でしたが」

「石川さんもいい同志を見つけてくれたもんだ」

古田は笑顔で言った。

「新聞は十五部ほどわしが持って帰るが、残りは謄写版と一緒に隠しておいてくれ」

「わかりました」

古田は新聞を二つ折りにして包装紙にくるみ懐に入れ、その上にマントを羽織り部屋を出ていった。

外に出た古田は暗闇の道を歩いて荘重の下宿に向かった。

その翌日の正午過ぎ、荘重の下宿に錦織がやってきた。

錦織は荘重から渡された「聳ゆるマスト」第五号に目を通した。

「再刊号にしてはまずまずの出来ですね。十部は党中央に送り、五部は私が保管し、残りを呉に持込みます。その持込み方法ですが、呉線を利用すると特高刑事の臨検があることも予想されますので、徒歩でやる以外にないでしょう。木村さん、その任務の適任者は誰がいと思いますか」

「列車で一時間余り。徒歩となると半日仕事です。若い人でないときついと思いますので

黒崎君にやってもらうのが一番いいのではないでしょうか」

「私も同感です。では明日の午後にも彼を出発させましょう。渡す場所は呉の中通八丁目にあるカフェ摩天楼、そこで住み込みで女給として働いている佐藤静江さんです」

「黒崎君への連絡はどうしますか」

「私がとります」

打ち合わせが済むとすぐに錦織は部屋から出ていった。

翌日の昼過ぎ、黒崎保は油紙の上に包装紙にくるんだ新聞を、使い古したリュックに入れて家を出た。簡単な地図は渡されていたが徒歩で呉に行くのは初めてだった。錦織から表通りはできるだけ避けるように言われた。広島駅裏を通り府中を抜け、矢野からは緩やかな勾配になっている熊野へと至り、そこからさらに畦道を歩いて昭和村の神山峠にたどり着く。そこを下っていくと呉の街が一望できるようになる。道は曲がりくねりながら東に向かって延びていた。眼下の正面には低い稜線が東西に延び、海面がきらきらと反射鏡のように光り、数えきれないほどの大小の軍艦が浮かんでいる。その左方の沿岸に黒い建物が密集しているあたりが海軍工廠なのだろう。あちこちに立っている長い煙突からは勢いよく煤煙が出て上空は灰色に覆われている。呉の街は三方を山で囲まれ、山裾まで民家の軒が連なっ

いると聞いていたが、まったくそのとおりで、平地は碁盤の目のように見えるが、山裾の民家は無秩序に山裾に向かって建っている。山道を下るにつれ民家が間近に見えるようになった。多分この道を下っていけば街中にでられるだろうと思い、途中から直線に近い細い道を選んだ。

平地に降りてからは年配の女性に道を尋ね、繁華街の中通にたどり着いたときは夕暮れ時だった。規模からいえば広島よりはるかに劣る賑わいだったが、それでも中心となる中通にはずらん灯がともり、キャバレーやカフェは色彩豊かなネオンサインで飾られ、和服姿の男女が浮かれたように歩いていた。

目的のカフェ摩天楼は、コンクリート二階建のいかにも暗い感じの呉憲兵分隊の建物の斜め向かいにネオンサインを輝かせていた。

黒崎は正面入口の扉の前に立ったが、どうすれば佐藤静江という女性に逢うことができなのか見当がつかなかった。時折、酔客が酒の臭いをまき散らしながら黒崎を押しよけるようにして中に入っていく。そのうち中からボーイが出てきて、未成年者がどうしてそこに立っているのかと訊いた。

黒崎はどぎまぎしながら、

「あのう、佐藤静江という女給さんに会いたいんですが」

と言った。

「佐藤静江さんと知り合いなのか」

「いえ、そうじゃなくて、渡したいものがあるんです」

「そうか。お客が付いてなければいいがな。ちよつとそこで待っている」

ボーイはそう言つて店内に入つていった。

しばらくして、美人で背のすらりとしたエプロン姿の若い女性が店先に出てきて、黒崎を手招きした。

「初めて見る顔だけど、あなたなの、私に渡したいものがあるというのは」

黒崎は無言で頷いた。

「一体なんなのかしら」

「新聞です。花野フジエさんから頼まりました」

「そうなの。わかったわ、いただきます」

彼女は初めて笑顔を見せた。

黒崎はリュックを肩から下ろし、中から厚みのある包みを取り出して佐藤静江に渡した。彼女は包みを素早くエプロンの下に隠し、

「あなたの名前は？」

と尋ねた。

「黒崎保といいます。十八歳です」

「広島から来たんでしょ。列車で？」

「いえ、列車は危ないので歩いて行けと言われました」

「それは疲れたでしょう。帰りの汽車賃は持ってるの」

「はい。持っています」

「それならよかった。気をつけて帰るのよ。ああ、それからね、つぎからはお店が開く前、四時頃に来てくれる。私は住み込みだから、このビルの四階に住んでるの。ちゃんと表札も掛けてあるからノックしてちょうだい」

「仕事中にきて済みませんでした」

黒崎は頭を下げた。

「じゃあ、またね」

佐藤静江は笑顔で手を振りながら店内に姿を消した。

黒崎は佐藤静江に逢い会話を交わしたことで疲れは吹っ飛んでいた。綺麗な和服の上に白い胸高のエプロンを身につけた若い女性と向き合って話をしたことなどこれまで一度もなかったから、顔は上気し胸のときめきはまだおさまっていない。それでも黒崎は中通をぐ

んぐん南に向かって歩き、人通りが少なくなった二丁目付近の大衆食堂の暖簾をくぐり、大盛りうどんを注文した。

数日後、小倉正弘は軍艦白鷹から下船し、和庄の下宿に帰った。すぐに家主の西田のおばさんが部屋にやってきた。

「小倉さん。女の人からの手紙よ。上手な字じゃねえ。これなの」と言って含み笑いをしながら小指を立てた。

「そんなんじゃないやありません」

小倉は差出人の名前を見て、怒ったような口調で否定した。障子を閉めてすぐに開封した。

——広島から品物が届いています。いつでもいいですから受取りにきてください。短い文章だったが意味は理解できた。

その夜、小倉は一番大切にしている和服を着て中通に向かった。カフェ摩天楼はどこにあるかは下調べしていた。扉を開けて入るとすぐにボーイがやってきて、

「お一人さまですか」と訊いた。

小倉が頷く。

「どなたかご指名は？」

「佐藤静江さんをお願いねがいます」

ボーイが離れていつてからしばらくして若い女性が小倉の向かい側に座った。

「ご指名いただいた佐藤静江です。よろしくお願いします」

「お手紙ありがとうございました。軍艦白鷹に乗っている小倉正弘と言います」

「まあ、あなたが。お若いんですね」

「今年の二月が二十歳の誕生日でした」

「じゃあ、わたしは二歳上のお姉さんということになるわね」

静江はそういつて笑顔を見せた。

「ところで何を注文されますか。失礼ですがそのお年ではそんなにお金は持っていないでしょ」

「カフェに入ったのは初めてです。ビール一本で料金はいくらなんですか」

小倉は少し頬を赤らめながら聞いた。

「チップとおつまみを含めて一円といったところかしら」

「じゃあビールをお願いします」

「わかりました。それでは少し待っててくださいね」

静江が軽く一礼してテーブルから去った。小倉は店内を見回した。十脚以上あるテーブルは三分の二程度お客が座っていたが、自分のような若年者はいないようだった。二等兵の俸給は一カ月六円だったから当然といえた。

しばらくして静江がお盆の上にビールとつまみを載せて姿を現し、小倉の右側に座った。

「お待たせしました。さあ、どうぞ」

と言って小倉にグラスを勧めながらビール瓶を両手で持った。和服の袖口から白い肌の二の腕がちらりとこぼれる。

「あなたは飲まないんですか」

小倉は琥珀色のビールが入ったグラスを持ったままの姿勢で言った。

「女給の仕事はお客さんに飲物を勧めるだけ」

静江は小倉の顔を見ながらにこつと笑った。

一つのテーブルに男女が座り、男だけがビールを飲むのは楽しいようで窮屈な感じだった。小倉はそんな思いを振り払うように立て続けに二杯飲んだ。

その飲みっぷりを見ていた静江は、

「結構いけそうね。でも一本だけにしておきましようね。今夜は飲むことが目的じゃないんだから」

と言つて、風呂敷包みを小倉の前に置いた。女給にしておくのは惜しいような理知的な物腰と表情だった。小倉はビールを一本飲んだだけで彼女と別れたくないという熱い思いがこみ上げてきたが、ぐっところえて椅子から立ち上がった。

静江は小倉を見送るため扉の外に出てから、耳元で、気を付けて活動してくださいね、と囁くように言った。

これが一目惚れというのだろうか。小倉は下宿に帰り、寢床に横になつても静江の笑顔が脳裏に浮かびなかなか寝付かれなかった。

しかし朝起きたときには百部余りの新聞の配布が気になり、決められたルートで同志の下宿に届け、同志のいない艦には艦名と宛名を書いた封書を第一上陸場に設置してある郵便箱に入れた。

小倉が乗艦している白鷹にも数名の読者がいたが、読者の感想は予想を上回るものがあった。小倉は精力的に稲垣宏、佐藤彊、宮内謙吉などと接触し、読者の反応を確かめた。

小倉は「聳ゆるマスト」第五号の読者の反応を伝えるため、つぎの下船日の午後、広島の木村莊重の下宿を訪れた。

「そうですか。半年ぶりじゃったが読者は喜んでくれたんですの。わしが書いた文章は拙いもんじゃったけえ心配しとりましたが、安心しました。小倉さんから聞いた話はオルグの錦織さんに伝えますけえ」

木村は嬉しそうに言った。

「私の投書、どうなるんですか」

「錦織さんが五月号は投書が多くて、第六号に回すと言っていました」

「それを聞いて安心しました。あの事件は水兵にとっては不愉快きわまるものですから、掲載されると痛快に感じると思います」

小倉が投書した事件の概要はつぎのようなものだった。

この八月に呉鎮に所属する一艦隊が日向湾沖で数日に及ぶ小演習を実施した。それが終了した夜、機雷施設艦白鷹では、酷使されくたくたになった下級兵士たちがハンモックで眠ろうとしているのを承知していながら、将校や士官たちはガンルームに集まり鉄扉を開放したまま酒を飲みながら大声で会話を交わし、軍歌を歌うなど深夜まで騒ぎ立て安眠を妨害した。これに憤激した水兵たちは人望のある兵士を代表者に選び、静粛にしてくれるよう上申した。これに対し泥酔していた士官ちは血相を変え、上官に対する上申は軍人勅諭に言うところの抗命罪にあたる！兵卒の分際で生意気な奴だ！などと大声で罵倒し、代表者

に集团的暴力を加えた。帰港後、この上官たちにはなんのおとがめもなく、白鷹艦内ではいまでも陰悪な空気が流れている。

この小倉の投書は「小演習中の出来事」という見出しで、十月末に発行された「聳ゆるマスト」第六号に掲載され大きな反響を呼んだ。

小倉が静江から受けとる品物は「聳ゆるマスト」だけでなく、五日刊の「赤旗」や「兵士の友」「文学新聞」なども含まれており、そのたびに摩天楼の椅子に座ることは財政的にかなり無理をしなければならなかった。しかし短時間にせよ静江と二人だけで話ができる幸福感に金に替えられないものがあつた。

それは静江にしても同じだった。下宿している近所の子供たちにも好かれている優しくて芯のある青年をいつのまにか憎からず想うようになっていて、ときには勘定を自分で持つこともある。そして白鷹が市民に公開されるときはランチに乗ってきて艦上にあがり、変装して招待係を務めている小倉に手みやげを渡したりして他の兵士たちから羨望の弥次を受けることもあつた。

5

阪口喜一郎は九月中旬に東京に帰ってから、毎日のようにアジトを変えながら軍事部責任者の長谷川茂と会合を重ね、横須賀の水兵細胞再建のために奔走していた。

そんな多忙な日々を過ごしている喜一郎を仰天させるような事件が十月六日に起きた。

日本共産党員三名が資金調達の目的で東京市大森にある川崎第百銀行を襲撃し、行員にピストルを突きつけ現金三万一千円を強奪したという衝撃的ニュースを翌七日付の新聞各社が一面トップでいっせいに報道したのだ。

梅子を買ってきた朝刊を読みながら、

「資金集めのためわが党が銀行強盗をしただと。そんなばかなことをするものか」

喜一郎は記事を読み終えたあと吐き捨てるように言った。

「どういうことになってるんでしょうね」

梅子が訊いた。

「おそらく特高警察の連中が仕組んだ共産党の威信を傷つけるための謀略事件だろう。いずれ真相は明らかになる」

その夜、御徒町のアジトで軍事部の会議がひらかれ、久しぶりに紺野与次郎と藻谷針一郎が出席していた。紺野は出席者を見回しながら発言した。

「みなさんも新聞記事をお読みになったと思いますが困ったことになりました。党機関は銀行襲撃事件についてなんら関わっていない。しかし新聞各社がいつせいに報道したわけですから、国民、とくにわが党を支持してくれている人たちは半信半疑で受け止めているのではないかと思います。ですから事件に対する党の声明を早急に出す必要があります。原稿は風間委員長と相談して私が書くことになると思いますが、藻谷さん、地下印刷のほう、大丈夫ですよ」

「途中に挟み込む準備はできています」

藻谷がよどみなく答えた。

「今回の事件はこれまでと同じように特高警察による謀略だと思いますが、党内の中枢部にスパイが潜り込んでいる、そんな気がしてならないんです。今年の四月に逮捕された上田茂樹中央委員は闇に葬られたままだし、八月の三好惣次、九月の寺尾一幹の逮捕事件もアジトは幹部だけしか知らなかった。それを考えると今月の二十九日から三十一日に予定して

いる全国代表者会議は中止すべきだと風間委員長に提案しています。この会議は三十二年テーゼにもとづく活動を全国的な規模でどう展開していくかという意味統一をはかる目的で計画されたものですが、どうも嫌な予感がするんです」

「しかし中止するとなると全国の関係者に伝えるのは大変ではないかと思いますが」
長谷川茂が言った。

「問題はそこなんです。こちらから迂闊に手紙を出すと特高に途中で開封され出席者のアジトを知られる可能性があります。しかしそうだとしても招集者全員が逮捕されるよりは被害は少なくてすみます」

「紺野さんはどうされるんですか」

喜一郎が訊いた。

「私は組織部長ですからね。どうすべきか、いま悩んでいるところです」

この日の軍事部の会議は、大森銀行襲撃事件についての声明文を載せたビラを一両日に作成するという確認をして散会となった。

喜一郎はアジトを出て電停に向かって歩きながら、権力者たちがその権力を維持するため卑劣な手段を使って恥じない体質を持っていることをあらためて認識した。

その月の中旬のある日、喜一郎が任務を終え家に帰ると平原甚松が座敷に座っていた。

「やあ、久しぶりだなあ。元気そうだなによりだ」

喜一郎はそう言いながら日焼けして元気そうな甚松の正面に腰をおろした。

「こうして阪口さんと会うのは半年ぶりです」

「甚松さんが逮捕されたということとで心配していたんだ」

「随分ひどいめにありましたが無罪放免となりました。下宿にはなにもないわけですから、二カ月ほどで無罪放免となりました」

甚松の笑顔につられて喜一郎も愉快的気分になった。

「梅子、なにか見つくるってくれんか」

喜一郎の言葉で梅子はすっと立ち上がり、台所に向かった。

「こつちに来る前に莊重さんの下宿に立ち寄ってきたんですが、第五号が出来ていました」

甚松は古びた旅行鞆から角封筒をとりだし、その中から一枚のザラ紙を喜一郎に手渡した。

「聳ゆるマスト」第五号！

喜一郎は紙面を広げ貪るように記事を読んだ。

「投書の内容もみな素晴らしいし、莊重さんの文章もなかなかのものだ」
読み終えた喜一郎は感心した口調で言った。

「でしょう。莊重さんの話によると読者は再刊を歓迎し、記事の内容も評判になっていると言っていました。その読者、何人だと思いますか。百人を超えているそうです」

「百部といえは第四号と一緒にだ。立派なもんじゃないか。つぎは横須賀の番だな。負けるわけにはいかんぞ、甚松さん」

「わかっていますけえ」

甚松が自信ありそうに言った。

「あなた、準備ができたわよ」

そう言いながら梅子が酒肴を入れた盆を持ってきた。

「さあ、上京した記念の乾杯だ！」

二人は半年ぶりに盃を合わせた。

積もる話を語り合いながら、ほどよく酔ったところで喜一郎が言った。

「甚松さんのアジトは横須賀に用意してある。明日にでも軍事部の責任者である長谷川茂さんを紹介するが、油断は禁物だ。横須賀はいまも官憲の警戒がきびしいからな。それで今夜はこの部屋で寝てもらう。二階に六畳間があるんだが、県女時代の梅子の同級生が三人押

しかけてきてな、目黒の洋裁学院に通っている。梅子は気前がいいから部屋代も取らずに使わせているんだ」

「そうなんですか。すみませんですのう」

「なあに、遠慮することはない。そうだろう梅子」

「私は一向に構いませんよ。男勝りですからね」

梅子は冗談をまじえて応えた。

翌日、喜一郎は朝早く一人で出掛け、長谷川茂に甚松を会わせる手筈をとった。

午後、喜一郎と甚松は早稲田のある喫茶店に入った。長谷川が目立たない片隅でコーヒを飲んでいた。二人はそのテーブルに腰掛けた。

「昨日、平原甚松さんがこちらに到着しましたので紹介するため同行しました」

喜一郎は言った。

「平原甚松と言います。よろしく願います」

甚松がかしこまって頭を下げた。

「党中央組織部の軍事部長をやっている長谷川茂です。平原さんのことは阪口さんから聞いています。経験豊かな同志を迎えることができ嬉しく思っています」

そう言つて長谷川は甚松に握手を求めた。

「阪口さん、これで予定していたメンバーが揃いましたので、この場で横須賀軍事部準備委員会の役割分担を決めておきたいと思うのですが」

「はい」

「阪口さんは党中央軍事部の一員なのですが、横須賀の準備委員会の責任者を兼任してもらいたいのですが」

「そのことは組織部長の紺野さんも了解されておられるのですか」

「もちろんです」

「了承しました」

「平原さんには副責任者になつただききたい。部員は横須賀で活動中の目黒亀治郎さんを予定しています。阪口さんから聞かれたと思いますが、平原さんのアジトは横須賀の汐入町に確保してあります。これに住所と家主の名前が書いてあります。家主は党に協力的な人ですから安心してください」

長谷川はそう言つて紙片を甚松に渡した。

「向こうでは水兵細胞再建のため目黒さんが活動されています。彼は以前、鶴見郵便局に勤めながら百部近い無産者新聞を読者に配布する活動などをしていて、二十九年の4・16

事件の際に逮捕されました。しかし容疑不十分で不起訴となり、いまでも地道な活動をつづけている戦闘的な同志です。彼は活動中に知り合った渡辺初代さんと結婚して田浦町のアジトを拠点として水兵の組織化に取り組んでいます。今年の夏には一人の一等兵を〈赤旗〉の読者にすることに成功しました。平原さんは彼と協力してあらゆる方法で党の方針に共鳴する水兵と接触し同志に迎えるよう働きかけてください。そしてできるだけ早く〈聳ゆるマスト〉のような新聞を発行できるような水兵細胞を組織してくれることを中央としては期待しています。阪口さんには横須賀での指導と中央との連絡にあたってもらっています。平原さんは艦の修理のため横須賀に上陸したことがあると阪口さんから聞いていますが、横須賀軍港は道路を隔てた海側は高塀で取り囲まれ要塞のようになっています。兵士との接触は彼らが上陸したときに限られると思います。街中では横浜や川崎の重工業地帯のようなきびしい官憲の監視態勢は敷かれていませんが、活動には十分に気をつけてください。私の話は以上ですが、何か質問がありますか」

「いえ、とくにないです。ただ責任の重さを実感しています。見知らぬ土地でどれほどの成果を上げられるか自信はありませんが、ともかく全力をあげて任務を遂行したいと思っています」

甚松は少し緊張した表情で答えた。

「活動中に感じたことや異変が起きたときにはただちに阪口さんに連絡してください」

「わかりました」

「それから、これは当座の活動資金です」

長谷川は懷から封筒を取り出し甚松に渡した。

甚松は長谷川から横須賀に行く交通機関の利用方法を教えてもらい、喫茶店を出るとすぐに市内の電車に乗った。品川から横須賀線に乗り換え、進行方向の左窓際に座り後方に流れていく風景を眺めていた。横須賀には数年前に乗艦が故障し、修理のためドッグ入りした際、上陸を許可され繁華街を歩いたことはある。しかし列車の窓から東京湾を見るのは初めてだった。横須賀軍港は湾の一番奥にあり、海岸線に沿って工廠が延びているのがよく分かる。甚松は秋空の下でどこまでも波穏やかな広い東京湾を見つめながら、これから数人の同志と一緒に横須賀の地で水兵細胞を作り上げていかなばならないことの困難さに一抹の不安を感じながらも、海軍の象徴ともいえる横須賀軍港において党が挑戦する、その先頭に立つのだと思うと、胸底から青白い炎にも似た闘争心が燃え上がってくるのを覚えた。

汐入町の鳶職人夫婦が住んでいる下宿に辿り着いたのは夕食時を過ぎていた。戸を開けて挨拶すると五十歳前後と思われる女将が、

「布団袋は二階に上げていますよ。どうぞ遠慮なく上がってください」

と愛想よく言った。

「お世話になります。これからよろしくお願いします」

甚松は深々と頭を下げた。

「まあ、そんな大層な挨拶を。私たちはそんな上品な人種じゃないですから、遠慮なんかしないでください。ところで平原さんは夕食はすまされたんですか」

「いえ、暗くならないうちに下宿に着いてから外で食べようと思っていましたから」

「じゃ丁度よかった。余り御飯がありますからむすびを作ってあげましょう」

「いや、それは……」

「遠慮しなくてもいいのよ。うちは二人暮らしだから」

甚松は恐縮しながら二階に上がり、部屋で荷物の紐を解いていた。そこへ軽い足音がして女将が上がってきて、むすびと沢庵の漬物、土瓶と湯呑みを入れた盆を畳の上に置いた。

「どうも女将さん、着く早々にお世話をかけまして恐縮です」

甚松は手で顔を撫でながら何度も頭を下げた。

「食べ終わったらお盆と食器は廊下に出しておいてください」

そう言うのと女将は階下に下りていった。

横須賀に着く早々に温かい人情味にふれるとは思ってもいなかった。甚松はまだ温かさ

が残るむすびを食べながら鳶職人夫婦に感謝していた。

その朝、勤め人を装って家を出た。鳶職の朝は早いのだろう。女将だけが朝の挨拶に応じてくれた。最初に足を向けたのは田浦町にすむ目黒亀治郎の下宿だったが、街の地形を知るため歩くことにした。

朝の九時すぎであつたので目黒は在宅だった。呉軍港で党活動をしていた平原甚松だと言乗るとすぐに六畳間に通された。奥の三畳間には妻の渡辺初代が体調が悪くて横になっているのだと目黒は言った。

甚松は目黒が淹れてくれたお茶を飲みながら、きのう長谷川茂軍事部長と阪口喜一郎と話をしたことを伝えた。

「いままで一人でこつこつやっていましたので平原さんのような海軍内での党活動をしていた先輩が来てくれて勇氣百倍です。よろしくお願いします」

目黒は川崎市生まれで甚松より三つ年下だったが、家庭の事情で横浜第一中学四年で中退するまでかなり勉強しており、鶴見郵便局で働くようになってからも左翼文献を読み漁り、3・15事件の翌年には入党し、発行禁止となっていた「無産者新聞」の配布に協力していた。渡辺初代と結婚したのは4・16事件で逮捕され、証拠不十分で保釈された直後だった。目黒は激しい弾圧がつづく川崎の工業地帯から一時のがれるため横須賀市の汐入町で

初代と生活しながら水兵との接点を探索し、一定の成果を上げていた。その活動に中央軍事部が注目し組織の一員に加えたのだ。

これまでの目黒の活動のすべては喜一郎に伝えられていたが、八月の水兵細胞が憲兵によつて根こそぎ壊滅させられた教訓から、水兵の実名は防衛のため伏せられていた。

日が経つにつれ甚松の活動は次第に軌道に乗り始めた。

目黒から紹介された労働運動の経験のある海兵団所属の一等機関兵は『戦旗』の定期購読者だった。もうひとりとはプロレタリア文学を愛読している一等水兵で、市内の本屋で言葉を交わす機会があり、次回に会ったときは入党を勧めようと思っていた。海軍病院の二等看護兵は徴募兵で左翼文献をかなり読んでいた。砲術学校生の三等兵曹は若林二等機関兵曹の紹介で会うことができた。駆逐艦狭霧の一等水兵には呉軍港での活動を話した。それに加えて短歌の才能がある巡洋艦乗組の一等兵曹、駆逐艦帆風乗組の水兵など、十名近くの兵士となんらかの連絡が取れるようになっていた。

八月末に逮捕された三名の水兵はすべて三等兵だったが、党との連絡がつきはじめて十人近い水兵は現役下士官と古年兵であり、貴重な存在だった。

甚松が横須賀に派遣されてから黨員候補と「赤旗」読者を合わせると十名近くになり、間もなく水兵細胞が誕生するという直前に熱海事件が起きた。

党中央が十月二十九日から三日間の日程で招集した全国代表者会議は、スパイが潜入している可能性があるという理由で直前に中止の決定がなされたが、緊急連絡することができなかった。十一名の地方代表が熱海の伊藤別荘に集結した。

警視庁特高部は特別態勢で二十六日から隣接する旅館で張り込みをつづけており、三十日に伊藤別荘を武装警官隊で包囲し、中国地方オルグの錦織彦七ら十一名全員を逮捕した。また同日、東京市内で風間文吉委員長、「赤旗」編集指導担当の岩田義道、軍事部の長谷川茂ら中央指導部も逮捕され、岩田義道は四日後に西神田署において虐殺された。危険を察知して二カ月前に麻布のアジトを引き払い鎌倉に移住していた紺野与次郎は警官隊の急襲を受け同日、妻ミキとともに逮捕された。

のちにスパイだと判明した、中央組織の中枢部に潜り込み住宅資金局責任者の任務についていた松村昇（本名・飯塚盈延）はその日を境に東京から姿を消した。

この弾圧は警視庁によって全国的規模で展開されたもので、千五百名の党員と支持者が逮捕され、のちに第三次弾圧事件と称されるようになる。

平原甚松は十一月七日未明、汐入町の鳶職人の二階で就寝中、防弾チョッキを着た十五名の警官隊に急襲された。

その八日後の十五日、阪口喜一郎も御徒町のアジトで上野憲兵分隊によって逮捕された。

広島、呉でも内偵を進めていた特高警察と憲兵隊による弾圧が展開され、「聳ゆるマスト」の関係者がつぎつぎと逮捕された。広島市街のカフェ・リラで一緒に勤めていた花野フジエに頼まれ、新聞の受渡し役のため八月からカフェ摩天楼の女給として働いていた佐藤静子(20歳)は十一月二日。中国地方オルグの滝川恵吉(29)と寺尾一幹の婚約者林寿恵子(24)は三日。広島市内のカフェ・リラで働いていた花野フジエ(23)は四日。発行責任者の木村莊重(25)は五日。現役水兵への配布責任者の小倉正弘二等兵(20)とガリ切り・印刷担当の古田稔(23)は七日。助手の黒崎保(18)は四日。佐藤彊二等看護兵(20)は八日。左翼文献所持を理由に海軍病院第七病棟長を解任され海兵団付となっていた稲垣宏一等兵曹(28)は十日。第一次赤化事件で進級停止となった山口義次三等水兵(24)と石川茂一は十三日。左翼文献所持の疑いで駆逐艦白雲の乗組から海兵団付となっていた宮内謙吉三等看護兵(31)は十七日。赤化思想信奉者の疑いで六月に逮捕され、九月に除隊処分を受け、一時出身地の神戸に帰り、そのご大阪の北区で働いていた山下達吉元一等主計兵は二十日。木村莊重の実妹・右田美子(20)は十二月一日。

他の分野の逮捕者と合わせ各警察署の留置場は満員となり、演武場を利用するなど対応に追われ、現役水兵たちは呉憲兵分隊に引き渡された。

東京の白金台のアジトでは梅子が喜一郎の帰りを待ちわびていた。これまで無断で外泊することなど一回もなかったのにいったいどうしたのだろう。あの日、出掛ける前に、「今日はどうもイヤな予感がする」と言っていた喜一郎の言葉が耳にこびりついて離れないでいる。

——ひょっとしたら特高刑事か憲兵に捕まったのではないか。なんの連絡がないのはその間に治安維持法に引っ掛かるような書物や手紙を処分しろということかもしれない。そうにちがいないと確信した梅子は機敏に喜一郎を危険に陥れる可能性のある書物や手紙を処分する作業にとりかかった。

それから数日後の朝、玄関の戸を叩く音がした。

戸を開けると私服らしい男が三人立っていた。

「野村梅子さんですね」

中折帽子を被り口髭を生やした男が訊いた。

「そうですか……」

「ご主人の阪口喜一郎さんの身柄を預かっている上野の憲兵分隊のものです。ご同行をお願いしたいのですが」

「そこへ行けば阪口に会えるんですか」

「そうです」

「じゃちよつと待ってください。支度をしますから」

梅子は鏡台に向かい和服の着付けと髪型を整えた。そしていつも大事にして持ち歩いている地図を小さく折り畳んで手提袋の中に入れ、下駄を履いた。

「すみませんが家主さんに挨拶していききたいのでちよつと待ってください」

梅子はそう言って小路を出て書店に入った。私服は店外で待っていた。梅子は店主に向かって、用事ができてちよつと出掛けてきます。少し遅くなるかもしれないけど心配しないでください、と挨拶しながら手提袋から地図を取り出し細かく破いて屑籠の中に捨てた。

梅子は私服三人と上野憲兵分隊の門を通り、建物の中に入った。分厚いガラス板で仕切られた接見室の腰掛けに座っていると、手錠を掛けられ腰縄を打たれた喜一郎が憲兵に付き添われて姿を現した。一週間あまり見ない間に頭髮は伸び口の周辺も髭で覆われていた。喜一郎はガラス越しに腰を下ろし梅子の顔を見た。

「あなた……」

ひさしぶりに喜一郎の顔を見た梅子はそつと涙を拭いた。

「心配かけてすまなかったな。元気そうなので安心した」

「一週間あまり帰ってこなかったでしょう。心配したのよ」

喜一郎は黙って頷きながら、

「きのう、家の住所を白状した。それでお迎えが行ったというわけだ。家のほうは大丈夫か」

末尾のほうはぐつと声を小さくして喜一郎は訊いた。

「無断で一週間も帰ってこないんだもの。おそらく捕まったのだと思ってね、地図をふくめて危ないものはすべて始末したわ」

梅子も小さな声で言った。

喜一郎は安心したように微笑を浮かべた。

「それから一つ頼みがある。日暮里にまどかという喫茶店があるんだが、わしがその息子と仲良くしていたという理由で此処に一晚留められたんだ。その息子は優しい人間で運動にはまったく関わっていないのに巻き添えにしてしまった。そのことを家人に伝え、謝ってもらいたいんだ」

「わかったわ。今日中にいきますから安心してください」

「時間だ！」

憲兵が冷たい声で言った。

梅子は上野憲兵分隊の建物を出ると、神田駅から電車に乗り日暮里駅で降りた。アジトの

位置を示した地図を手にして歩き廻っていたからおおよその見当は付けていた。

喫茶店に入り来意を告げた。すぐに四十前と思われる派手な服装をしたマダムが出てきた。梅子は一礼してマダムを外に誘い、喜一郎の言葉を伝え深々と頭を下げた。

「あなたが阪口という男の奥さんなの。よくもうちの息子をおもちゃにしてくれたわね。息子の将来をどうしてくれるのよ」

といきなり食ってかかれた。

「でも主人は運動にはいっさい誘っていないと言っていました」

「じゃあなぜ憲兵隊に捕まりブタ箱に入れられたのよ」

「容疑は晴れてすぐに釈放されたと聞いていますが」

「だからといって世間様は許してくれないのよ。息子は一生アカ呼ばわりされて生きてゆかなければならない。その責任をどうやってとつてくれるのよ」

梅子はぼんぼんと飛び出す激しい言葉に圧倒され、一礼して彼女のそばから離れた。

それから数日たって三人の私服が梅子を迎えにきた。阪口と一緒に呉憲兵分隊まで同行してもらいたいと、責任者らしい男が言った。

布団をふくめ家財道具は二階に住む三人の同級生に譲ることになっていたから、梅子は身

軽な洋装で家を出て、家主に別れの挨拶をした。

上野の憲兵分隊の建物内で、喜一郎を移送するため呉から派遣されてきたという三人の憲兵を紹介された。

喜一郎は深編笠を被せられ手錠に腰縄を打たれた和服姿で神田駅から東京駅に出て、下関行の列車で広島に向かった。喜一郎は列車の中程の窓際に、その横に梅子、正面の座席に移送責任者と随行の憲兵、通路を隔てた反対側にもう一人の憲兵が座っていた。

列車が名古屋駅を通過してから、責任者の憲兵が、「列車に乗ればもう逃げも隠れもできん。手錠と腰縄を外してやれ」と部下に命じた。喜一郎は列車の中では一言も喋らず、呉に帰ってから対応を考えていた。

——スパイ松村の卑劣な策動で党中央の幹部や地方代表、そして全国で千五百人といわれる党員と支持者が逮捕された。甚松もおそらく逮捕されたにちがいない。横須賀ではあともう少しで水兵細胞を結成することができたのにという残念な気持はいまでもあるが、軍上層部と下級兵士たちの矛盾はこれから日中戦争が激化するにつれますます強まる事が予想される。結局のところ階級社会がなくならないかぎり搾取する側とされる側との矛盾は深まり、いつの日か兵士をふくめた民衆は蜂起し、かならず要求を勝ちとるだろう。しかしその前にはまだ多くの困難が立ちはだかっている。我々がこれまでやってきた仕事は社

会変革へとつながる道の礎にすぎない。現に一九二八年の「3・15」につづく翌年の「4・16」の大弾圧を受けながらも党は不死鳥のように甦った。そしていまもまた、弾圧による大きな犠牲を払いながらも野呂榮太郎らによって党中央は再建されつつある。天皇を頂点とする強力な権力をもつてしても日本共産党を抹殺することはできない。目の前で己を監視している憲兵たちは我々より一段上の階級に属しているように思っているが、所詮は政府や軍部、資本家の手先にすぎない。その彼らに白旗を掲げることはこれまでの己の人生を否定することになる。たとえ死に至るような事態に直面しても絶対に屈服するわけにはいかなぬ。

喜一郎と梅子、それに三人の憲兵はおよそ二十時間余の汽車の旅を経て呉に着いた。

憲兵分隊の留置場に入れられると井物を御馳走になり、入浴を許され、散髪までしてくれたので東京で活動していたころよりも清潔になった。しかしそれも最初のうちだけだった。喜一郎が見せかけの親切や好意にまったく反応しないことがわかると、憲兵主任は拷問で口を割らせようと山口軍曹と井上曹長に取調べを命じた。

彼ら二人は、予備役になってから呉でどんな活動をしていたのか、横須賀ではどんな任務にっていたのかなどと恫喝まじりの質問を繰り返したが喜一郎は一言も喋らなかつた。二人は喜一郎の黙秘に痺れを切らせ耳元で怒鳴りはじめたが効果はない。彼らは喜一郎を後手に手錠を掛け、丸太を割った内側の一番尖った箇所を並べた割木の上に座らせ長靴で太股の上から踏んづけた。脛の皮膚を伝って体中に激痛が走る。思わず真一文字に引き締めた口元から呻き声が洩れた。それが二時間も続くと神経は麻痺して痛みを感じなくなった。

つぎに両手をロープで縛られ梁に吊された。爪先は板の間から数センチ離れている。二人は交替で竹刀を振り回し力任せに身体を殴打した。打たれた所の被服は破れ血が滲み出た。あまりの激痛に気を失いかけるとバケツで水を浴びせられた。山口と井上はしぶとい奴だと怒声を浴びせながら殴打を続けていたが、二時間も経つと荒い息を吐きながらその場にどつかと腰を下ろした。梁に吊された喜一郎の爪先からは血液が滴り落ち、床に血溜まりができていた。

その夜、監房に放り込まれた喜一郎は激痛のため身動きすらできず、朝食をとることもかなわなかった。

拷問は毎日のように続き、頭上から水滴を落としながら竹刀で殴打することもあったが、軍隊で鍛えた強靱な肉体は一カ月間持ちこたえた

喜一郎の意志の強さと、同じ軍隊のメシを食った仲間をいつまでも拷問することに後ろめたさを感じたのか、憲兵分隊は喜一郎の身柄を呉署に移送した。

呉署では拷問を得意とする特高刑事が待ち構えていた。彼らは逆さ吊りにして身体に蠟燭や煙草の火を当てたり竹刀で殴打しながら、「お前も小林多喜二のように殺してやろうか」などと罵声を浴びせ責めたてた。特高刑事は二カ月かけて甘言を弄したり、あらゆる拷問を加え続けたが喜一郎の完全黙秘を崩すことはできず、白紙に近い調書を三月十日に検

察局に提出し、身柄を広島刑務所に送った。

喜一郎は憲兵分隊の留置場に収容されてから梅子のことが気にかかっていたので、刑務所に収監されてからすぐに妻の梅子に会わせるよう看守に伝えた。しかし刑務所側は予審が終わっていないことを理由に梅子に連絡することも、私信の受け渡しも拒絶した。

喜一郎が心配していた梅子は民間人ということで呉署に身柄を移送され、特高刑事の拷問をふくめた過酷な取調べを受けたが、梅子は治安維持法違反に問われるような本や雑誌はすべて処分していたから、特高刑事からいくら訊問されても、自分は黨員でないので阪口からは党の運動などについては何も聞いておらず、東京の街を歩き廻っただけで何も知らないと答えた。しかし特高刑事はその回答に満足せず、お前は共産黨員だろう、東京では黨員として活動していた、そのことを認めるんだ！と耳元で怒鳴り、部下に命じて鉛筆を指に挟んで押し曲げたり、裸に近い状態にして尖った割木を並べた上に座らせ、その上から革靴で踏みにじるなどの拷問を加えたが、梅子は大声を上げるなどして抵抗し、勾留は一カ月に及んだ。

特高刑事は度重なる拷問を加えたにもかかわらず屈しなかった梅子から警察に有利な供述書を取ることができず、担当官が作成した調書を検察局に送り思想検事の判断に任せた。調書に眼を通した検事は治安維持法違反容疑不十分で不起訴処分もやむなしと決し、呉

署の留置場に入れていた梅子を地裁の取調室に移送した。

身柄を釈放するとき老練な判事は梅子に諭した。

「ご主人の阪口喜一郎さんは呉と東京での事件への関与を勘案すると治安維持法容疑で五、六年の刑が科せられることが予想されます。私共も個人としてではなく、国家の利益を守り社会の安寧のため、法律に基いて厳正に被疑者に対しています。野村梅子さんはご主人と結婚して一年余り生活されていますが、ご主人がどんな仕事をされていたかまったく知らなかったとは私には考えられません。しかし刑事が作成した調書には法に触れるようなことは何も書かれていない。ですから不起訴処分の決定を下しました。でも野村さん、運動にいちど足を入れると本人はその気でもなかなか抜け出すことはできない。とくに野村さんはこれからご主人が出所されるまで一人で生きてゆかなければなりません。余計なお世話だと思いますが、野村さんは警察に勾引されたのは二回目ですから、おそらく呉で生きていくのは困難でしょう。それにこの国はいま戦争への道を歩んでいますから、女の人が一人で生きていくのは厳しいものがあるように思います。今回の事件に巻き込まれるまであなたは東京で暮らしておられたようですから、そちらで生計を立てながらご主人の刑期の満了を待たれたほうがよいのではないのでしょうか」

判事の言葉にほだされた訳ではないが、梅子はまず釈放後の身の処し方を考えなければ

ならなかった。喜一郎が二度とアカの運動をしないと約束して養父母に結婚を認めてもらった、そのいきさつを考えると喜一郎が逮捕されたからといって明神町の養母のもとに帰ることはできなかった。しかし判事が言うように呉では二回の逮捕歴のある二十四歳の女を雇ってくれる会社はないように思われた。白島の実家も父親が僧侶であつてみれば、周囲の眼もあり出戻りを笑顔で迎えてはくれないだろう。梅子はあれこれ考えた末、三人の同級生が暮らしている東京の白金台の借家に一時帰ることにした。洋裁はできるのだから東京で仕事を得ることができらうと思ったのだ。

梅子は東京に行く前に白島の実家に立ち寄った。中風を患っていた父はだいぶ元気になり僧侶としての仕事ができるようになっていた。梅子はこのたびの事件のあらましを父母に話し、喜一郎が釈放されるまで東京で暮らすことを伝え、毎日でもいいから差し入れしてほしい、お金は送るから、と頼んだ。母も父の威馬三も好意的で、梅子の依頼を受け入れてくれた。

その翌日、梅子は広島刑務所の独房で喜一郎が鉄格子を叩きながら大声で自分の名前を呼んでいることを知らないまま東京へと向かった。

喜一郎は梅子が東京に行ったことを誰からも知らされず、特高や刑務所側が梅子との仲を引き裂こうとして面会させないのだと思っていた。だから彼は毎日のように拳で鉄格子

を叩きながら「梅子に会わせろ！なぜ会わせないんだ！」と叫んでいた。

広島刑務所は高いコンクリート塀に囲まれ、太田川沿いの角には高い監視塔が建っており、繁華街のある北側が正面玄関になっている。建物は学校のように一直線に東西に伸び、入ったすぐ右手に女囚用の別棟第二独居房があり、主として街娼が収容されていた。そこから南側の建物が獄舎で、人の手を広げたように太田川に一番近い建物を一舎、南から東に向かい二、三、四舎と伸び、先端の東に向かう建物が非転向の思想犯を収容する五舎だった。各建物の真ん中には通路が走り、その左右に独房が並んでいる。収監者はすべて監房の番号で呼ばれ、喜一郎が入れた独房は看守控室がある突き当たりの部屋の隣りで、日当たりの良い南側の32号房だった。

受刑者にはすべて等級によって服装が区分され、一級は小倉霜降り、二級は青、三級は新品の赤、四級は着古した赤で、思想犯は級外で未決勾留者は青衣、刑期確定者は赤衣を着せられ独居房に入れられ、看守の命令に逆らう者は「厳正独居」と書いた木札が掛けられ運動時間と週二回の入浴には看守が張り付いた。思想転向を申し出るとすぐに新品の赤衣が支給され二舎の独房に移される。

食事は丸形容器で型取ったぼろぼろ麦飯で、赤衣を着た女囚が配膳した。

毎日、梅子に会わせろと鉄格子を叩いていた喜一郎の32号房の二つ隣りの34号房に平原

甚松、その反対の北側の45号房に呉海軍工廠の解雇撤回闘争を指導した古末憲一、46号房に木村莊重、47号房には莊重に短歌の手ほどきをした国本基金夫らがいた。

彼らはこれまでの活動で喜一郎の冷静沈着ぶりに接してきたので、広島刑務所に収容されてからの変貌ぶりに心を痛めていた。

ところがある日を境にぴたりと喜一郎の声が聞こえなくなった。思想犯に好意的な雑役夫が、32号房の収監者は大声を出して暴れるので懲罰房に入れられたのだと甚松に知らせてくれた。懲罰房の中は暗闇で口に防声具を嵌められ、両手は体に前後する密着バンド型の皮手錠を掛けられる。食事の時だけ防声具は外されるが、両手は使うことができないのだと雑役夫は説明した。

喜一郎はその懲罰房の板間の上に横たわっていた。中は暗闇だったが、それでも昼と夜の違いは体感で分かる。夜になると梅子の夢を見た。たった一年あまりの生活だったが、独りになってみると梅子をどれほど愛していたかが身に染みだ。物事の先が読める聡明な女房だった。緊張した任務の連続で金銭的に随分と苦勞をかけたが愚痴ひとつ言わず、三度の飯を食べさせてくれ、ときには旅費さえ工面してくれた。喜一郎は移送中の列車の中で、逮捕されたからには元軍人らしく潔い態度で対応しようと決意したのだったが、梅子のことを想うとその決心が揺らいでくる。それにしても梅子はいまどうしているのだろうか。喜一郎は

無性に梅子に会いたかった。

看守長の大井は長身の体軀を揺すりながら部屋の中を歩き廻っていた。未決囚として収監している喜一郎をこれからどのように扱うかを考えていたのだった。監房で大声を出すからと言っていていづまでも懲罰房に閉じこめておくのは監獄法に違反することになる。あまり身体を痛めつけ衰弱させると一カ月に一回程度、調書をとるため呼出しがある予審判事の心証を悪くすることも考えられる。判事の一人くらいどうということとはなかったが、調書に刑務所内の虐待が書かれると看守長としての責任を問われることも考えられた。

——それにしても強情な奴だ。早く自白してしまえば楽になるのに。

大井は受話器を手にした。すぐに担当看守が部屋に入ってきた。

「32号を懲罰房から引き出してここに連れてきてくれ」

看守に引き立てられるようにして戒具を外された喜一郎が大井の前に立った。

「その椅子に腰掛けろ」

黒縁眼鏡を掛けた大井が顎をしゃくった。

たった数日で坊主頭に毛が生え、口の周囲も髭茫々で、体は衰弱して糞尿の臭いを発している。

「どうだ、懲罰房の暮らしは」

大学卒ということで若くして看守長に抜擢されたという大井は冷酷な声で言った。

「なぜ女房の梅子に会わせないのか、その理由を聞きたい」

背筋を伸ばした喜一郎が訊く。

「受刑者なら受刑者として取るべき態度があるだろう」

「私は何も悪いことはしていない」

「なにを小癪なことを。貴様は天皇に弓を引く治安維持法違反の容疑者、いわば国賊だ」

大井は人差し指を突き出しながら言った。

「私が国賊ならあなたは国民を侵略戦争に導く側の権力者の一人だ」

「わしを犯罪者呼ばわりするとはたいしたもんだ。いいか、この刑務所の責任者は典獄たる所長だが、現場のことはこのわしが掌握している。もしわしに楯突く収監者がいれば痛い目に遭うことになる。そのことは肝に銘じておくことだ。懲罰房は今日で許してやるが今度あばれたら容赦しない。わかったな32号」

大井は憎々しげな表情で声を荒げた。

「梅子との面会はどうなる」

「それは予審廷における32号、貴様が供述調書に協力するかどうかによって判断させても

らう」

——この小役人奴が。

喜一郎は大井の顔を睨みつけた。

大井は看守に顎をしゃくった。

その日の夕刻から喜一郎が32号房に帰ったことを甚松は知り、秘密ルートで仲間たちに知らせた。

刑務所での入浴は週二回、板で仕切った浴室が四つ並んでいる。収監者は通路に並んで監房の番号順に並んで順番を待つのであるが、看守は人数が足りない中で中にまでは入ってこない。だから短い会話はできる。

喜一郎のつぎに入った甚松は、

「阪口さん、もう知っているかもしれませんが、赤色救援会を通じての情報によると東京では二月二十日に築地署で虐殺された小林多喜二の労農葬が三月十五日に官憲の弾圧下で決行されたそうです」

「そうか、憎むべきは天皇制権力だな」

「それから四月二十五日にひらかれた軍法会議の情報ですが」

「うむ…」

「傍聴禁止措置がとられた法廷で、小倉正弘が六年、稲垣宏と佐藤彊が四年、北田健二と宮内謙吉が三年の懲役刑の判決が下り、近くこの刑務所の二舎に移送されるようです。不審なのは山口義次のことです。彼は免訴になったのですが身柄が不明なんです」

「ひよつすると海軍刑務所内で殺られたのかもしれない」

「その可能性はあります。ところで阪口さん、完全黙秘はこれからも続けるつもりですか」
「勿論だ。これも権力側と闘う手段の一つだからな」

「わしも黙秘をつらぬいています」

「奴らの思うようにはさせん」

そう喜一郎が言ったとき、

「32号！入浴が長いぞ」と看守が怒鳴った。

数日が経ち、喜一郎は深編笠を被らされ護送車に乗せられた。護送車の後部は人間の肩幅分で間仕切りしてあり、看守付きなので相手の顔も分からないし会話もできない。

広島地裁に着いてから、地下の留置場に入れられ呼び出しの順番を待つ。

「32番！」という官吏の声がして喜一郎は取調室に入った。これで四月につづいて二回目になる。

「あなたは阪口喜一郎さんですね」

判事が本人確認のため名前を口にした。

喜一郎は頷く。

「前回から一カ月あまり経ち、あなたは三月十日に起訴されていますが、検事が作成した調書には白紙のまままで自白していません。このまま推移すれば未決囚のまま永久に収監されることになりかねません。調書の作成に協力することはあなた自身のためであるわけですから、もうそろそろ考え直していただけませんか」

分厚い六法全書を机の横に置き、机上を小刻みに指でたたきながら判事が言った。

「私のほうからは特に話すことはありません」

喜一郎は毅然とした態度で答えた。

「それでは困るんですよ。あなたの仲間だった人はみんな協力してくれてるんですよ。いくら否定してもあなたがやったことはすべて我々にはわかってる。なのにあなたは黙秘を続けている。いいですか、先ほども言ったように検事調書に協力しないということは、いつまでも未決のまま刑務所にいなければならないということなんですよ」

「話したくないのですから仕方ありません」

「わかりました。あなたがそんなにかたくなな態度をとるのであればやむを得ません。未

決囚として刑務所での勾留を続けます」

判事は憤然とした声で言った。

喜一郎は一礼して取調室を出た。

10・30事件で逮捕された五舎の監房に収容されている党員の中には思想検事が捏造した調書に署名し、治安維持法違反者として判決が下され、下獄している者もいた。

しかし喜一郎と甚松は黙秘をつらぬき、調書への署名を拒んでいるため担当の思想検事は二人を起訴はしたものの、懲役刑の判断材料となる調書を裁判所に送付することができないでいる。

喜一郎は最初のときのように梅子に会わせろと言いながら鉄格子を叩くことが少なくなり、教誨師を通じて入手した『言海』や『広辞林』などを借り受け、裁判関係、特に刑法や監獄法に関した語彙を探し出すなどして学習に励み、午後の三十分の運動時間には同じ六舎の仲間たちとともに太陽の光を浴びていた。

甚松とは一週間に二度の入浴時間に情報の交換をしていて、彼が四月二十六日に起訴されたことを知った。民間人である木村莊重の起訴はかなり遅れるらしい。

季節は梅雨から夏へと移ろった。

ある日の朝、監房のゴミを取りに来た雑役夫が喜一郎に重大な情報をもたらせた。彼は思想犯ではない囚人の一人だったが、温厚な性格と真面目さを評価され舎内の雑役夫として働いている。彼は喜一郎にしか聞こえない小さな声で言った。

「看守仲間が話していたのを耳にしたんですが、阪口さん宛に一週間に一度、弁当の差入れにくるお坊さんがいるらしいんですが、看守長が受付を拒否して追いつ返しているという事です。ですが、この話、私から聞いたということは絶対いわないでくださいよ」

喜一郎はその場に座り両手をついて頭をさげた。

———そうか、義父の威馬三さんが差入れにきてくれたのか。ひよつとしたらそのときに梅子の手紙を持ってきてくれていたのかも知れない。それにしても卑劣なのは看守長の奴だ。

喜一郎は東京で逮捕されてから以降、埋れ火となっていた闘志が急に燃え上がってくるような思いに駆られた。

その翌朝、食事が済んでからひさしぶりに鉄格子を力一杯たたき始めた。

隣室からすぐに看守がやってきて、

「うるさい！　なんで鉄格子を叩くんだ」と怒鳴った。

「聞きたいことがある。看守長に会わせてくれ」

「看守長は忙しいんだ。個々の囚人には構ってはおれんのだ」

「会わせないというのなら一日中でも叩き続けてやる」

喜一郎はこれまで以上に力を入れ、看守長に会わせろと大声で叫びながら鉄格子を叩き続けた。その剣幕に驚いたのか古手の看守は小走りに看守長室に向かった。

「なんだと。また32号が暴れ始めただと。よし、懲罰房に連れてこい」

そういうと大井は物置の中から拷問用竹刀を取り出すと肩を揺るがすようにして懲罰房に向かった。

二舎の奥まった箇所にある懲罰房内には手錠を後手に掛けられた喜一郎が正座にすわり、看守は壁際の木椅子に腰掛けていた。天井には薄暗い電灯が点いている。大井は懲罰房の中に入った。

大井は喜一郎の前に立ち、両手を竹刀の柄頭においた。

「つぎに暴れたらただではおかんと言っておいたはずだ。どういふことか了見を聞こう」

「私宛の差入れを拒否していると聞いたが、その理由を聞かせてもらいたい」

「そんなことは知らん」

「養父の金子威馬三からだ。知らぬはずはないだろう」

「もしかりにそれが事実であつたとしても、差入れを許すかどうかはわしの権限だ。手紙をふくめてな」

「それは越権行為ではないか。たとえ未決囚であつても差入れや手紙のやりとりは許されているはずだ。権力者にとって都合の悪い所を墨で塗り潰すような検閲制度が存在するとしてもだ」

「それが法律の原則であつても、貴様のような国賊は例外だ」

「それは詭弁だ。では所長に会わせろ。直談判する」

「囚人の分際で生意気いふな。所長は貴様らのような囚人と会う必要性はない。前にも言つたように現場のことはすべてわしに任されている。いいか、わしに楯突くとかういうことになる」

大井はその言葉が終わると同時に竹刀を頭上に振りかぶり喜一郎の右肩筋を、続いて左肩筋を打った。不意打ちをくつた喜一郎は前方に倒れた。その背中に竹刀が食い込み鈍い音がした。

「看守！ 此奴を逆さ吊りにしろ」

そばで大井の暴行を見ていた看守二人は急いで喜一郎に取り付き両足首にロープを巻き付け、台の上にあがりフックに通して引っ張った。逆さ吊りにされた喜一郎の体はしばらく

前後左右に揺れ動いていたが、大井は狂ったように竹刀でめった打ちにした。喜一郎の顔は血液の逆流により赫ら顔となり、呻き声を上げていた。

「よし、降ろしてもいいぞ。これで少しは懲りただろう。あとは戒具を付けておけ。電灯は消しておくんだぞ」

荒い息をしながら命令すると大井は懲罰房を出た。

翌日の夕刻、看守の一人があわてたような足取りで看守長室をノックした。

「入れ！」

「看守長！ 32号がまったく食事をしないんです」

「なんだと。よし、すぐ行く」

大井は数分後には懲罰房の中にいた。監房の下方隅にある差入口から入れられた食器はそのままの形でそこにあり、喜一郎は食器に足を向ける形で体をくの字にして横になっていた。

「おい32号、なんで食事をしないんだ」

大井が訊いた。

「何も欲しくない」

小さな声だった。

「医師を呼んでくれ」

大井は看守に命令した。

——少し痛めつけすぎたか。

一瞬だったが反省の思いがよぎった。

しばらくして担当医がやってきた。

「すこし体は弱っているようですが、心拍数や脈拍は正常です」

彼は聴診器を耳から外しながら言った。

喜一郎はその日の夕刻に32号房に戻された。

その翌日になっても喜一郎は食事をとらなかった。看守長から再度の暴力を受けた場合、死を覚悟してハンガーストライキで対抗する決意を固めていたのだ。

一方、鉄格子を叩き大声で叫んだことを理由に二度にわたり戒具を使用して喜一郎を痛めつけた大井は少しあわてていた。共産党員であれば警察署の取調室で拷問に掛け、死に至らしめても責任は問われないという風潮は出世を狙う特高刑事の中の一部にあったが、その時流に乗って容疑者としての共産党員を虐殺することは取調べに当たった特高刑事といえどもそれなりの覚悟が求められた。

しかも刑務所は法律の違反者を収容する国家の施設であり、監獄法の違反行為者に対する戒護の方法として独居房に拘禁し戒具を使用するには所長の許可を得なければならないことが施行規則によって決められている。

喜一郎がハンストに入った三日目、大井看守長は典獄といわれている刑務所の最高責任者である所長室に呼ばれていた。所長は白髪が目立つ恰幅のよい、いかにも地方の高級官吏を思わせる風貌をしていた。

磨きあげた黒檀製の両袖机を前にして皮張りの豪華な腰掛けに座ったまま、所長は看守長の大井に言った。

「詳細はきのう担当医から聞きましたが、32号はハンストに入ったそうですね。当直看守からも事情を聞きました。大井君は所長である私の許可なしに戒具を使い、32号を逆さ吊りにして竹刀で殴打した、そのことを認めますか」

「はい、32号が前回に続いて大声を出して鉄格子を叩くものですから」

「大井君、私はあなたの能力は高く評価しています。しかし収監者を戒護するため暴力を振るってよいという文言は法律のどこにも書いてありません。刑務所は未決拘留者ないしは下獄した人たちを収容するところで、戒具の使用は時間を限定されて許されていますが、

竹刀で殴打するなどの暴力行為は許されていません。しかしあなたは私の許可を得ないで収監者を懲罰房に入れたり、戒具を使用している。そのことは前々から聞き及んでおり苦々しく思っていました。そこへハンスト騒動が起きました。当刑務所には共産党員をふくめ多数の思想犯が収監されています。ハンストが全体に飛び火したらどうなるか、あなたは考えたことがありますか」

直立不動の姿勢で立っている大井は額に冷や汗を浮かべ、所長の発言を聞いていた。

「いいですか。これからは私の許可なしに懲罰房や戒具を使用することを禁じます。もちろん竹刀を使つての暴力行為もです。当面、あなたがなすべきことは32号のハンストを説得して止めさせることです。それらのことが守れないときはあなたの処遇について私なりに考えさせてもらいます。あなたが当刑務所の名を汚すことがないよう努力してくださいとを願っています」

所長の説教はそれで終わりだった。

大井は少し肩を落としながら自室に帰ったが、性格は容易に変わるものではないから、喜一郎に対する憎しみの炎がいつそう燃え上がっていた。しかし現在の局面はそれを行動や顔に表す時期ではなく、何かの餌を与えてハンストを止めさせなければならぬ。

——さて、何を餌に使うか。

と考え始めたとき、金子威馬三の差入れを許可することを思いついた。これならかならず32号は飛びついてくるはずだ。

大井は受話器を取りあげ、担当看守に32号を自室に連れてくるよう命じた。

喜一郎は二人の看守に抱き抱えられるようにして看守室の木椅子に座らされた。

「いつまでハンストを続ける気だ」

大井が訊いた。

「このままずっとだ」

喜一郎は答えた。

「どうだ。思い直す気はないか。といっても条件なしでは応じることはできんだろう。どうだ、金子威馬三からの差入れを許可することで手を打たないか」

その大井の言葉に喜一郎の眼が一瞬光ったが、すぐに懐疑的な目付きに変わった。

その心の変化を大井は見逃さなかった。

「わしも男だ。看守長の名において約束は守る。もしわしが約束を守らなかったときには所長に直訴すればいい」

喜一郎は、

「いいだろう」

と言った。

大井は取引が成立したことで安堵し、二人の看守に喜一郎を医務室に連れて行くよう命じた。

喜一郎は医務室の診察ベッドに横たわった。

担当医は聴診器を耳に当て心拍数と脈拍を測定し、体のあちこちを触診したあと、

「ハンストを始めて三日目ですから、それほど体力は弱っていませんが数日間はお粥のような柔らかな流動食を与える必要があります。処方箋は私が書きますからその通りにしてください。所長には私のほうから報告しておきますが、なんらかの問い合わせがあるかもしれません。そのときは辻褄が合うように話をしてくださるようお願いいたします」

と看守長の大井に言った。

大井は渋い顔をして頷いた。

喜一郎は32号房に戻され、一週間ほどで体力を回復した。その頃から金子威馬三から一週間に一回の割合で差入れが届くようになった。筍の皮に白米で作った握飯が六つほど二列に並べられ、中には梅干しが入れてありほどよい塩味がついた美味なものだった。それを食しながら梅子が元気で暮らしていることに確信を持った。憲兵隊や警察署の留置場で連続した激しい拷問を受け、精神的な余裕を持つことができないまま刑務所に収容され、それが

衝動となり梅子の名前を叫びながら鉄格子を叩いた。いまにして思えばその行為は五舎に勾留されている同志たちを心配させただけでなく、元海軍下士官として、いや日本共産黨員として恥ずべき行為であつたことを反省しなければならなかつた。

喜一郎は梅子のことを想つた。彼女を心から愛していることはいまでも変わっていないが、彼女は自分が逮捕され刑務所に勾留されてからは社会の荒波に揉まれながら自分の力で生きていかなければならない、そのことへの思考が抜け落ちていたことを差入れの握飯を食して初めて思い至つたのだ。そしてまた、これまで兵士たちや、社会の底辺で生きていく人たちに向かつて高邁な発言をし説得をもしてきた、そして自らが関わつた新聞に先鋭な政治的な記事を書いてきた。そうした自分の行為がたとえ純粋であつたとしても、指導者としての包容力に欠けた人間であるように思えた。

それにしても梅子はいまどこで働いているのだろうか。ひよつとしたら実父の金子威馬三に差入れを頼んで東京で働いているのではないか。彼女の洋裁のセンスと腕前は上京する前に白島でアルバイトをしていたときに証明されている。伯太村では堀川一芳の家に居候し、その時に二人の子供たちの洋服を作つたとき家族みんなから喜ばれ、自分も嬉しく思つたものだ。

——梅子、いま何処にいる。ひよつとしたら白金台の家で生活しているのか。

喜一郎は獄衣の袖でそっと涙をぬぐった。

差入れが届くようになってから喜一郎は精神的に余裕が持てるようになった。六つの握飯はそのつど雑役夫の手によって甚松、莊重、古末らに配られた。同志に刑務所暮らしを元気に過ごしてもらいたいという喜一郎の配慮だった。

獄舎の内部が朝夕めつきりと冷え込みはじめた十月中旬のある日、喜一郎はひさしぶりに地裁からの呼出しがあり、警護車に乗せられた。

検事室には新任の検事が座っていた。歳は四十前後で眼鏡を掛けた平均的な体躯だった。型通りの氏名の確認をしたあと、検事は質問を始めた。

「関係書類に目を通したところ前回の取調べは五月だったようですね。それから五カ月が経ちました。調書に協力しようという気になりましたか」

「特に私のほうから言うべきことはありません」

「そうですか。前任者も言ったと思いますが、あなたがこのまま黙秘を続ければ未決囚として刑務所にずっと居なければなりません。こちらとしてはあなたが日本共産党員であり、これまでどんな活動をしてきたかは治安当局の調査と貴方達の仲間の供述によってすべて把握しています。あなたが調書の作成に協力してくだされば刑期の求刑についても相応の

配慮をするつもりでいます。どうですか、悪くない話だと思うのですが」

検事は表情を変えることなく言った。

「協力してくれと言われても私は犯罪に問われるような悪いことはしていませんので答えようがありません」

喜一郎は検事の顔を見ながら言った。

「そうですか。ご存じかと思いますが、あなたが所属する日本共産党員の中には転向する人が中央幹部の中にも出てきています。あなたのように自らの思想を守り抜くという生き方もありますが、出所を待ちわびている人もいるんじゃないですか。いま一度よく考えてみてください」

喜一郎は彼の甘言を聞きながら、年に似合わぬ老獪な検事だと思った。

検事は喜一郎の返事を待っていたが、背筋を伸ばし、口を真一文字に結んでいる表情を見て、

「そうですか。協力していただけないということですね。検事局からの呼出しはこれが最後になると思いますが、考えが変わりましたら刑務所の担当者を通じてこちらに連絡してください。善処するつもりです」

喜一郎は彼に一礼して取調室を出た。

その夜、喜一郎は薄暗い電灯のついた無機質な天井を見ながらこれから先のことを考えていた。検事の誘導尋問にひっかけられるほど若くはないが、自白をしなければ未決のまま刑務所に繋がれたままになることは十分に予想できた。しかしその環境から逃れるため検事の誘導に乗れば、それが端緒となり全体へと広がっていくであろうことは明らかだった。「聳ゆるマスト」の第一号から四号までの発行や配布にかかわった逮捕者はまだ十人に満たないが、百名に及ぶ読者の中には「赤旗」や「文学新聞」などを併読している兵士もかなりいて、その氏名が明らかになれば大勢の逮捕者がでることになり、軍隊内は大騒ぎになるだろう。また横須賀では正規の細胞が誕生する前に逮捕されたため日の目を見ることはできなかったが、党員候補をふくめ十人余りに及ぶ。これらの協力者は絶対に守らなければならぬ。それは自分の果たすべき責務であり意志にかかわることだった。

赤色救援会や思想犯に好意的な看守や雑役夫を通じて獄舎に届く情報によれば、傀儡満州国ができてから政府や陸軍省による移民政策が奨励され、農村の二男三男や食いはぐれの浪人、一攫千金を夢見る資本家たちが陸統と満州国に渡っている。そして我が身を守ってもらうため軍部の中国全土への侵略戦争を支持すようになり、各界では戦争を賛美する翼賛会がつぎつぎに誕生している。その流れを止めることはもうできないだろう。

日本は満州国成立を宣言したのを期に国際社会で孤立し、本年二月二十四日に国際連盟

総会に提出された対日満州撤退勧告案である「満州国不承認」が四一对一の大差で承認され、日本政府はこれを不服として四日後に国際連盟から脱退した。このことは軍部の影響が政府の中枢に及び、政党政治は危機に瀕していることを証明しているように思われる。

このまま事態が推移すれば、日本は列強国を相手に戦うことになる。そして最終的には工業生産量で世界一の米国と一戦を交えることになるかもしれない。

喜一郎は思った。現役のとき、同僚の西川照三や平原甚松らと社会科学研究会を設立し、資本主義社会の本質や仕組み、階級闘争の必然性などを学び、軍隊内に向けた反戦新聞を発行するため共産党オルグの寺尾一幹に近づき、入党し、拙いながらも新聞記事を書くことができるようになった。東京での軍事部責任者としての任務は苦難の連続であったが、あと一歩で成果を上げるところまで漕ぎつけることができた。その直後に逮捕されたため実りを掌中にすることはできなかったが、絶望はしていない。いずれ党は全国的に再建され、大きな力を発揮するようになるだろうと確信しているからだ。

それにしても梅子は元気で働いているのだろうか。結婚生活はたった一年でしかなかったが、喜一郎が党活動に専念したためいつも生活は苦しかったはずなのに、梅子はその苦しさを口にだしたことはなく、交通費などがないときなどいつも笑顔で応じてくれた。あの楽天性はどこからきていたのだろう。監房の上部に付いている小さな窓から見える季節ごと

の空の色は晴れの時も曇りや雨の時もあるというのに、梅子の顔はいつも晴れやかだった。刑務所に閉じこめられてからその梅子に一度も逢うことができないでいる。

そこまで考えたとき、喜一郎は「おっ」と小さな声を出した。大井看守長とやりとりしたときは差入れのことしか考えていなくて、こちらから金子威馬三に手紙を出し、梅子の住所を教えてもらう方法があることを忘れていたのだ。

喜一郎は教悔師が来たとき便箋と封筒を頼んだ。金子威馬三の住所は広島市白島町の下に寺の名前を書けば届くはずだった。喜一郎は、これまでの度重なる差入れの謝辞を述べるとともに、梅子に手紙を出したいので、わかっていれば住所を教えて欲しいという文章を書きつづり、看守に託した。

その翌日、喜一郎は大井看守長に呼び出され、机の前に置いてある木椅子に座らせられた。

「この手紙はなんだ！」

大井は喜一郎が看守に託した手紙を目の前に突きつけながら一喝した。

一瞬、喜一郎は彼がなぜ怒っているのかわからなかった。

「未決囚の私信は認めることはできないのだ」

大井は喜一郎の顔を見ながら怒りの表情で言った。

喜一郎はその言葉を聞いてかつとした。

「なぜ自分の女房の住所を教えて欲しいという手紙を禁止するのだ。法的根拠を示しても
らいたい」

「貴様が未決囚であり、国賊だからだ」

「そんなことは監獄法には書いてないはずだ」

「なんと云おうと当刑務所では未決囚の手紙は禁止している」

「所長に会わせてもらいたい。直談判する」

「この刑務所では所長への直談判は許されておらん。獄舎の責任はすべてこのわしに任さ
れている」

「それは看守長の越権行為だ。嚴重に抗議する」

「抗議するだと。生意気な奴だ。おい、32号を懲罰房に放り込め」

大井は怒りの表情をそのままにして二人の看守に命じた。

刑務所の落葉樹は太田川からの西風が吹くたび黄葉はさわさわと音を立てながら踊るよ
うにして地上に落ち周辺の大地を黄土色に染めた。監房内は吐く息が白くなるほどの寒さ
だった。ぼろぼろ飯は冷たくて箸で掴むことはできず、具の薄い味噌汁は温かさを失ってい

た。この季節、収監者にとっての唯一の楽しみは午後の散歩の時間だけだった。

喜一郎は懲罰房に閉じこめられてから抗議のハンストに入った。

担当看守は翌日の朝食後に気がつき、看守長に報告した。

大井はすぐに懲罰房に足を運んだ。喜一郎は体を上向きにして目をつむり横たわっていた。大井は看守に扉の鍵を外させると監房内に入った。

「おい、32号、なぜ食事をとらないんだ」

喜一郎は答えない。

「今度ハンストをすれば容赦しないと云ったはずだぞ。なぜ答えない」

返事をしようとしないう喜一郎の態度にいらだった大井は喜一郎の体を革靴で蹴りあげた。それでも喜一郎は一言も発しない。大井はしばらくその場に立ち喜一郎を睨みつけていたが、監房を出ていった。

大井は所長室の扉をノックした。

「どうぞ」

所長は部屋に入ってきた大井の顔を見た。

「所長、32号が昨夕からハンストに入りました。出勤してからすぐに監房に足を運んで問い質したのですが沈黙したままで、どうしたものかと相談に上がりました」

「32号がハNSTに入ったことに心当たりはないんですか」

「私はこの前に言われた所長の訓示を固く守っています」

「そうですか。たしか32号は未決囚でしたね。そうであるとすれば当刑務所の名誉を守るためにもハNSTを止めさせなければなりません。32号を人目にふれない監房に移し、医師と相談しなから事にあたってください」

「わかりました。では失礼します」

大井は所長に敬礼すると部屋を出た。

手錠を掛けられた喜一郎は看守二人に支えられるようにして二舎の奥まった監房に入れられた。

大井が監房の外で待っていると担当医がやってきて、喜一郎を仰向けにさせ、体調の検査を始めた。

「今日で二日目ですね。心拍数も血圧値も異常は認められません。しかしこのまま絶食を続ければ二週間余りしか命はもたないと思います。それを防ぐにはゴム管を口から食道に通して胃に栄養を注入しなければなりません。それを試してみますか」

担当医は傍に立っている大井に訊ねた。

「しかしこれは本人が同意する意思がないと口で言うほど簡単にはいきません。少なくとも

も二人の看守の協力が必要です」

「では外で待機している看守に中に入ってもらいます」

大井は二人の看守に中に入るように命じた。

担当医は医療鞆の中から細いゴム管を取りだし、二人の看守に喜一郎の上半身を起こすよう命じ、固く閉じられた両顎の間にナイフのような金属片を通しこじ開けようとした。しかしその行為は簡単に失敗した。人間の両顎の力は強くて本人にその意思がないかぎり容易に開かすことはできないのだ。

「仕方ない。鼻の穴から入れることにします」

担当医は二人の看守に喜一郎の頭をしつかりと固定させ、鼻の穴からゴム管を通し牛乳を流し込んだ。その瞬間、喜一郎は大きく咳き込み牛乳を吐き散らした。

「どうにもならんなあ。最後の手段としてお尻の穴から入れましょう。しかし肛門の近くは排泄物が滞留していますから、かなり奥の方のまで入れないと効果はありません。それでも栄養を吸収する小腸までは届かなくて、やらないよりまし、といったところですかね」

担当医はそう言ってから、看守に命じて喜一郎をうつぶせにさせ、ふんどしを取り除き、両側から臀部を引っ張るようにさせ潤滑油を塗ったゴム管を肛門に挿入しはじめた。喜一郎は呻き声を上げながら下半身を動かして抵抗したが、二人の看守に押さえ付けられてい

るのでどうすることもできない。直径一センチほどのゴム管は何回も内部の障害物に突き当たりながら二メートルほど入った。医師は喜一郎の体を仰向けにさせ、ゴム管の先に漏斗のようなものを取付け、時間をかけて栄養液に続いて牛乳を注ぎ込んだ。

その日から看守による二十四時間の監視態勢が始まった。

朝夕の二回、医師による肛門からの栄養補給が行なわれていたが、喜一郎の体力と気力は次第に衰えていった。

ハンストが二週間を超えたところには喜一郎の身体は痩せ細り、一日の時間の経過すら明瞭に区別ができなくなり、いつも夢現の世界を彷徨っていた。子供の頃よく遊んだ信太山の風景、早世した父の顔、病弱だった二人の姉の顔、優しかった母の笑顔、尋常小学校時代からの親友だった堀川一芳、高田春次、藤野利三郎、恩師の松下ユウ先生などの顔が走馬燈のように現れては消えて行く。藤野リエとの恋はいまも新鮮で、妙福寺の境内で下腹をさすりながら子供ができたことをうち明けた、あの時の羞恥心と嬉しさがまじりあった顔は脳裏に焼き付いている。頬笑んだ野村梅子の顔もよく現れた。苦勞をかけてすまなんだなあ、と声をかけると、あなたの活動を支えるのが私の生き甲斐だから、と言って笑顔を返した。共に軍隊内で反戦の意志を共有し、劣悪だった下級兵士の待遇改善のため闘った百人に及ぶ仲間達は正義感が強く、いい奴ばかりで、日本軍隊内における初めての反戦新聞「聳ゆるマ

スト」の発行に欠かせぬ存在だった。新聞の発行と普及のため献身的な活動を展開した平原甚松と木村莊重、それに寺尾オルグのことも忘れることはできない。最後の乗艦となった戦艦伊勢は最大排水量三万一千吨、乗組員は千五百人いたから、勤続十一年で得ることのできた第二機関兵曹など取るにたらぬ存在で、下級兵士たちに対し理由など必要としない私的制裁を加えることができる、その程度の存在価値しかなかった。だからこそ社会変革と人間的生き方を求め、同僚の西川照三、一等兵の平原甚松らと一緒に社研を創立し、やがて日本共産党員として活動するようになったのだ。それにしても自分は運の良い男だと思った。呉ではきびしい官憲の追及の網を逃れ、東京で活動することができ、同志との連携で一定の成果を上げることができた。これも党中央の指導と、いつも貧しい家計のやりくりをしてくれた梅子の支えがあったからだ。

喜一郎は時間の経過とともに思考力がしだいに鈍くなっていくのを穏やかな気持で受け止めていた。走馬燈の回転が急にゆるやかになり鮮明度が落ちてくる。頬笑んだ梅子の顔が正面を向いた時、ふっとその明かりが消えた。

その翌朝、まだ朝靄が立ちこめている太田川の側道を金子威馬三が不自由な右脚をひき

ずるようにして、筵を数枚積んだ大八車を曳きながら川下の吉島に向かう姿があった。

(了)

あとかき

戦前の呉は、横須賀・佐世保と並ぶ帝国海軍の三大軍港と称され、常時九十隻近くの艦船が出入りし、湾の東沿岸には軍艦を建造するための工廠が屋根を連ね、戦争末期には徴用工員や動員学徒などの編入などにより呉市の人口は急膨張し四十万人を超えていた。

このため敗戦が濃厚となった一九四五年に入ってから米軍機による空襲が頻繁になり工廠はいうに及ばず、七月一日夜半にはB29八十機が呉上空に飛来し八万個を超える焼夷弾を市街地に投下。折からの西風にあおられて市街地は焼け野原となり、全焼家屋二万二〇五二戸、半焼一一六戸、死者一八一七人、重傷者一一六人、行方不明五二人という大損害を生じた。軍事工場である工廠の施設が壊滅させられたのはいうまでもない。

こうした苦い教訓から、戦後の呉市は「平和都市宣言」を掲げて復興を開始した。

しかしこの精神は年を経るごとに風化し、この十数年来、海上自衛隊基地は年々拡張強化され、一九九一年四月にペルシャ湾の機雷を除去する名目で、呉基地所属の掃海母艦「はやせ」と掃海艇四隻、補給艦「ときわ」が海外派兵されてから以降、米軍の要請による海外派

兵の拠点基地に変貌しつつある。

これに歩調を合わせるように市政も右寄りに舵を切り、○五年四月には戦艦大和の一分の一の模型や「回転」などの小型特攻兵器などを展示した大和ミュージアムを開館。○九年七月四日の時点で入館者（幼児を含む）は五百万人を突破するに至った。これに目をつけた海上自衛隊は二三〇〇トンの退役潜水艦を陸揚げし、道路を隔てた大和ミュージアムの北側に「鉄のくじら館」と称する施設を造り、○七年四月から無料で公開しはじめた。また海上自衛隊では中学三年生の夏休み入隊体験も積極的に受け入れており、平和教育を推進している現場教師の危機感は強い。

○六年六月に日本共産党広島県中部地区委員会内に十二名で構成される「聳ゆるマスト」記念碑建設呼びかけ人会議が設けられたのは、そうした情勢を反映している。請われて会の一員となった私には、全国に発信するための呼びかけ文の作成を依頼された。

私は父親を太平洋戦争で失っている関係で十五年戦争に関する書籍を買い漁り、父が戦死したフィリピン戦線や戦艦大和などについての作品をこれまで同人誌に発表してきた。しかし日本軍による中国侵略の実態については無知に近く、ゼロに近い状態から勉強しなければならなかった。

そうした状況下にあって、ビデオ製作班に随行して阪口喜一郎の古里である大阪の和泉

市に調査のため数回訪れ、黒鳥山公園の東口に建っている喜一郎の顕彰碑、公園内の天皇駐蹕碑、陸軍忠霊塔などを見学し、喜一郎の甥・義喜氏、遠縁にあたる阪口延宏氏、高田春次の長男・高田俊氏、元泉州の自然と文化財を守る連絡会議副会長の辻田政信氏、治維法国賠同盟本部会長の柳河瀬精氏、市議の早乙女実氏から貴重な証言や示唆を得ることができた。また市史編纂室勤務の森下徹氏からは貴重な史料の提供をうけた。

木村莊重の古里、津和野町には〇八年三月初旬に赴き、日本共産党元町議の岩崎清人氏から話を聞いた。木村莊重は出獄後、戦前から戦後にかけて農民運動の先頭に立ち、敗戦後に実施された島根県木部村長選に出馬し、無投票で県内初の共産党員村長となった。

平原甚松は莊重が村長に当選した直後に招かれて木部村に移住し、村役場の職員となった。定年後は、江戸時代から続いていた旧笹ヶ谷鉾山の鉾毒から住民の命を守るために結成された「会」の書記長に推され、町議の岩崎誠会長と二人三脚で県や国と折衝し救済活動に献身。五年後に国との和解を勝ちとった。

この二人の生き方は戦前の日本共産党の不屈の精神を継承・発展させたもので、元木部村内に建っている木村莊重夫妻、平原甚松夫妻の墓はいまも地元の党組織の誇りとして大切に守られている。

喜一郎の妻・梅子は、戦後は広島県北部の御調町に生きた。梅子は三十のとき十五歳の開

きがある住吉春山という寺を持たない僧侶と再婚し、自身は県・郡・町の婦人会長を兼任し、七十歳を少し過ぎるまでその任を務めた。地元の党組織と懇談し喜一郎の思い出を語ったのは一九八一年になってからである。

梅子の妹である幸子さんはいまも健在で、娘の藤井晴子夫妻と同居しているという情報を得て、〇八年三月下旬に「聳ゆるマスト」記念碑建設呼びかけ人会議代表委員の二階堂洋史氏と私は広島市安佐南区緑井の自宅を訪れ、幸子さんから、喜一郎が獄死した直後に父親の金子威馬三が大八車で遺体を引取りに行った、という貴重な証言を得ることができた。

また本書で記述している、一九三二年四月発行の「赤旗」に載った、呉軍港で「聳ゆるマスト」を発行しているという「通信員」の記事、三二年テーゼをパンフレットにした「赤旗」号外、大森銀行ギャング事件に対する「赤旗」号外、「兵士の友」九月一五日付創刊号などは日本共産党中央委員会党資料室に保管しており、資料室の協力を得てビデオ製作班がカメラに収めただけでなく、実物をコピーしてもらうなどして正確を期したことを付記しておきたい。

本書は六章に分けてあるが、第一章のみは日本共産党広島県委員会が発行している週刊「広島民報」〇九年二月から本年一月の一年間にわたって連載したものであり、二章以降は単行本にするため書き下ろしたものである。

本書が史伝小説として世に出ることになったのは、先に述べた多くの方々の貴重な証言と新史料を発見したことにあるが、早い時期から単行本にして発刊することを推めてくれたかものがわ出版編集長の三井隆典氏の尽力のおかげであり、謝意を表したい。

二〇一〇年二月

小栗 勉

〈資料〉

1、「聳ゆるマスト」発行に至る経緯

1929年10月24日に発生したニューヨークの株式大暴落の余波が日本にも押し寄せ、農民・労働者の貧困層が拡大。そうした経済恐慌を乗り切るため天皇制政府は軍部に迎合し中国への侵略戦争拡大の道をつきすすみ、やがて中国東北部を制圧、32年3月1日に清朝の廢帝・溥儀を執政とする傀儡「満州国」を建国。しかし国際連盟総会で一国の支持をも得ることができず、急速に国際社会から孤立するに至る。

軍事力による中国への侵略を押し進める政治と軍部の動きに危機感を持った呉鎮守府管内に所属する兵士数名が、1930年頃、自発的に社会科学研究会を創設した。

当初の主要メンバーは阪口喜一郎（戦艦伊勢乗組・2等機関兵曹）西川照三（2等機関兵曹）平原甚松1等兵、山口義次1等兵、若林2等兵らであった。しかし1931年8月、社研メンバーは治安維持法違反容疑で呉憲兵分隊に逮捕され軍法会議にかけられ、有罪にはならなかったが同年10月、阪口喜一郎、西川照三、平原甚松は赤化信奉者として除隊処分に付され、山口義次、若林は容疑不十分として原隊復帰とされた。

除隊後、5名は社会科学研究会の再建を確認したが、西川照三は故郷の三重県に帰郷。

リーダー格の阪口喜一郎らは具体的な行動を起こすためには日本共産党の指導を得なければならない

と判断し、呉工廠大量解雇事件で〈赤い本屋〉として有名になっていた市内目抜き通りにあった田中書店に出入りし、店主の田中豊の紹介で党オルグの寺尾一幹との接触に成功する。そして翌32年初頭に水兵細胞が誕生。日本共産党呉軍事部水兵委員会として新聞の発行（旬刊B4版2ページ）にふみきる。

2、新聞「聳ゆるマスト」（旬刊）の発行

〈第1期〉

1932年2月～4月（第1号～第4号まで）

発行責任者	阪口喜一郎（30）	海軍予備役2等機関兵曹
投書・配布担当	平原 甚松（26）	海軍予備役1等兵
編集アドバイザー	寺尾 一幹（26）	党呉地区オルグ
ガリ切り担当	林 寿恵子（23）	寺尾の婚約者
軍隊内配布協力者	稲垣 宏（28）	海軍1等看護兵曹
	北田 健二（29）	特務艦朝日乗組2等機関兵
	木村 莊重（25）	海兵団付1等兵
	佐藤 彊（21）	同
発行部数	第1号	約30部

〈第2期〉

1932年10月(第5号)第6号まで

第2号 約50部

第3号 約70部

第4号 約100部

発行責任者

木村 莊重(26)

呉海兵団満期退役1等兵

投書・配布担当

小倉 正弘(20)

軍艦白鷹乗組2等機関兵

編集アドバイザー

錦織 彦七(26)

党中国地方オルグ、出雲市出身

人材発掘担当

滝川 恵吉(26)

同

ガリ切り担当

古川 稔(24)

広島市内在住の石川茂一の推薦

助手・輸送担当

黒崎 保(18)

兄は共産青年同盟員で入獄中

呉の連絡担当

佐藤 静江(22)

カフェ摩天楼の女給として勤務

軍隊内配布協力者

稲垣 宏(28)

海兵団付1等看護兵曹

宮内 謙吉(32)

海軍病院3等看護兵

山下 達吉(25)

海軍予備役2等主計兵

佐藤 彊(21)

海兵団付1等兵

発行部数

第5号 約100部余

第6号 約150部印刷

3、官憲の弾圧により日本共産党組織は壊滅状態に

中央組織に潜入していたスパイ松村昇の手引きにより、1932年10月30日に多数の党幹部が逮捕された「熱海事件」の余波は全国に波及し、広島地方では「聳ゆるマスト」の関係者と全協の中心メンバー45名が逮捕、うち22名が起訴され、組織は壊滅状態に陥った。

中央軍事部で活動していた阪口喜一郎と平原甚松にも官憲の手が伸びた。

1932年11月7日 平原甚松は汐入町のアジトで就寝中、神奈川県武装警官隊に急襲され逮捕。

同 15日 阪口喜一郎は御徒町のアジトで逮捕され、数日後、身柄を引取りにきた呉憲

兵分隊に引き渡された。

4、「聳ゆるマスト」軍隊関係者の判決内容（治安維持法違反）

1933年4月19日 呉軍法会議公判は関係者への判決を下した。

小倉 正弘（23） 懲役6年

稲垣 宏（29） 懲役4年

佐藤 彊（23） 懲役4年

北田 健二（23） 懲役3年

宮内 謙吉(24) 懲役3年

山口 義次(?) 行方不明

1933年11月7日 広島地方裁判所にて判決

平原 甚松(27) 懲役3年6月

1933年12月27日 阪口喜一郎(31) 未決勾留のまま広島刑務所で獄死

1934年1月9日 広島地方裁判所にて判決

木村 莊重(27) 懲役3年



阪口喜一郎



【右】「聳ゆるマスト」の題字
【左】木村莊重と妹の右田美子



平原甚松（左）阪口喜一郎（右）

小栗 勉（おぐり・つとむ）

1938年 広島県呉市に生まれる

1945年 父・六兵衛は海軍設営隊員として徴兵され、この年ルソン島にて戦死

1952年 呉市交通局にバス車掌として入局、のち運転士となる

1958年 日本民主主義文学同盟に加盟、同年呉支部を結成

1964年 小説家をめざし、50歳で呉市交通局を退職

著 書 『軋むクレーン』『父の幻影』『比島駆けある記』など

現 在 日本民主主義文学会会員

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟呉支部顧問

「聳ゆるマスト」顕彰碑建設呼びかけ人会議委員

連絡先 FAX 0823-21-5520

史伝小説 ^{そび}聳ゆるマスト

2010年2月10日 第1刷発行

著 者 ©小栗勉

発行者 竹村正治

発行所 株式会社 かもがわ出版

〒602-8119 京都市上京区堀川通出水西入

TEL075 (432) 2868 FAX075 (432) 2869

振替01010-5-12436

ホームページ <http://www.kamogawa.co.jp>

印刷所 新日本プロセス株式会社

ISBN978-4-7803-0328-5 C0095

かもがわCブックス

①わたしが愛する日本

アグネス・チャン著 四六判204頁 1575 (1500) 円

②レイチェル・カーソンの世界へ

上遠恵子著 四六判196頁 1575 (1500) 円

③京の祈り絵・祈りびとー「信濃デッサン館」「無言館」日記抄

窪島誠一郎著 四六判256頁 1890 (1800) 円

④騙される人 騙されない人【新版】

安斎育郎著 四六判248頁 1785 (1700) 円

⑤地球時代の教養と学力ー学ぶとは、わかるとは

堀尾輝久著 四六判224頁 1785 (1700) 円

⑥みんなで一緒に「貧しく」なろう

斎藤貴男対談集 四六判296頁 1995 (1900) 円

⑦幸福に驚く力

清水眞砂子著 四六判240頁 1785 (1700) 円

⑧ことばの力 平和の力ー近代日本文学と日本国憲法

小森陽一著 四六判232頁 1785 (1700) 円

⑨発信する声

澤地久枝著 四六判240頁 1785 (1700) 円

⑩「痛み」はもうたくさんだ！ー脱「構造改革」宣言

山家悠紀夫著 四六判264頁 1890 (1800) 円

⑪さらば卓袱台ーテレビドラマの風景

守分寿男著 四六判288頁 2415 (2300) 円

⑫豊かさへ もうひとつの道

暉峻淑子著 四六判224頁 1680 (1600) 円

⑬科学にときめく

益川敏英著 四六判212頁 1575 (1500) 円

⑭憲法9条と25条・その力と可能性

渡辺 治著 四六判288頁 1785 (1700) 円